秋　田　市

秋田新都市開発整備事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告書

下堤C遺跡

1987.9　秋田市教育委員会

序

秋田新都市開発整備事業に係る御所野丘陵部の埋蔵文化財につきましては、昭和56年度から対処し、すでに24ケ所の遺跡の調査を終了し、これは昨年度から継続調査した下堤C遺跡の報告書であり、調査の結果、平安時代の集落であることが判明いたしました。

調査の実施にあたっては、県、関係機関の指導をはじめ、地元関係者等多くの方々の積極的なご協力をいただき深く感謝申し上げる次第です。

本報告書が文化財保護のため、さらには研究資料として広く活用されれば幸甚に存じます。

昭和62年9月

秋田市教育委員会
教育長　高　泉　宏　作

例　　言

1．本報告書は秋田市四ッ小屋小阿地字下堤に所在する下堤Ｃ遺跡の発掘調査報告書である。

2．本報告書の執筆、編集は、菅原俊行、安田忠市が行った。

3．発掘調査、整理作業の過程で下記の各氏より指導、助言を賜わった。

　宮本長二郎（奈良国立文化財研究所）、 冨樫泰時（秋田県文化課）

4．石質の鑑定は、秋田県立博物館の照井紀一氏、佐々木厚氏によるものである。

5．遺跡の平面図、土層断面図中のＰは土器(片)、Ｓは石(礫)を示す。土器実測図で断面を黒くしたものは須恵器である。黒色処理された土器は網点で示し、タール状の付着物は点線で範囲を示した。石器実測図の石鏃、鋸歯縁石器等の外形図にはアスファルト付着物の箇所を示した。

6．発掘調査による出土遺物、実測図、写真、その他の記録は秋田市教育委員会が保管する。

目　　次

序

例言

調査の概要…… 1

調査に至るまでの経過…… 1

調査期間と体制…… 1

調査の方法と経過…… 2

遺跡の位置と地形・地質…… 9

下堤Ｃ遺跡

遺跡の概観…… 14

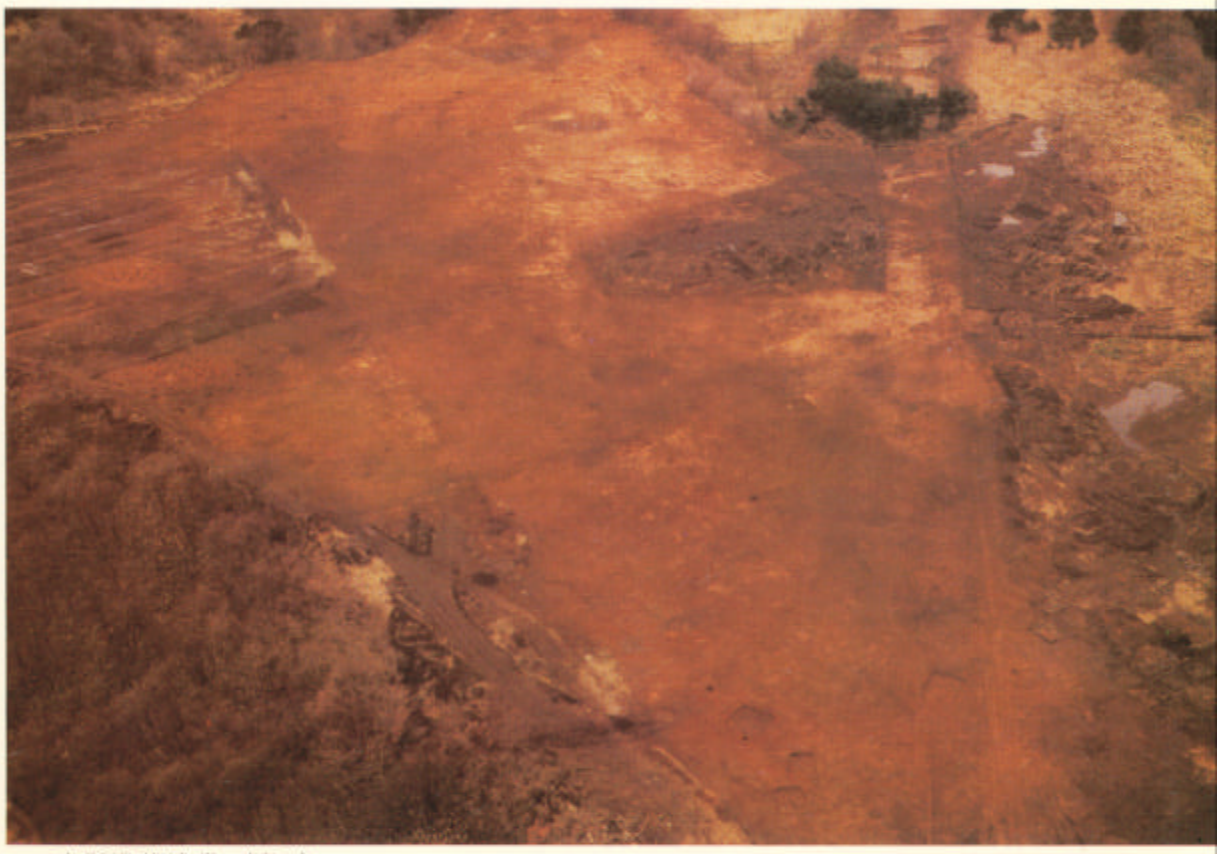
遺構と遺物…… 14

まとめ…… 110

下堤遺跡全景（南→）

下堤C遺跡（南東→）

溝　　跡（南東→）



方形溝状遺構（南→）

調 査 の 概 要

調査に至るまでの経過

秋田市南東部地域は、昭和56年６月の秋田空港の開港、東北横断自動車道秋田線秋田インターチェンジ開設予定等、空陸両面の交通の要衝に位置する所であることから、いち速く開発可能性等についての各調査が実施され、県市総合計画においても産業、住宅団地が一体となった総合的ニュータウン＝臨空港新都市として具体的に位置づけられた。

昭和55年に御所野台地全体の分布調査を実施し、約30ヵ所の遺物散布地を確認した。昭和56年度は開発計画地域内の西部工業団地造成に先だち、**下堤Ｄ遺跡**(秋田市「下堤Ｄ遺跡発掘調査報告書」1982年３月、秋田市教育委員会)の発掘調査を行った。昭和57年度は今後の開発計画に対処するため55年の分布調査に基づき、３ヵ月間で遺跡の範囲確認調査を実施し、範囲確認調査の結果に基づき関係機関と協議を重ね、引き続き年度別に計画的な発掘調査を実施することとし、昭和57年度は**下堤Ｇ遺跡、野畑遺跡、湯ノ沢Ｂ遺跡、坂ノ上Ｃ遺跡、坂ノ上Ｄ遺跡**(秋田市「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1983年３月、秋田市教育委員会)、昭和58年度は**坂ノ上Ｅ遺跡、湯ノ沢Ａ遺跡、湯ノ沢Ｃ遺跡、湯ノ沢Ｆ遺跡、湯ノ沢Ｇ遺跡、湯ノ沢Ｈ遺跡、野形遺跡**(秋田市「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1984年３月、秋田市教育委員会)、昭和59年度は**下堤Ｅ遺跡、下堤Ｆ遺跡、坂ノ上Ｆ遺跡、狸崎Ａ遺跡、湯ノ沢Ｄ遺跡、深田沢遺跡**(秋田市「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1985年３月、秋田市教育委員会)、昭和60年度は**地蔵田Ｂ遺跡、台Ａ遺跡、湯ノ沢Ｉ遺跡**、58年度に調査した湯ノ沢Ｆ遺跡の北西部(秋田市「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1986年３月、秋田市教育委員会)、昭和61年度は**地方遺跡、台Ｂ遺跡**(秋田市「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1987年３月、秋田市教育委員会)の発掘調査を行った。

昭和62年度は、狸崎Ｂ遺跡、地蔵田Ａ遺跡、秋大農場遺跡の調査を実施し、新都市開発計画地区内に所在する27ヵ所の遺跡の調査が一応終了する予定であったが、昭和60年度に調査した地蔵田Ｂ遺跡の保存問題が出てきたため計画の一部見直しがあり、総合公園、医療福祉等複合施設建設予定地にある下堤Ａ遺跡、下堤Ｂ遺跡、下堤Ｃ遺跡の発掘調査が必要になり、昭和61年度に一部表土除去作業を行っていた**下堤Ｃ遺跡**の発掘調査を実施することにした。下堤Ａ遺跡、下堤Ｂ遺跡については調査費の関係で７月以降に発掘調査を行うこととなった。

調査期間と体制

調 査 期 間　昭和62年４月16日～５月29日
　　７月６日～12月10日

調査主体者　地域振興整備公団

調査担当者　秋田市・秋田市教育委員会

調　査　員　菅原俊行、石郷岡誠一、西谷　隆、安田忠市(秋田市教育委員会文化振興課)

調査補佐員　船木佳久子

調査協力員　五十嵐芳郎(秋田考古学協会)、平塚長史(日本大学)

調査作業員　鈴木銀一、鈴木長治、鈴木末蔵、鈴木一美、三浦竹治、三浦馨、三浦吉男、秋本与次郎、三浦三治、水野金光、佐々木多治郎、加賀谷金一郎、鈴木銀三郎、堀野兼雄、佐々木東吉、鈴木藤一、渡部兼治、佐々木小一郎、藤沢啓治、渡部金次郎、鈴木ツヤ、鈴木ウメノ、鈴木鈴子、鈴木博子、三浦千枝子、三浦初枝、三浦トミエ、三浦タキ、三浦ナツ、三浦トキ子、佐々木フミ、佐々木久子、工藤キクエ、熊谷文子、宮田トキ子、高島綾子、伊藤ツギ、長谷部ヤエ子、会場京子、渡部アイ子、渡部ヤネ子、渡部キヨ、渡辺フミ、佐々木ヨシ、佐々木縫子、高橋ヨシ子、矢倉アキ、加賀谷ヒデ、杉沢フミ、杉沢チエ子、鈴木ヒデ、鈴木ヒデ子、持主チエ、艦艦キミ、鎌田ツヤ、佐藤アツ子、鈴木シワ、伊藤礼子、掘野ツタヨ

整理作業員　三浦秋子、堀井律子、伊藤秀子、佐々木カネ、橋本ゆき子、榎江美子、佐々木恵子、鎌田絹子

事　務　員　伊藤茂子、信太　緑

調査の方法と経過

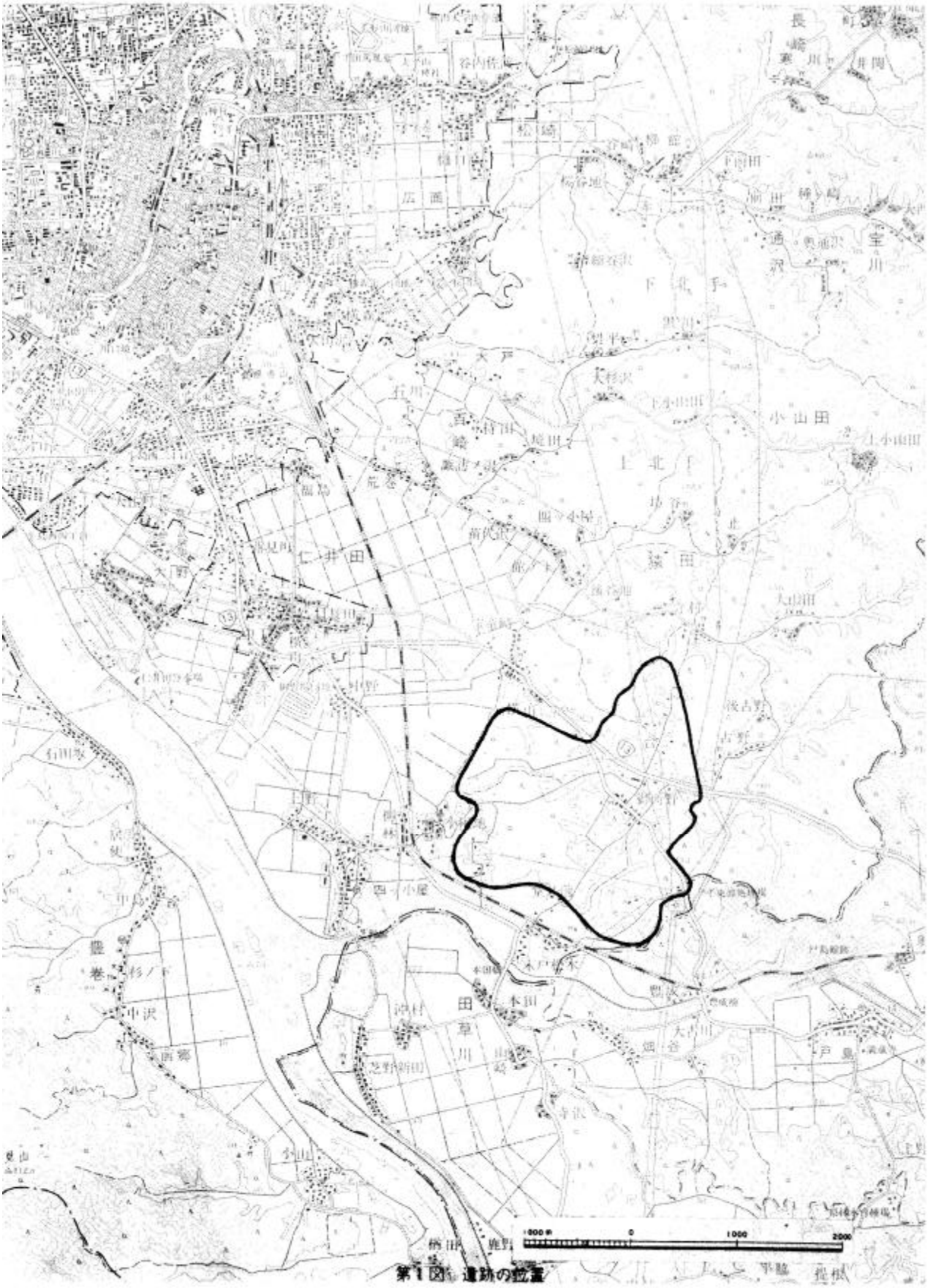
調査区は各遺跡ごとに任意の原点を決めて東西南北(磁北)に基準線を作り、調査区全体に大グリッド(40m×40m)を設定し、さらにその中に小グリッド(4m×4m)を設定し、単位グリッドとした。大グリッドは(1～n)、小グリッドは東西(X軸)に数字(1～10)、南北(Y軸)にアルファベッド(A～J)を配し、その組み合せで遺跡番号、大グリッド番号、小グリッドの順に呼称することとした。

発掘調査は、4月16日～5月29日、7月6日～12月10日の日程で実施した。下堤遺跡(註1)は昭和42年に発見され、昭和43年から昭和48年まで6次の調査がなされ、下堤C遺跡は昭和47年の調査で初めて平安時代の竪穴住居跡を検出した地区である。昭和61年の表土除去の際、北西一南東方向に走る溝跡、十数軒の竪穴住居跡群等が確認され、この台地では初めての平安期の集落が予想されてた。調査結果は31軒の住居跡や方形溝状遺構、土壙等が検出された。

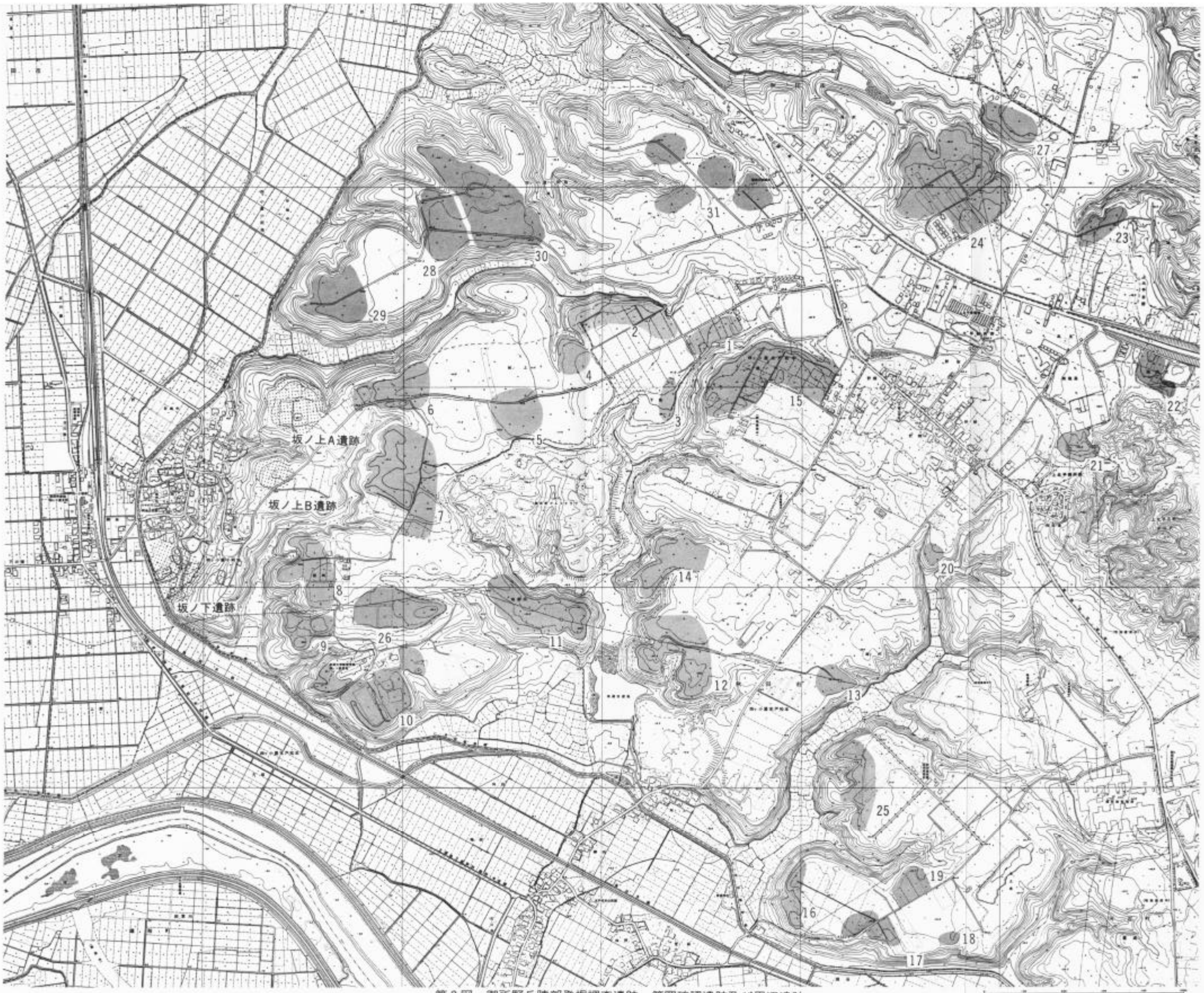
(註1)「小阿地、下堤、坂ノ上遺跡発掘調査報告書」1976年3月　秋田市教育委員会

昭和62年度来跡者　(順不同、敬称略)

冨樫泰時(秋田県文化課)、横山伸司、石川恵美子(秋田県埋蔵文化財センター)、本間　宏(福島県文化センター)、井上秀雄(東北大学)、宮本長二郎(奈良国立文化財研究所)、武藤康弘(東京大学)、小林　都、南部公民館サークル連合会、南部公民館縄文土器を焼く会、南部公民館ふるさと探訪会、大内町文化財保護審議会、御野場中学校生徒10名、戸米川小学校生徒24名、市工業振興局職員



第1図 遺跡の位置



第２図　御所野丘陵部発掘調査遺跡、範囲確認遺跡及び周辺遺跡

御所野丘陵部　遺跡一覧表

			範囲確認調査			発掘調査遺跡		
遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	面積㎡	地目	調査年度	調査面積㎡	内容
1	下堤E	秋田市四ツ小屋小阿地字下堤	縄文	5,625	畑	59	3,340	縄文(中期)集落
2	下堤F	〃　〃	〃	14,375	〃	59	2,950	縄文(前、中期)集落
3	下堤G	〃　〃	旧石器、縄文(中)	5,000	山林原野	57	1,550	旧石器、縄文(前、中期)集落
4	坂ノ上C	〃　四ツ小屋小阿地字坂ノ上	縄文	6,000	〃	57	1,000	縄文(中、晩期)
5	坂ノ上D	〃　〃	〃	14,060	〃	57	1,500	縄文(中、晩期)
6	坂ノ上E	〃　〃	〃	15,000	〃	58	5,000	縄文(中期)集落、9～10c製鉄炉
7	坂ノ上F	〃　〃	〃	37,810	〃	59	18,800	縄文(中期)集落、弥生住居跡
8	狸崎A	〃　四ツ小屋小阿地字狸崎	縄文(晩)	13,750	畑、山林原野	59	1,910	縄文(前、晩期)土壙墓、弥生住居跡
9	狸崎B	〃　〃	縄文	11,250	原野			
10	地蔵田A	〃　四ツ小屋末戸松本字地蔵田	旧石器、縄文、平安	30,000	畑			
11	地蔵田B	〃　〃	縄文(中、晩)、弥生	25,000	山林原野	60	12,000	旧石器、縄文(中期)集落、弥生集落柵木跡
12	湯ノ沢A	〃　四ツ小屋末戸松本字湯ノ沢	縄文	21,555	〃	58	3,000	縄文(中期)、弥生住居跡
13	湯ノ沢B	〃　〃	縄文(前、中)	5,000	〃	57	2,340	縄文(中期)集落、平安住居跡
14	湯ノ沢C	〃　〃	縄文(中、晩)、弥生	11,565	〃	58	4,100	縄文(中期)集落
15	湯ノ沢D	〃　〃	縄文(中)	35,000	畑	59	3,220	縄文(中期)集落
16	湯ノ沢E	〃　〃	縄文	7,500	〃	58	1,920	縄文(後期)
17	湯ノ沢F	〃　〃	縄文、土師、須恵	5,310	〃	58・60	4,400	弥生土壙、平安墓(40基)
18	湯ノ沢G	〃　〃	縄文(後)	1,300	原野	58	400	縄文(後期)
19	湯ノ沢H	〃　〃	縄文	5,940	畑	58	720	縄文(前、中、晩期)住居跡
20	野畑	〃　上北手御所野字野畑	縄文(中)	1,875	山林	57	640	縄文(中期)集落
21	野形	〃　上北手御所野字野形	土師、須恵	5,940	山林原野	58	980	平安住居跡、窯跡
22	深田沢	〃　上北手古野字深田沢	縄文、平安	6,875	畑	59	3,320	平安建物跡、住居跡
23	台A	〃　上北手古野字台	〃	8,440	〃	60	2,000	縄文(中期)集落
24	地方	〃　上北手猿田字堤ノ沢	縄文(晩)	54,670	畑、原野	61	11,500	縄文(中期)集落、(晩期)土壙墓
25	湯ノ沢I	〃　四ツ小屋末戸松本字湯ノ沢			苗圃	60	5,700	弥生
26	秋大農場	〃　四ツ小屋小阿地字狸崎			畑、原野			
27	台B	〃　上北手猿田字寺ノ沢			山林原野	61	1,150	縄文(中期)
28	下堤A	〃　四ツ小屋小阿地字下堤			原野			
29	下堤B	〃　〃			〃			
30	下堤C	〃　〃			〃	61・62	17,700	平安集落
31	下堤D	〃　〃			〃	56	17,000	旧石器、縄文(前～晩期)集落、平安住居跡

遺跡の位置と地形・地質

位　　置

秋田市街から国道13号線を南下し、仁井田、横山を過ぎ、坂を登ると標高約40m前後の広大な台地が開ける。これは奥羽本線四ツ小屋駅方面からもよく見える平坦な台地であり、御所野台地、末戸台と呼ばれている。この台地が秋田新都市開発整備事業計画地域である。

各遺跡の位置については第２図、「御所野丘陵部発掘調査遺跡、範囲確認調査遺跡及び周辺遺跡」を参照されたい。

地形・地質

遺跡の存在する地形は、大別して和田丘陵と末戸台台地に分けられる。和田丘陵は平坦面をあまり持たない。しかし、定高性を持った標高60～150mのかなり開析を受けた老年期地形を示し、地形は第３系鮮新統に属する青色砂質シルト岩(笹岡層)と青灰色塊状泥岩(天徳寺層)、それに中新統に属する暗灰色泥岩(船川層)などからなっている。末戸台台地は標高25～50m強で、その表面は大変平坦である。この台地は和田丘陵と接して数段の段丘を識別できる。これらは内藤[注1]の区分からすると、上位から標高45～50m強の椿台段丘、標高40m強の上野台段丘Ⅰ、標高35m強の上野台段丘Ⅱ、標高25m強の宝竜崎段丘の４段階に分けられる。(第３図)

椿台段丘

岩見川右岸末戸台台地では45～50m強の標高をもつ、いわゆる椿台面をその堆積面とする椿台層が厚い礫(最大径10cm前後)、砂、粘土の互層で構成されている。ただ基底高度はわからない。岩相は最上部に１～２ｍ褐色の粘土質火山灰層があり、次に礫、砂、粘土の互層で、砂礫の部分でしばしばクロス・ラミナ(斜交葉理)がみられ、砂土あるいはシルトは水平な細かい層理をなすことが多い。層厚をみると、礫層はうすく、砂、粘土層が厚い。その下部は第３系の泥岩(船川層)や砂質シルト(笹岡層)となっている。内藤はこの椿台面を関東の下末吉面に対比している。

上野台段丘Ⅰ

末戸台台地で椿台段丘の南側に標高40m強でついている段丘が上野台段丘Ⅰと呼ばれている。表層の１～２ｍの粘土質火山灰層を除くと、段丘堆積物は最大径20～30cmの礫層であり、厚さは５ｍ程度で、その下部は第３系となっている。下堤Ｃ遺跡は、この上野台段丘Ⅰに位置する。

上野台段丘Ⅱ

末戸台台地では上野台段丘Ⅰとの比高が５ｍ強である。段丘堆積物の岩相は、上野台段丘Ⅰとほぼ同様で、層厚は５ｍ前後である。内藤によれば、厚い礫層の下部は椿台層に当るとしている。

段丘堆積物の特徴は、上野台Ⅰ、Ⅱ面では最大径30cm前後の亜円礫を主体とする。ほぼ一様な礫層をもち、河川堆積物で、厚さも加味すると岩見川などによる河成の侵食段丘面と考えられる。椿台、上野台Ⅰ、Ⅱ面の各面をおおっている層厚１～２ｍのシルト分を含んだ粘土質火山灰層は、男鹿半島の寒風山が起源と一応考えられている。[注2]この粘土質火山灰層の表面細粒物質の風化状態を

みていくと、椿台、上野台Ⅰ、Ⅱ面では黒色土の下の細粒物質のうち、上部50～100cmが明褐色を呈し、下部は灰色で、境は漸移する。また、土壌面を見ると、椿台、上野台Ⅰ、Ⅱ面をおおう土壌はいわゆる高岡2統に属していると考えられ、比較的大きい円礫を混入していて、黒色土層を厚く堆積させている。この層中には火山ガラスを混入しており、火山灰が関係しているものと推定される。

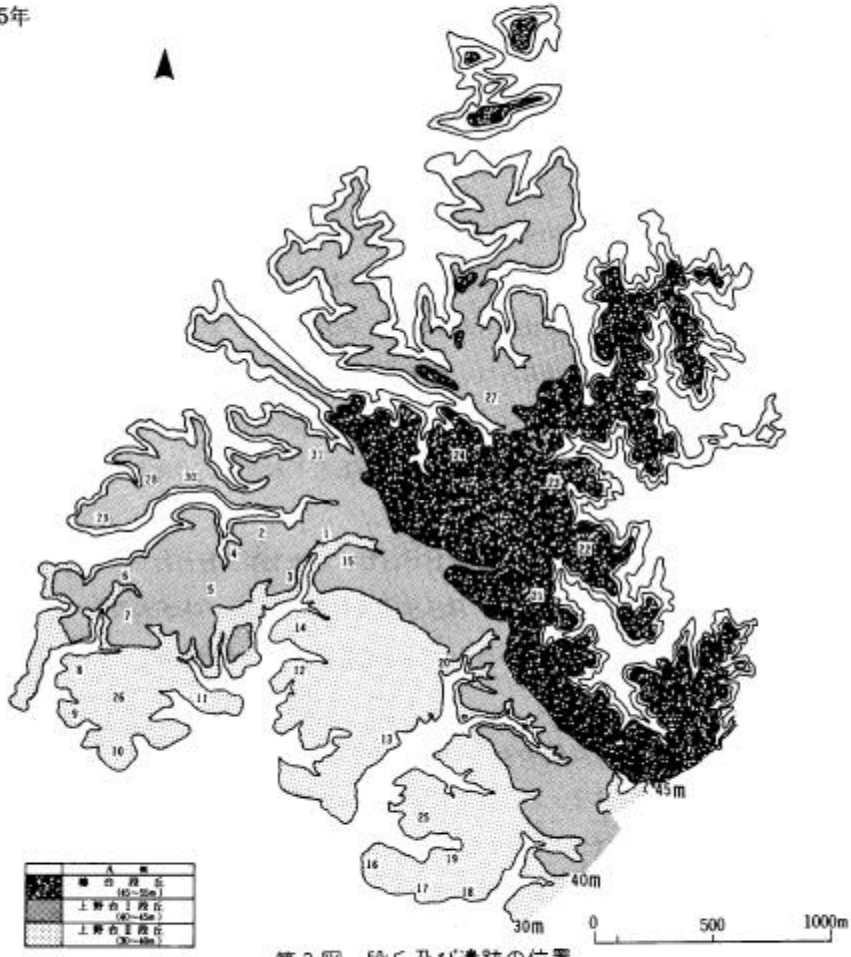
(註1)「秋田県岩見川流域およびその周辺の段丘について」　内藤博夫　1965年　第4紀研究第4巻第1号

(註2)「地形、表層地質・土壌、秋田」　経済企画庁土地分類基本調査　1966年

「八郎潟の研究」　秋田県教育委員会　1965年

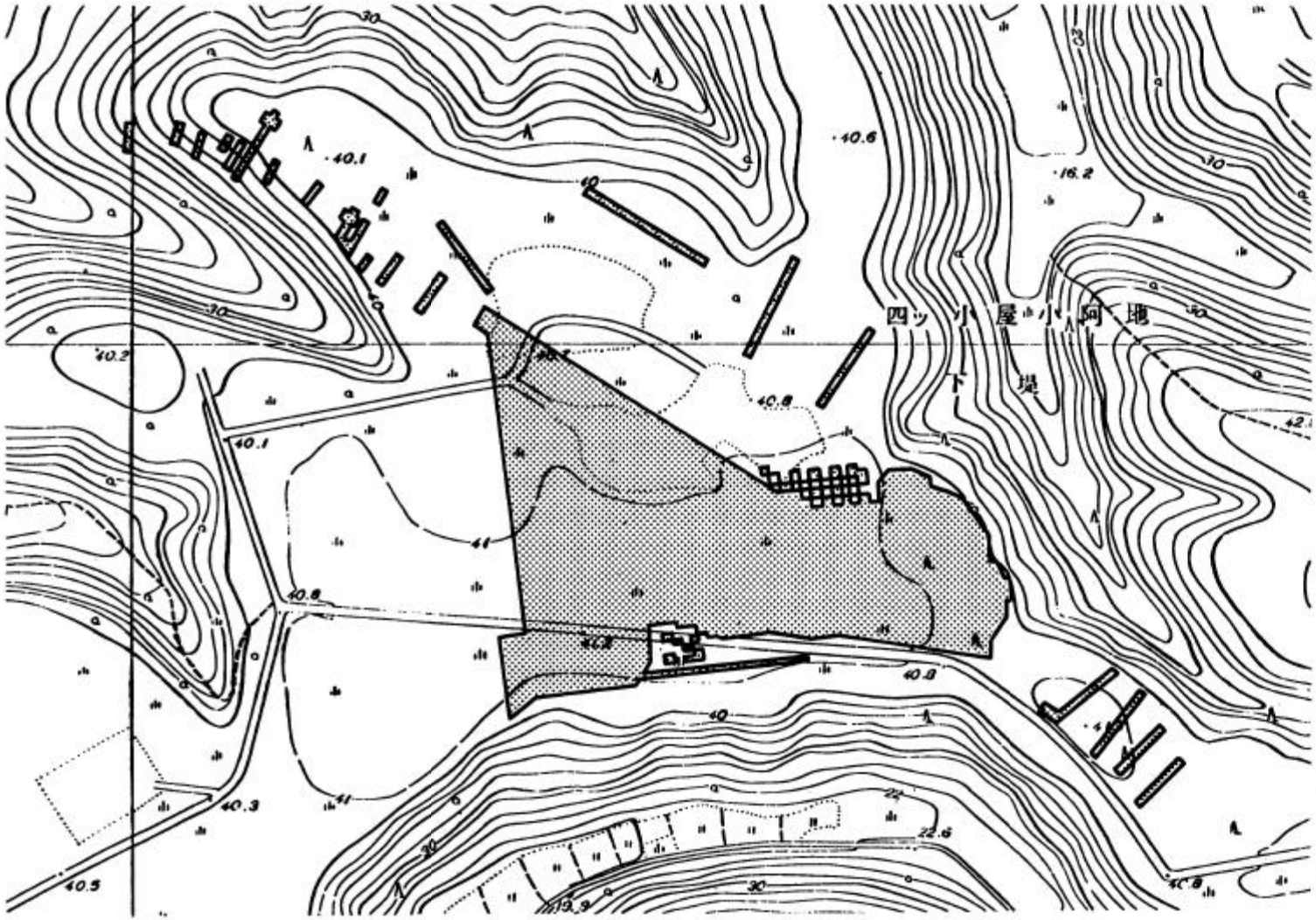
「火山活動と地形」　村山　馨　大明堂

「秋田県男鹿半島一の目潟の火山噴出物について」　林　宏　地質学雑誌第61巻第717号　1955年

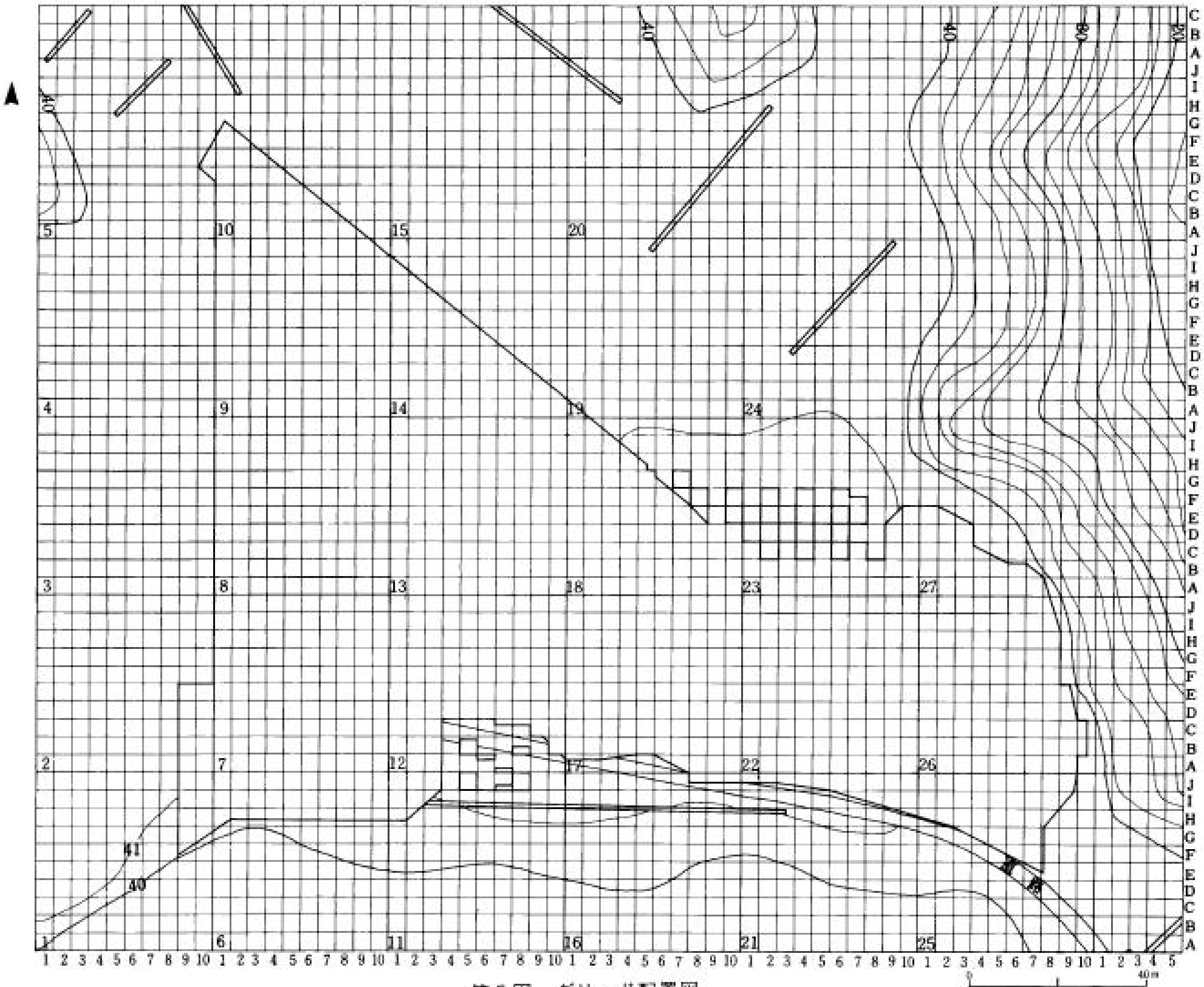


第3図　段丘及び遺跡の位置

下堤C遺跡



第４図　遺跡周辺の地形


5
10
15
20
4
9
14
19
24
3
8
13
18
23
27
2
7
12
17
22
26
41
40
1
6
11
16
21
25
40m

第５図　グリッド配置図

遺跡の概観

御所野台地の北西部、ＪＲ東日本奥羽本線四ッ小屋駅から北東へ約1.2kmの地点である。西と北側から大きな沢が入り込み、４つの突出する舌状部をもつ台地が東から西に延びる。遺跡は東側の地峡部から入るとすぐの地点で、標高は約41ｍである。

調査の結果、平安時代の集落跡が検出され、縄文・弥生時代の土壙や、台地を北西一南東方向に平行して走る時期不明の溝跡等が検出された。

隣接する遺跡は、西側に縄文時代中期初頭～末葉、平安時代の「下堤Ａ遺跡」、南西約400ｍに縄文時代中期末葉、平安時代の「下堤Ｂ遺跡」、東約500ｍに縄文時代前期末葉～後期、平安時代の「下堤Ｄ遺跡」、南東約400ｍに縄文時代前期末葉、中期末葉の「下堤Ｆ遺跡」等の周辺遺跡が所在する。

遺構と遺物

１号住居跡（第６図）

調査区の南側で検出された。

プランは径3.7ｍのほぼ方形を呈し、確認面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは14個検出されたが、主柱穴は不明である。カマドは東壁の南側に構築されている。袖部は壊れ、燃焼部は火熱を受けて赤変し、赤褐色土器坏を２個重ねて伏せ支脚としている。煙道部はトンネル状に検出され、壁外へ80cm延びる。カマドの両脇には長軸60cm、短軸50cm、深さ35cm前後のピットがある。床は平坦で全体的に堅く、住居中央部に径20cmの範囲の焼け褐が認められる。

出土遺物

土器（第９図１～６）

１（上）、２（下）はカマド支脚、２～６はピット出土である。全て赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、底部より内湾しながら立ち上がる。２はかなりいびつである。

２号住居跡（第７図）

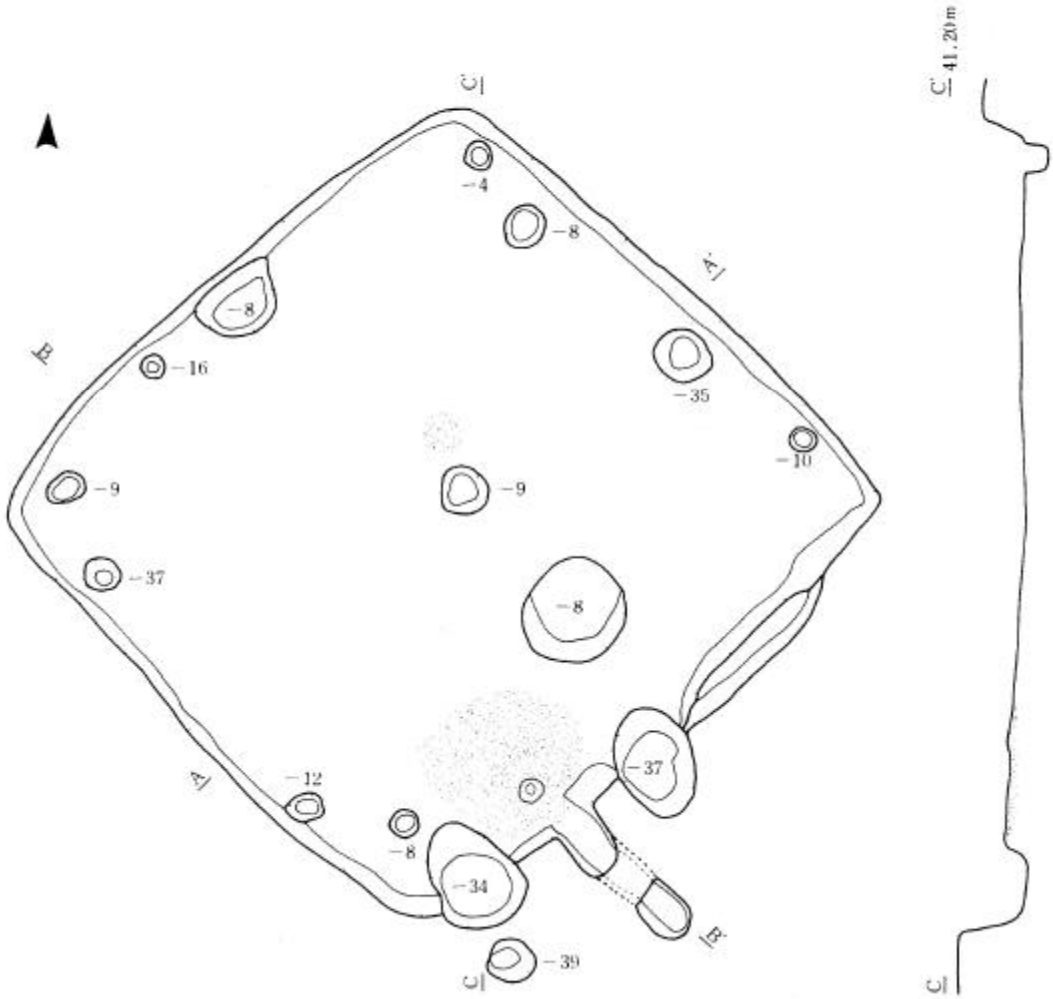
調査区の中央部南側で検出された。

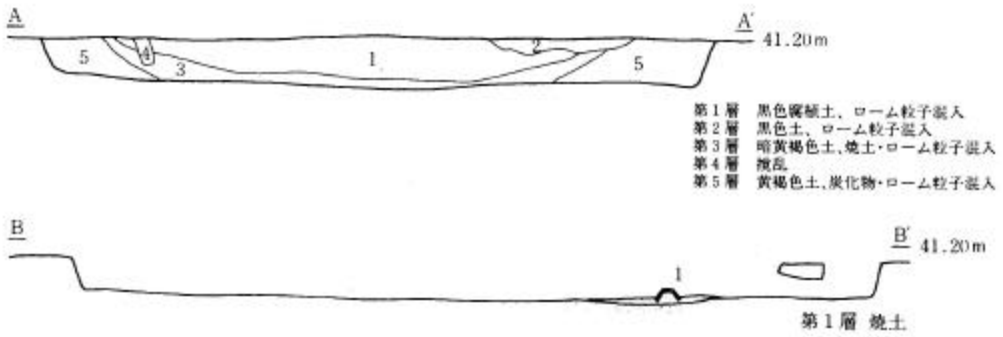
プランは径3.5ｍのほぼ方形を呈し、確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは22個検出されたが、主柱穴は不明である。カマドは南壁の東側に構築されている。袖部は壊れ、燃焼部は火熱を受けて赤変し、煙道部は短かく急激に立ち上がる。カマドの東側には長軸60cm、短軸50cm、深さ22cmのピットがある。床はほぼ平坦である。

出土遺物

土器（第９図７～13、第39図115）

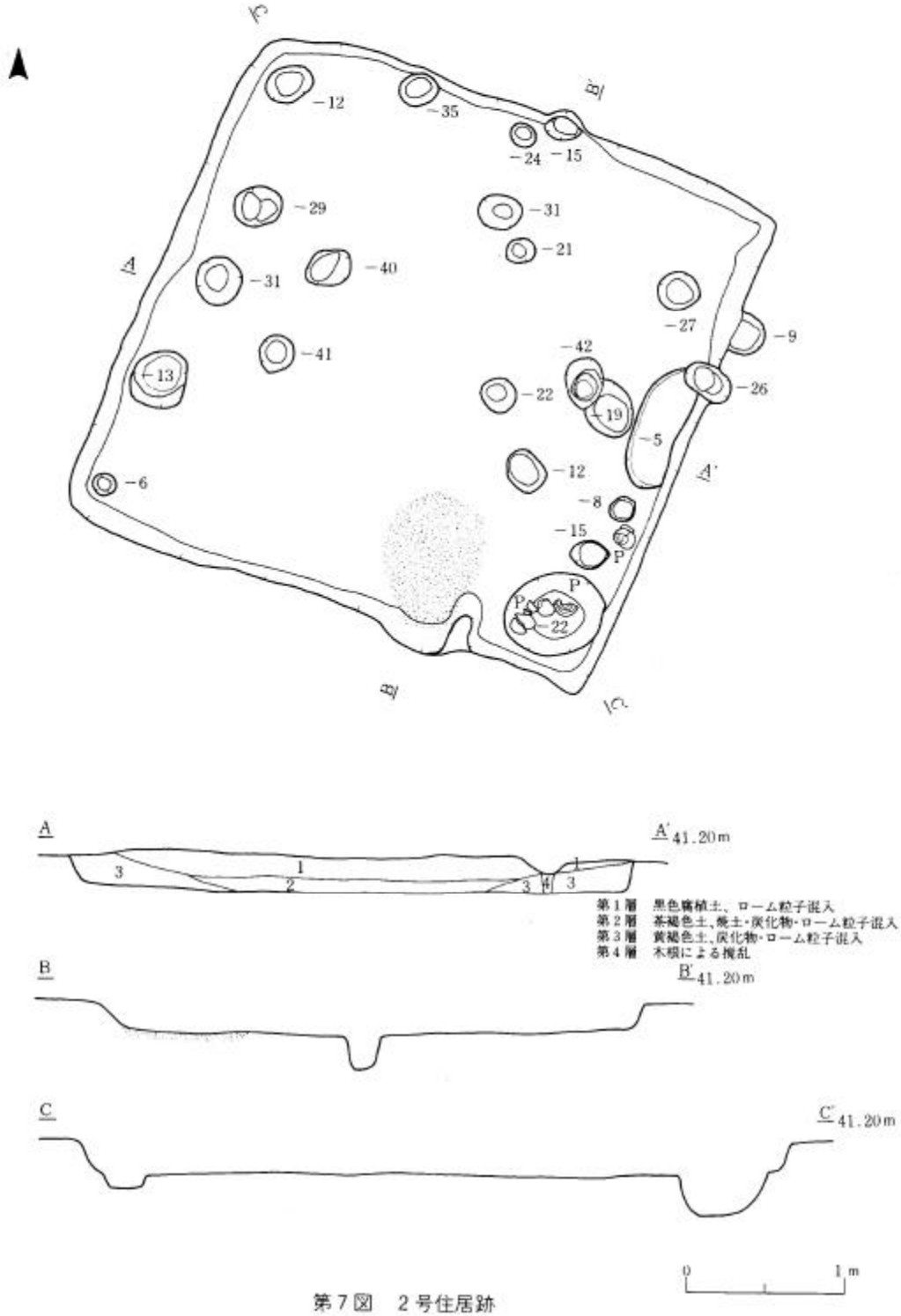
７～９は床面、10はカマド燃焼部、11～13はピット、115は覆土出土である。７～９、11～13は赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、底部より内湾しながら立ち上がる。10は赤褐色土器甕である。ロクロ整形で、頸部が外反して口縁部が立ち上がる。底部切り離し回転糸





第6図　1号住居跡

0　1m


A
A'
B
B'
C
C'
-12
-35
-24
-15
-29
-31
-21
-31
-40
-27
-9
-41
-42
-13
-22
-19
-26
-5
-12
-6
-8
-15
P
P
P
-22
41.20m
41.20m
41.20m
第1層　黒色腐植土、ローム粒子混入
第2層　茶褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第3層　黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第4層　木根による攪乱
0
1m

第7図　2号住居跡

切り、無調整である。115は須恵器壺である。ロクロ整形で、外面下方には平行叩き板痕が認められる。底部切り離しは不明で、底部周縁につまみ出しによる低い台を付けている。焼成は良好である。

3号住居跡（第8図）

調査区の中央部南側で検出された。

プランは長軸3.3ｍ、短軸3ｍの不整方形を呈し、確認面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは12個検出されたが、主柱穴は不明である。カマドは東壁の南側に構築されている。袖部は残存状態が比較的良好である。両袖とも黄色粘土で構築され、南袖は甕形土器の破片を、北袖は甕形土器を2個伏せそれぞれ芯材としている。燃焼部は火熱を受けて赤変し、支脚は2個あり、南側が甕形土器の底部と小形の甕形土器（17が上、18が下）を、北側が小形の甕形土器（15が上、16が下）をそれぞれ重ねて伏せて作っている。この支脚の上から甕形土器が2個体出土した。煙道部は溝状に検出され、壁外へ1.5ｍ延び、部分的に側面が焼けている。床は平坦で全面的に堅い。

出土遺物

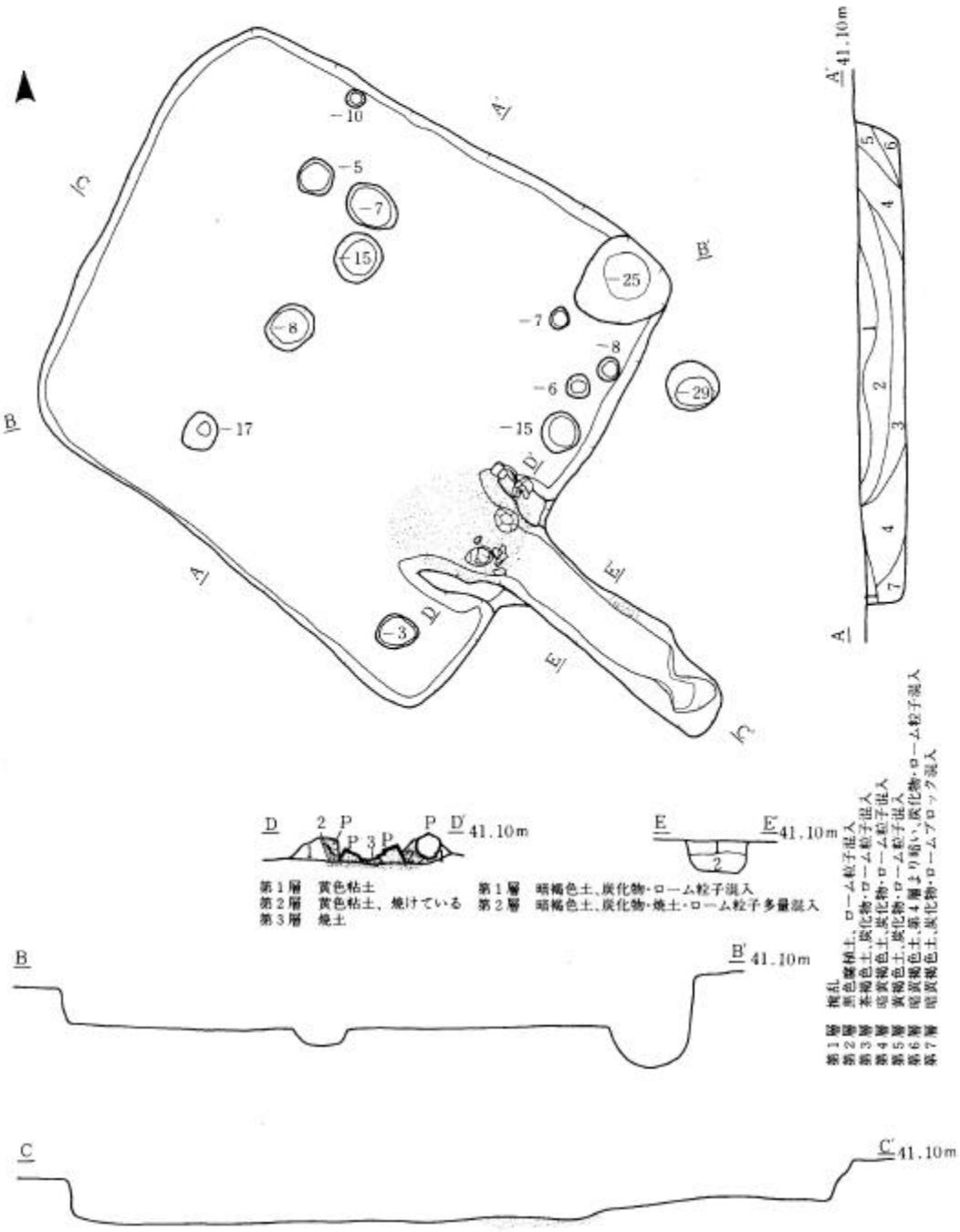
土器（第9、10図14～22）

14は床面、15～18はカマド支脚で、15(上)、16（下）は北側、17(上)、18（下）は南側、19、20は北袖の芯材、21、22はカマド燃焼部出土である。14は須恵器坏である。摩滅により底部切り離しは不明で、底部より内湾しながら立ち上がる。焼成はやや弱い。15、16、18、20は小形の土師器甕である。15は頸部が「く」の字状に外反し、胴部外面にヘラケズリ整形を施し、下部は二次加熱により剥落している。16、18は頸部が「く」の字状に外反し、胴部は比較的丸味がある。胴部外面は刷毛目調整が施され、底部に木葉痕が認められる。20は頸部が「く」の字状に外反し、胴部は丸味がある。胴部外面及び口縁部内面に刷毛目調整を施し、底部には木葉痕が認められる。17、19、21、22は土師器甕である。17は胴下部で、胴部外面に刷毛目調整を施し、底部には木葉痕が認められる。19は胴上半で、頸部が「く」の字状に外反し、内外面に刷毛目調整を施す。21は頸部が「く」の字状に外反し、口縁部が内湾しながら立ち上がる。胴部外面に刷毛目調整が施され、底部には木葉痕が認められる。22は頸部が「く」の字状に外反し、底部を欠く。胴部外面は刷毛目調整が施される。

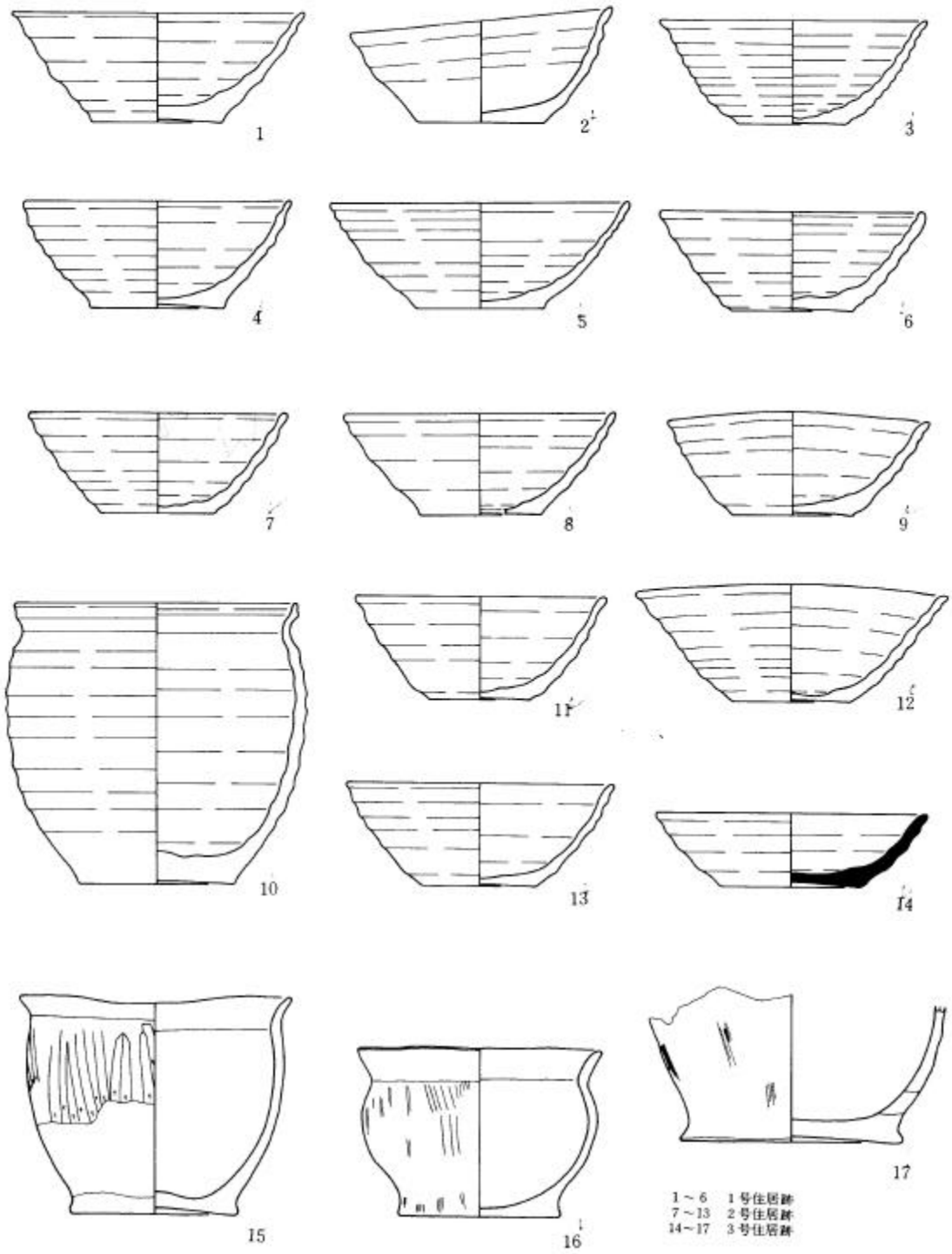
4号住居跡（第11図）

調査区の中央部で検出された。

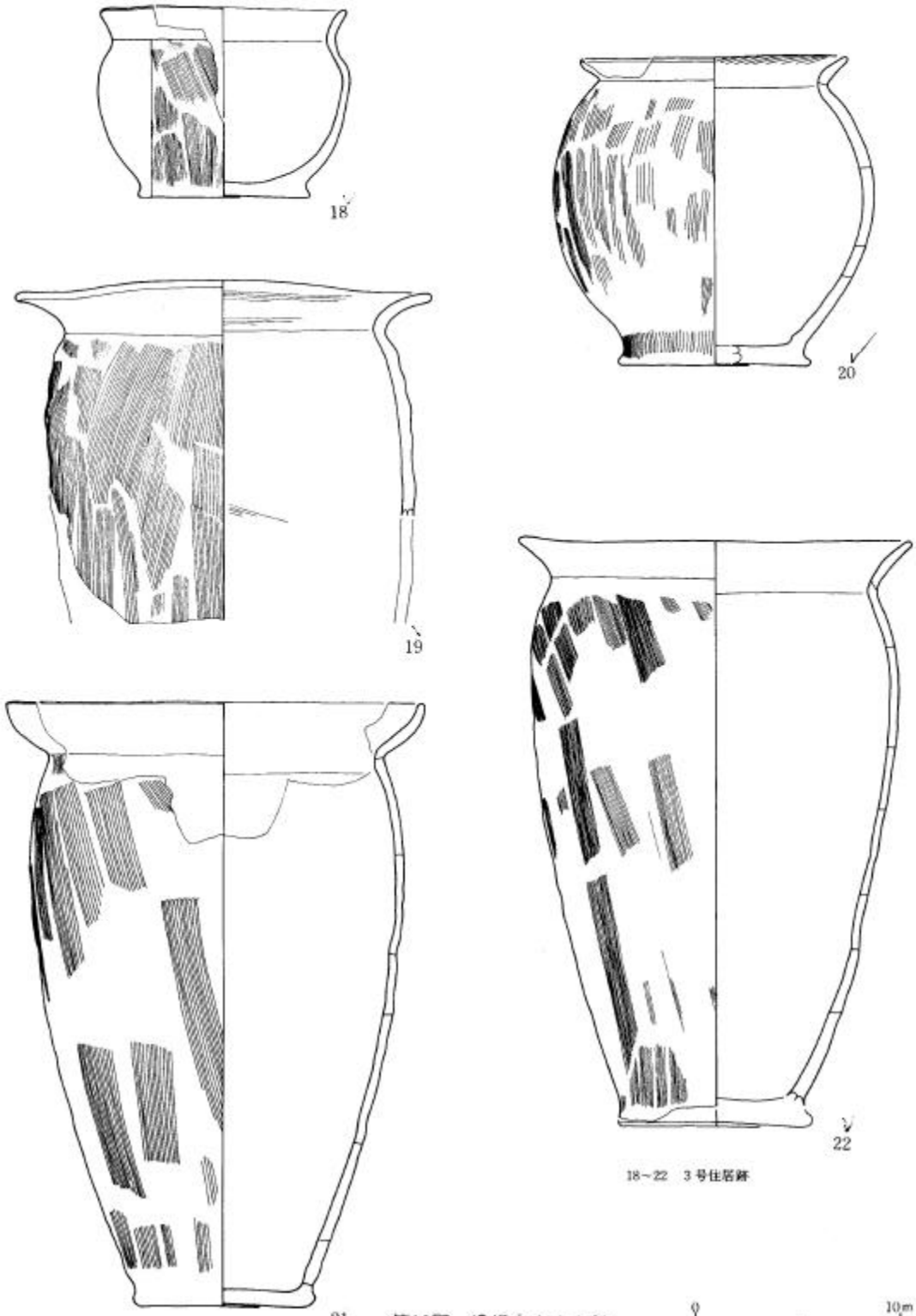
プランは径3.9ｍの方形を呈し、1号溝跡に切られている。確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは38個検出され、主柱穴は各コーナーとその中間の8個である。カマドは東壁の南側と北側に2基構築されている。南側のカマドは袖部の大部分が壊れ、握り拳大の川原石を芯材として褐色土で構築されている。燃焼部は火熱を受けて赤変し、角柱状の石を立てて支脚としている。煙道部は短かく急激に立ち上がる。カマドの南側には長軸1ｍ、短軸75cm、深さ35


A
A'
41.10m
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
第1層　黄色粘土
第2層　黄色粘土、焼けている
第3層　焼土
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、炭化物・焼土・ローム粒子多量混入
第1層　撹乱
第2層　黒色腐植土、ローム粒子混入
第3層　茶褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第4層　暗黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第5層　黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第6層　暗黄褐色土、第4層より暗い、炭化物・ローム粒子混入
第7層　暗黄褐色土、炭化物・ローム ブロック混入
0
1m

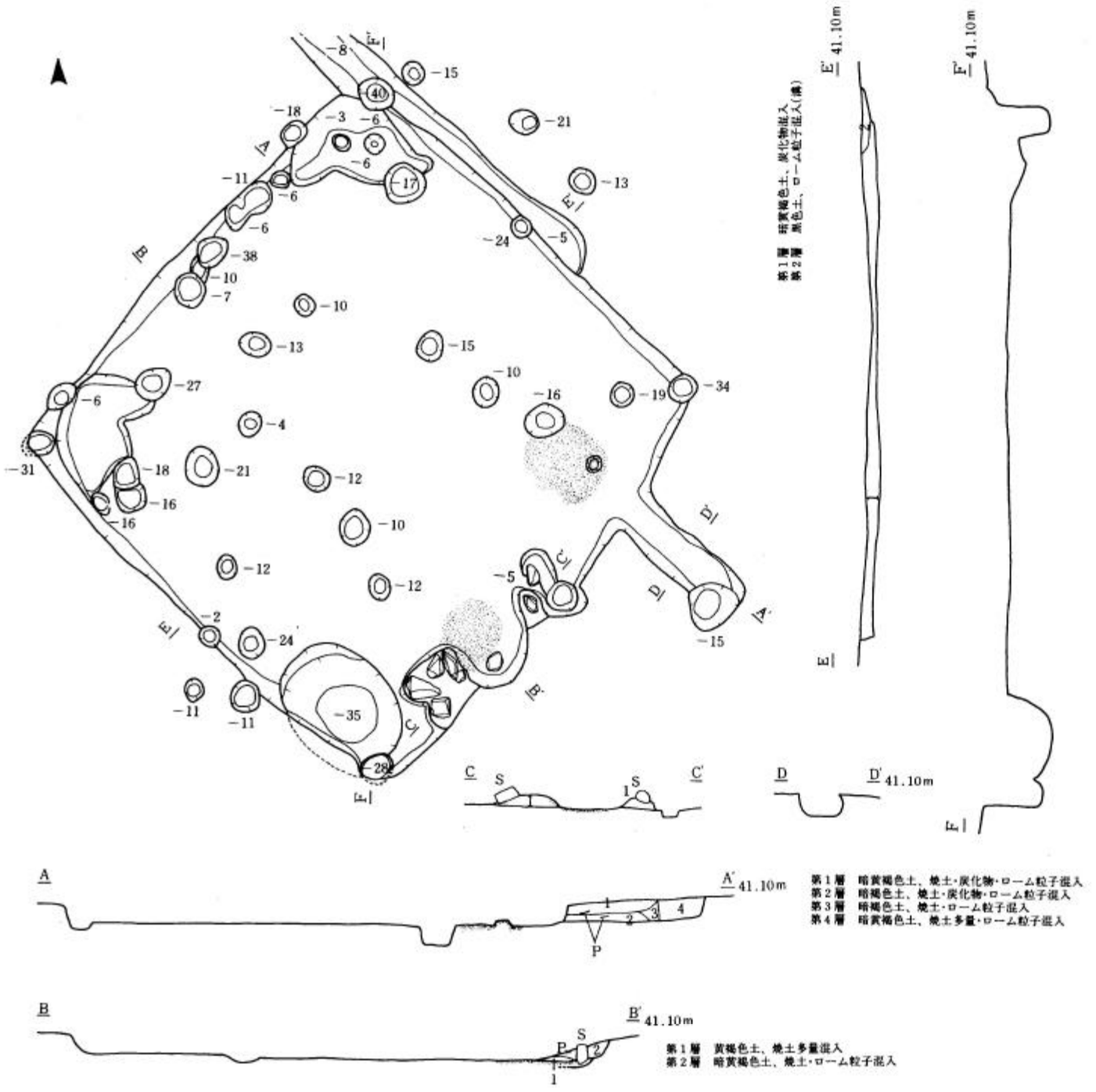
第8図　3号住居跡


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
1～6　1号住居跡
7～13　2号住居跡
14～17　3号住居跡
0
10cm

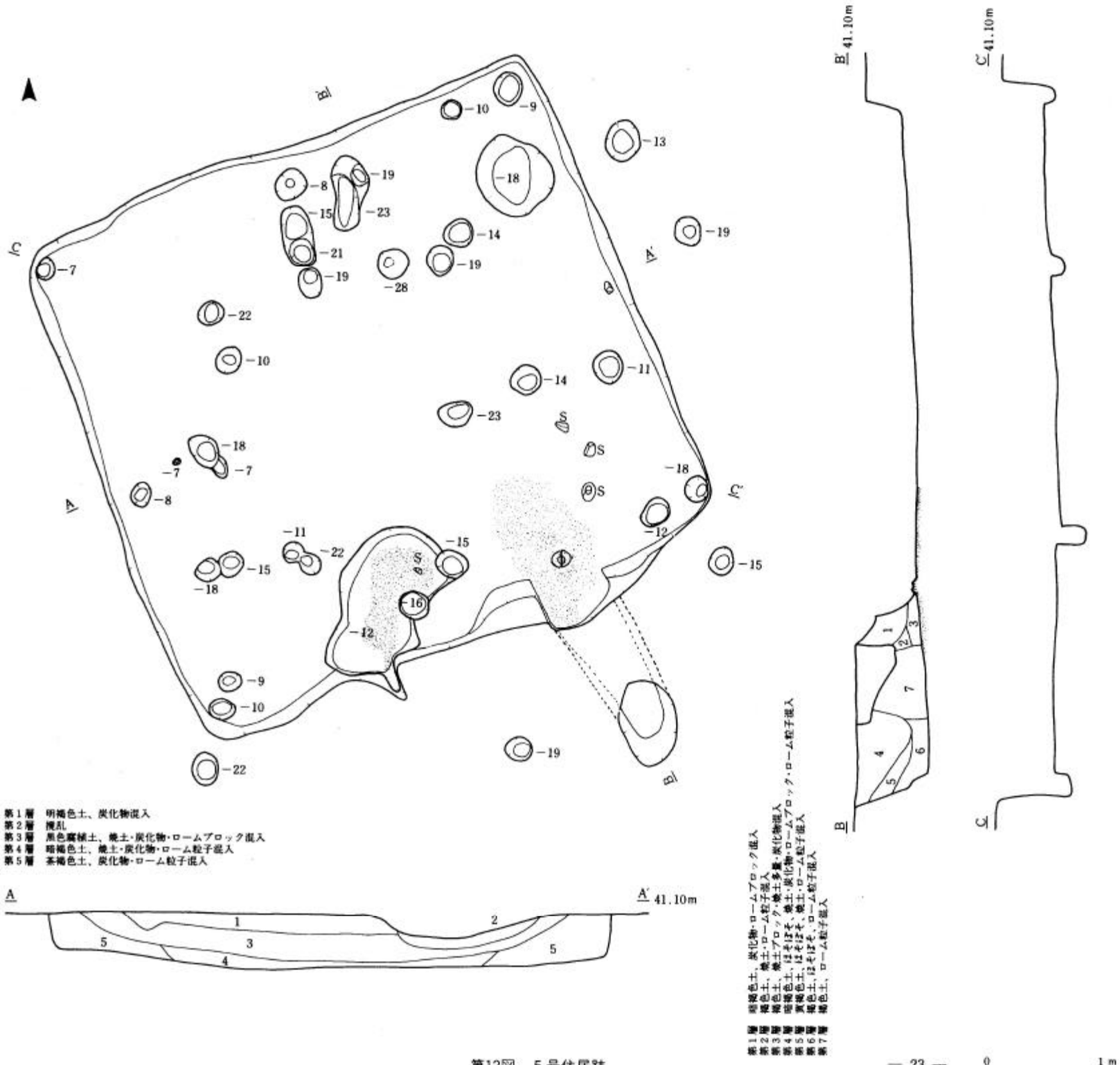
第9図　遺構内出土土器



第10図　遺構内出土土器


A
A'
41.10m
第1層　暗黄褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第3層　暗褐色土、焼土・ローム粒子混入
第4層　暗黄褐色土、焼土多量・ローム粒子混入
B
B'
41.10m
第1層　黄褐色土、焼土多量混入
第2層　暗黄褐色土、焼土・ローム粒子混入
C
C'
D
D'
41.10m
E
E'
41.10m
第1層　暗黄褐色土、炭化物混入
第2層　黒色土、ローム粒子混入(溝)
F
F'
41.10m
0
1m

第11図　4号住居跡


第1層　明褐色土、炭化物混入
第2層　攪乱
第3層　黒色腐植土、焼土・炭化物・ロームブロック混入
第4層　暗褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第5層　茶褐色土、炭化物・ローム粒子混入
A
A'
41.10m
B
B'
41.10m
C
C'
41.10m
第1層　暗褐色土、炭化物・ロームブロック混入
第2層　褐色土、焼土・ローム粒子混入
第3層　暗褐色土、焼土ブロック・焼土多量・炭化物混入
第4層　暗褐色土、はそぼそ、焼土・炭化物・ロームブロック・ローム粒子混入
第5層　黒褐色土、はそぼそ、焼土・ローム粒子混入
第6層　暗色土、はそぼそ、焼土・ローム粒子混入
第7層　暗色土、ローム粒子混入
0
1m

第12図　5号住居跡

cmのピットがある。北側のカマドは袖部が壊れ、燃焼部は火熱を受けて赤変し、内黒土師器坏を伏せて支脚としている。煙道部は溝状に検出され、壁外へ1.1 m延び、煙出し部はピット状に掘られている。床は平坦である。

出土遺物

土器（第18図23、24）

23は北側のカマド支脚、24はピット出土である。23は内黒土師器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、内面黒色処理を施す。24は赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整である。いずれも底部より内湾しながら立ち上がる。

5号住居跡（第12図）

調査区の中央部南側で検出された。

プランは長軸4.8 m、短軸4.5 mのほぼ方形を呈し、確認面からの深さは45cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは32個検出されたが、主柱穴は不明である。カマドは南壁の東側に構築されている。袖部は壊れ、燃焼部は火熱を受けて赤変し、堅く、赤褐色土器台付皿(上)と赤褐色土器坏(下)を重ねて伏せ支脚としている。煙道部はトンネル状に検出され、壁外へ1.5 m延びる。カマドの西側には長軸1.4 m、短軸70cm、深さ12cmの掘り込みがあり、底面が焼けている。床は中央部が若干低くなっている。

出土遺物

土器（第18図25～29）

25（上）、26（下）はカマド支脚、27はピット、28、29は覆土出土である。25は赤褐色土器台付皿である。底部切り離し回転糸切りで、切り離し後に台を付けている。26～29は赤褐色土器坏である。底部切り離しは、28が摩滅により不明であるが、他は回転糸切り、無調整である。いずれも底部より内湾しながら立ち上がり、26の内面にはタール状の付着物が認められる。

6号住居跡（第13図）

調査区の中央部南側で検出された。

プランは長軸2.7 m、短軸2.5 mのほぼ方形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは11個検出されたが、主柱穴は不明である。カマドは南壁の東側に構築されている。袖部は壊れ、燃焼部は火熱を受けて赤変している。煙道部は溝状に検出され、壁外へ85cm延びる。床は平坦である。

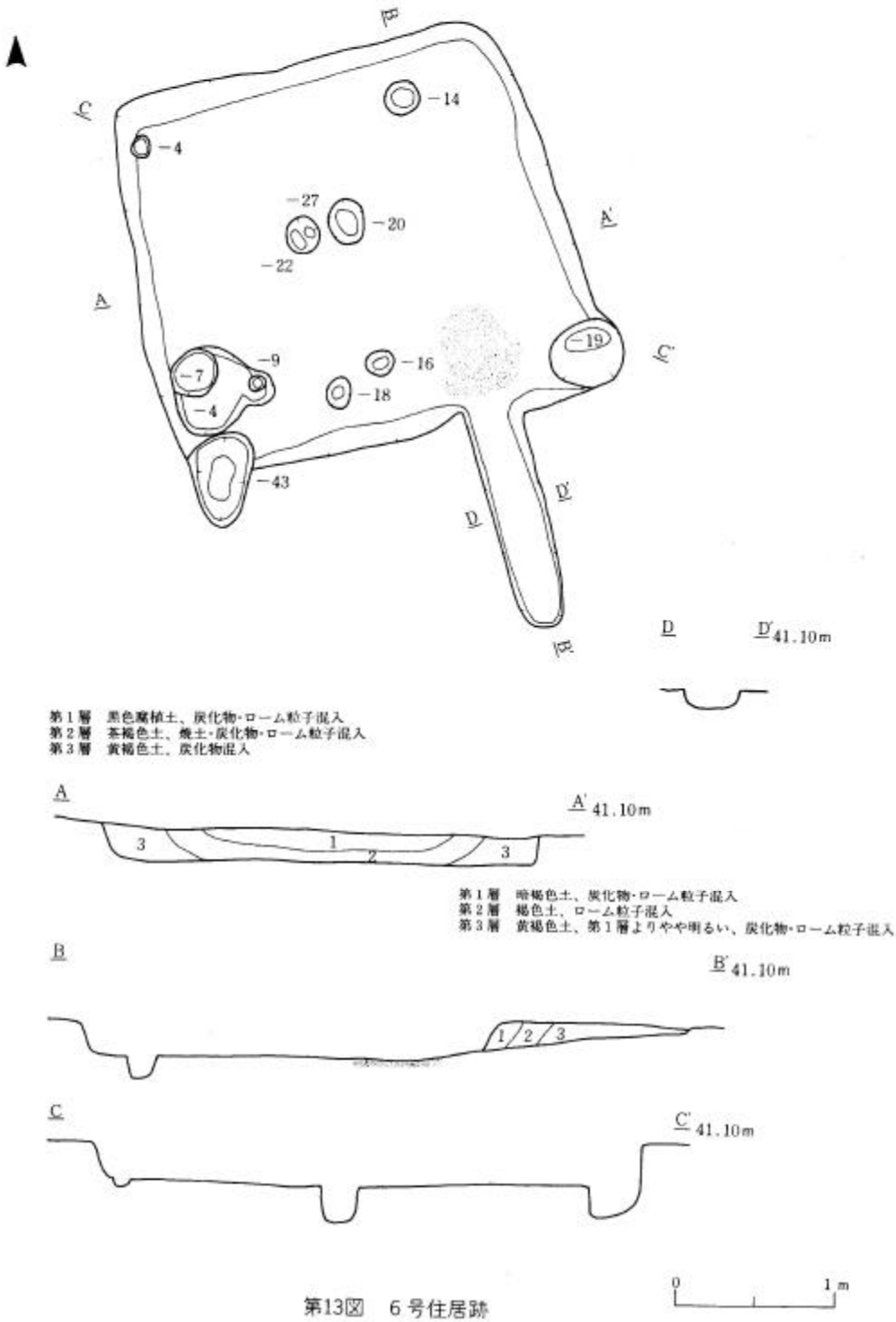
出土遺物

土器

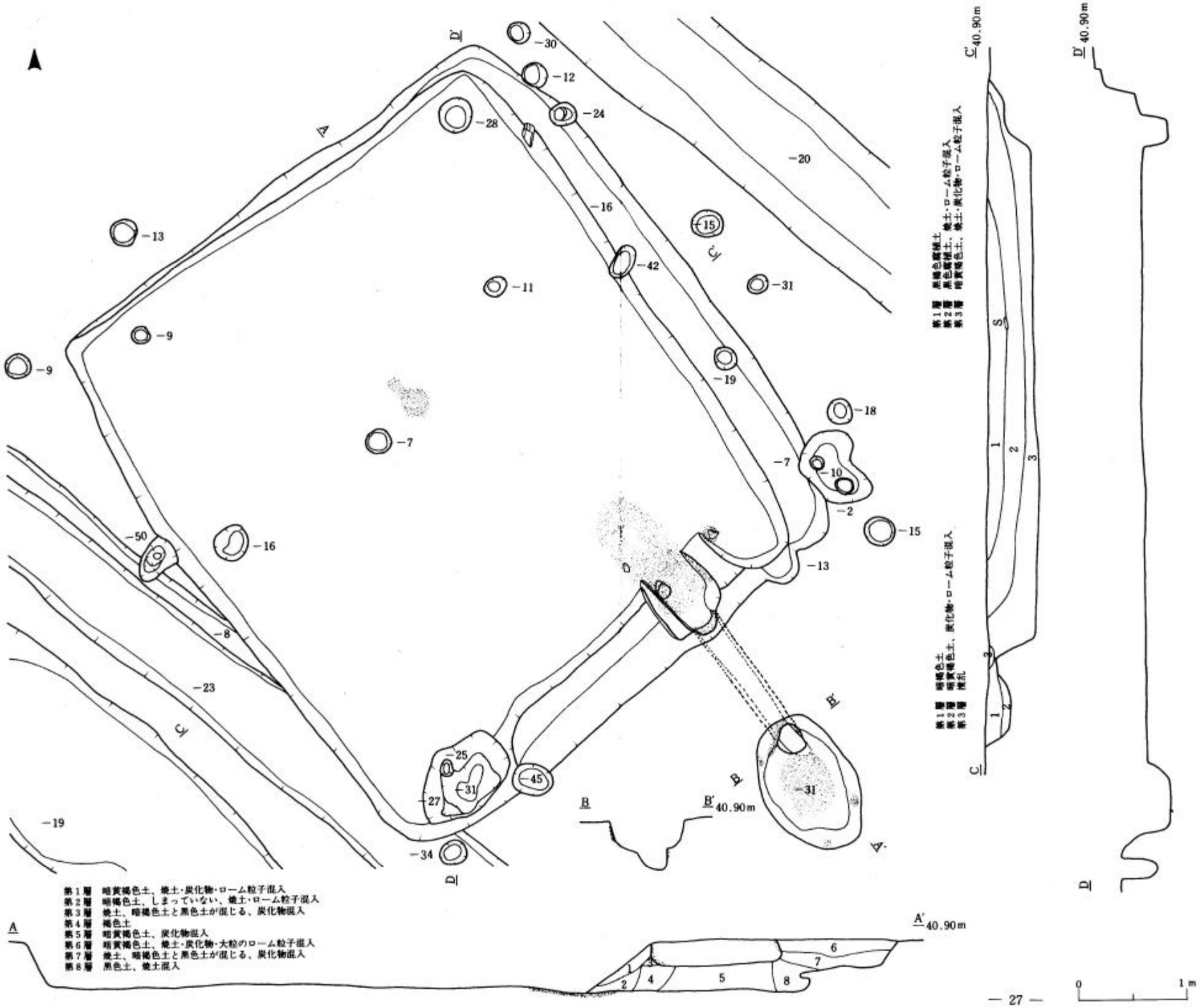
赤褐色土器坏（底部切り離し回転糸切り、無調整）、土師器甕の破片が数点出土した。

7号住居跡（第14図）

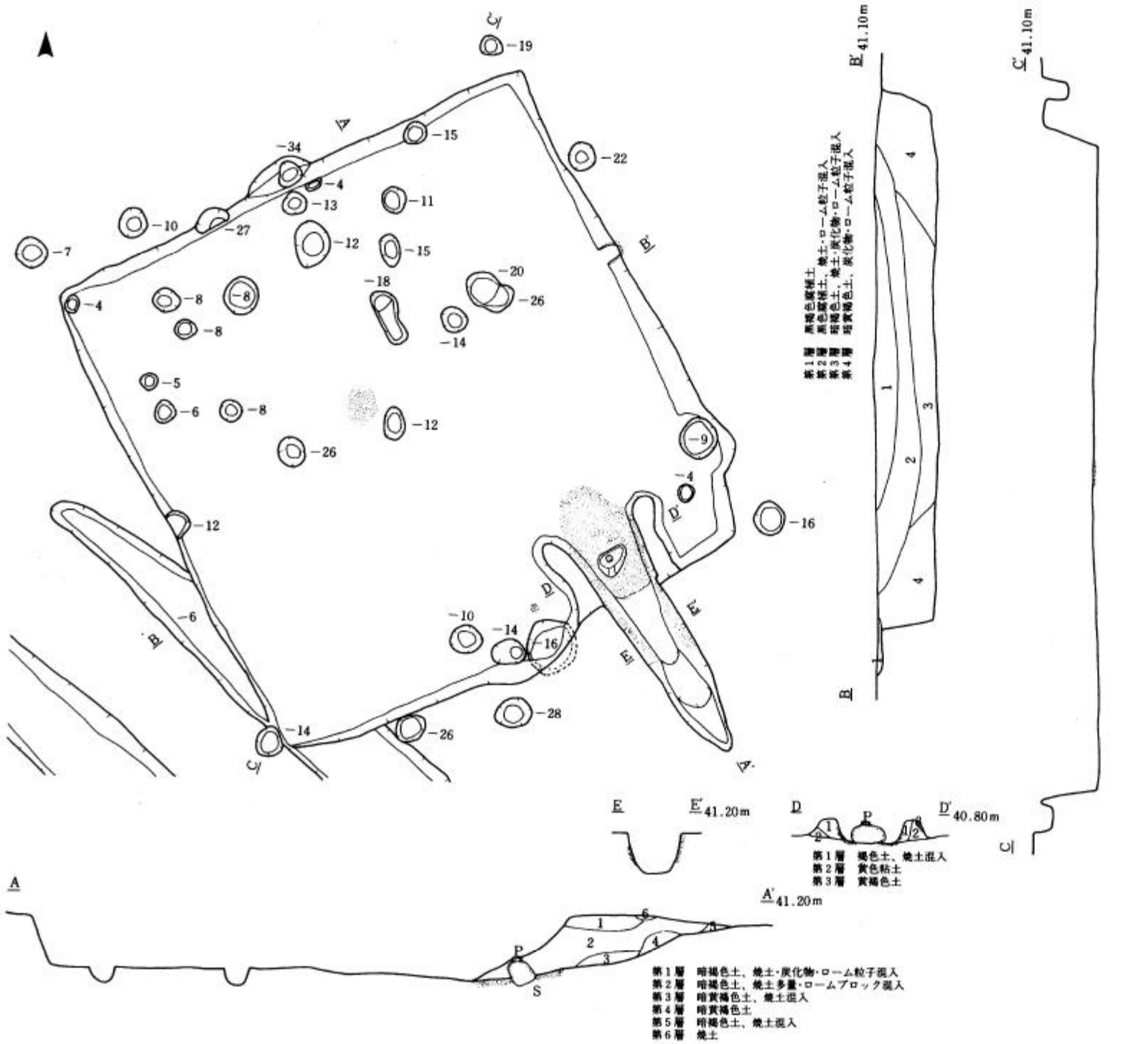
調査区の南側で検出された。


B
C
-14
-4
-27
-20
-22
A'
A
-19
C'
-9
-16
-7
-18
-4
-43
D'
D
B'
D
D'41.10m
第1層　黒色腐植土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　茶褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第3層　黄褐色土、炭化物混入
A
A'41.10m
3
1
2
3
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　褐色土、ローム粒子混入
第3層　黄褐色土、第1層よりやや明るい、炭化物・ローム粒子混入
B
B'41.10m
1
2
3
C
C'41.10m
0
1m

第13図　6号住居跡


第1層　暗黄褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、しまっていない、焼土・ローム粒子混入
第3層　焼土、暗褐色土と黒色土が混じる、炭化物混入
第4層　褐色土
第5層　暗黄褐色土、炭化物混入
第6層　暗黄褐色土、焼土・炭化物・大粒のローム粒子混入
第7層　焼土、暗褐色土と黒色土が混じる、炭化物混入
第8層　黒色土、焼土混入
A
A'
40.90m
B
B'
40.90m
C
C'
40.90m
D
D'
40.90m
0
1 m

第14図　7号住居跡


第1層　黒褐色腐植土
第2層　黒色腐植土、焼土・ローム粒子混入
第3層　暗褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第4層　暗黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
41.10m
41.20m
40.80m
第1層　褐色土、焼土混入
第2層　黄色粘土
第3層　黄褐色土
第1層　暗褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、焼土多量・ロームブロック混入
第3層　暗黄褐色土、焼土混入
第4層　暗黄褐色土
第5層　暗褐色土、焼土混入
第6層　焼土
0
1m

第15図　8号住居跡

プランは長軸5.8ｍ、短軸5.4ｍのほぼ方形を呈し、２号溝跡に切られている。確認面からの深さは40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がり、北壁には段が付く。ピットは13個検出されたが、主柱穴は不明である。カマドは東壁の北側に構築されている。袖部は一部残存し、褐色土で構築されている。燃焼部は火熱を受けて赤変し、土師器甕の底部を伏せて支脚とし、この支脚は南側に寄っている。煙道部はトンネル状に検出され、壁外へ1.4ｍ延びる。煙出し部には長軸1.3ｍ、短軸90cm、深さ31cmの楕円形を呈する掘り込みがあり、底面、側面が焼けている。床は平坦で、住居中央部に径25cmの範囲の焼け痕が認められる。

出土遺物

土器

赤褐色土器坏（底部切り離し回転糸切り、無調整）、土師器甕の破片が少量出土した。

８号住居跡（第15図）

調査区の中央部東側で検出された。

プランは径4.2ｍの方形を呈し、２号溝跡に切られている、確認面からの深さは50cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは27個検出されたが、主柱穴は不明である。カマドは東壁の北側に構築されている。袖部は残存し、黄色粘土と褐色土で構築されている。燃焼部は火熱を受けて赤変し、人頭大の川原石の上に土師器甕の底部を伏せて支脚としている。煙道部は溝状に検出され、壁外へ1.4ｍ延び、煙出し部へ向かってゆるく立ち上がり、側面が焼けている。カマドの南側には径40cm、深さ16cmで壁側を掘り込んだピットがある。床は平坦で、住居中央部に径25cmの範囲の焼け痕が認められる。

出土遺物

土器（第18図30、31）

30はカマド燃焼部、31は床面出土である。いずれも赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、底部より内湾しながら立ち上がる。31は墨書が認められ、「全」であろうか。

銭貨（第16図）

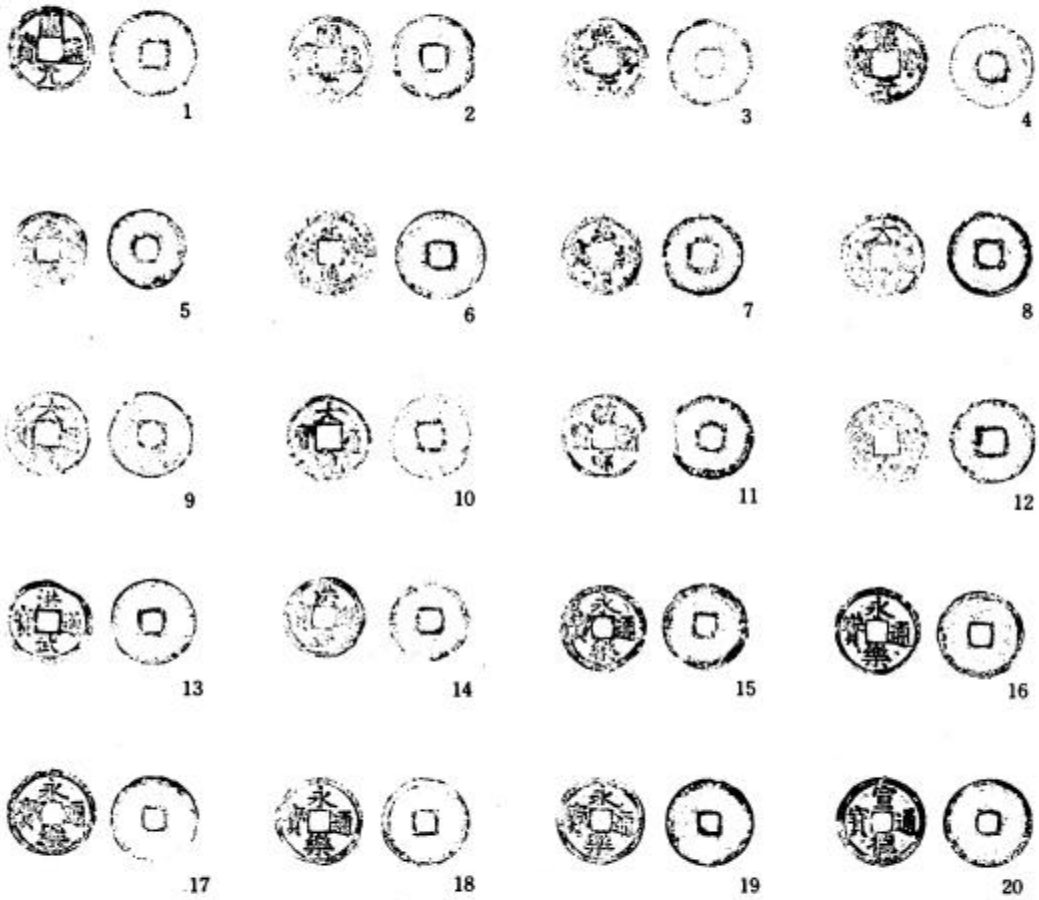
覆土第１層の黒褐色腐植土の上面で、ローム面つまり住居確認面から紐で結ばれた状態で出土した。出土枚数は75枚で、銭貨名等の明確なものを図示した。種別は銭貨名で14種、書体別では17種で、楷書が36枚、篆書が８枚、隷書が５枚、行書が４枚である。内訳は時代別では唐銭が４枚、北宋銭が22枚、明銭が27枚で、銭貨名では開元通宝が４枚、天禧通宝が１枚、皇宋通宝が２枚、嘉祐通宝が２枚、熙寧元宝が４枚、元豊通宝が３枚、元祐通宝が１枚、元符通宝が２枚、大観通宝が３枚、政和通宝が３枚、正隆元宝が１枚、洪武通宝が２枚、永楽通宝が23枚、宣徳通宝が２枚で、不明が19枚である。背文のあるものはない。

９号住居跡（第17図）

調査区の中央部で検出された。

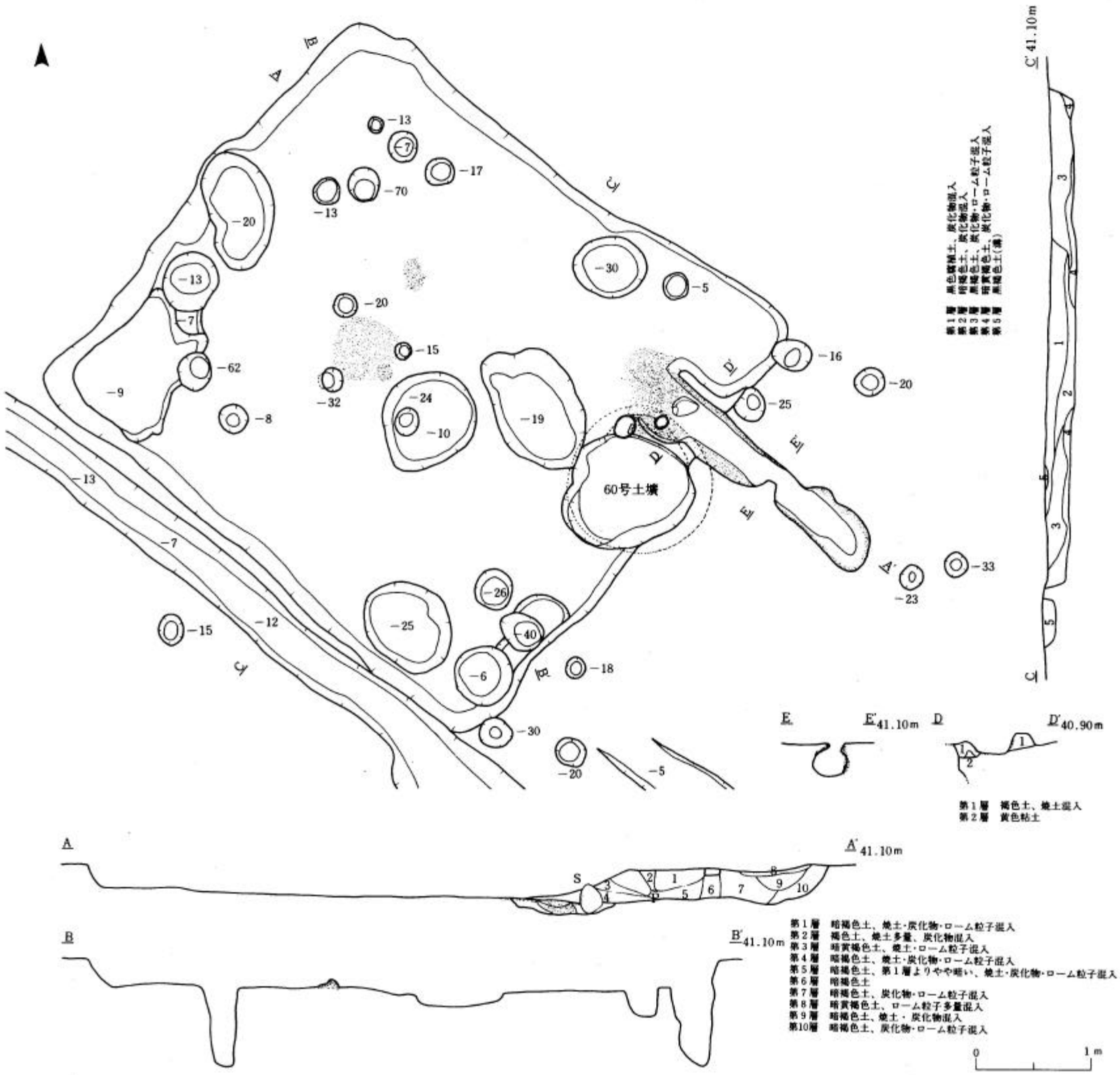
8号住居跡出土銭貨一覧表

銭貨名	初鋳年		書体	出土枚数	遺物番号
開元通宝	唐	621	隷書	4	1、2
天禧通宝	北宋	1017	楷書	1	
皇宋通宝	北宋	1039	篆書	2	
嘉祐通宝	北宋	1056	篆書	2	
熙寧元宝	北宋	1068	楷書(2枚)、隷書(1枚)、篆書(1枚)	4	3、4
元豊通宝	北宋	1078	行書	3	5、6
元祐通宝	北宋	1086	篆書	1	7
元符通宝	北宋	1098	行書(1枚)、篆書(1枚)	2	
大観通宝	北宋	1107	楷書	3	8～10
政和通宝	北宋	1111	楷書(2枚)、篆書(1枚)	3	11、12
正隆元宝	北宋	1157	楷書	1	
洪武通宝	明	1368	楷書	2	13、14
永楽通宝	明	1408	楷書	23	15～19
宣德通宝	明	1426	楷書	2	20
銭貨名不詳				19	



第16図　8号住居跡出土銭貨

0　5cm


60号土壙
C' 41.10m
第1層 黒色腐植土、炭化物混入
第2層 暗褐色土、炭化物混入
第3層 黒褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第4層 暗黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第5層 黒褐色土(溝)
E E' 41.10m
D D' 40.90m
第1層 褐色土、焼土混入
第2層 黄色粘土
A A' 41.10m
B B' 41.10m
第1層 暗褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第2層 褐色土、焼土多量、炭化物混入
第3層 暗黄褐色土、焼土・ローム粒子混入
第4層 暗褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第5層 暗褐色土、第1層よりやや暗い、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第6層 暗褐色土
第7層 暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第8層 暗黄褐色土、ローム粒子多量混入
第9層 暗褐色土、焼土・炭化物混入
第10層 暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
0 1m

第17図　9号住居跡

プランは長軸５ｍ、短軸4.3ｍのほぼ方形を呈し、１、２号溝跡に切られ、60号土壙を切っている。確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは23個検出され、主柱穴はカマド北側の深さ25cmのピットと深さ40～70cmの４個と考えられる。カマドは東壁の北側に構築されている。袖部は黄色粘土と褐色土で構築され、南袖は土師器甕の胴上半と下半の２個を芯材としている。燃焼部は火熱を受けて赤変し、人頭大の川原石を支脚としている。煙道部は溝状で一部がトンネル状に検出され、壁外へ1.7ｍ延び、側面が焼けている。床は平坦で、住居中央部に径50cmの範囲の焼け痕が認められる。

出土遺物

土器（第18図32～36、第39図116）

32、33はカマド南袖の芯材、35はカマド煙道部、34、36はピット、116は覆土出土である。32～34は土師器甕である。32は胴部外面が縦位に内面が横位及び斜位に幅の狭いヘラ状工具で整形している。33、34は胴部外面が縦位に内面が横位及び斜位に刷毛目調整を施している。いずれも胎土に砂が多く混入し、34の底部には木葉痕が認められる。35は赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、底部よりゆるく内湾しながら立ち上がる。36は内黒土師器坏である。手づくねで、底部より内湾しながら立ち上がる。内外面とも雑なミガキを施し、内面黒色処理を行っている。胎土に砂が多く混入し、外面には砂が露出している。116は須恵器甕の破片である。外面は平行叩き板痕及び幅１cmの擦痕が、内面は同心円状のアテ板痕が認められ、外面に自然釉がみられる。

10号住居跡（第19図）

調査区の中央部で検出された。

プランは長軸3.2ｍ、短軸2.7ｍのほぼ方形を呈し、確認面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは11個検出されたが、主柱穴は各コーナー付近の４個と考えられる。カマドは東壁の南側に構築されている。袖部は壊れ、燃焼部は火熱を受けて赤変し、赤褐色土器坏を伏せて支脚としている。煙道部は溝状で一部がトンネル状に検出され、壁外へ1.4ｍ延び、側面が部分的に焼けている。カマドの北側には径55cm、深さ28cmのピットがある。床は平坦で、住居中央部に径20cmの範囲の焼け痕が認められる。

出土遺物

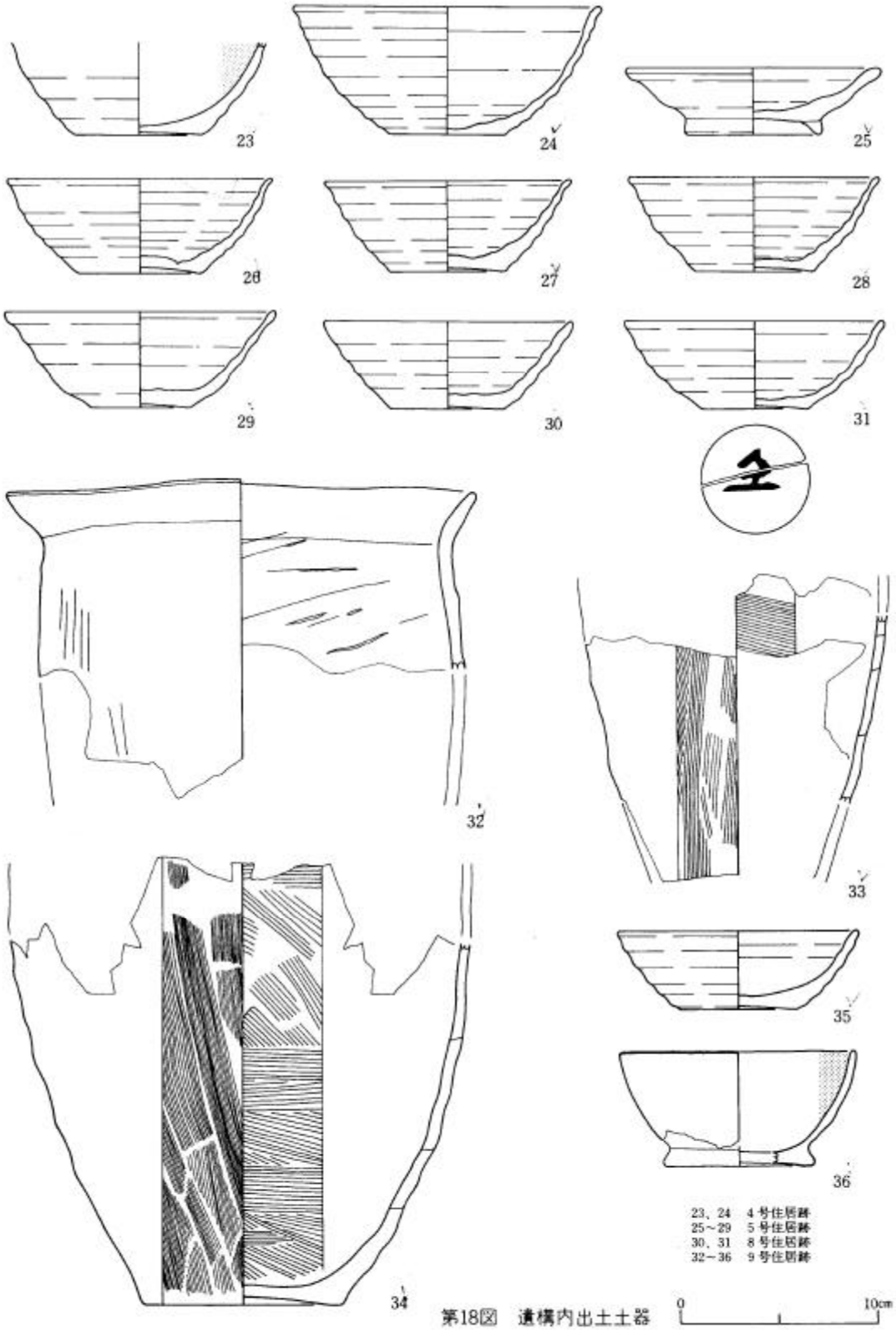
土器（第31図37、38）

37はカマド支脚、38は覆土出土である。37は土師器坏である。手づくねで、底部より内湾しながら立ち上がる。内外面に雑なミガキを施すが、外面には砂が露出している。38は赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、底部よりゆるく内湾しながら立ち上がる。

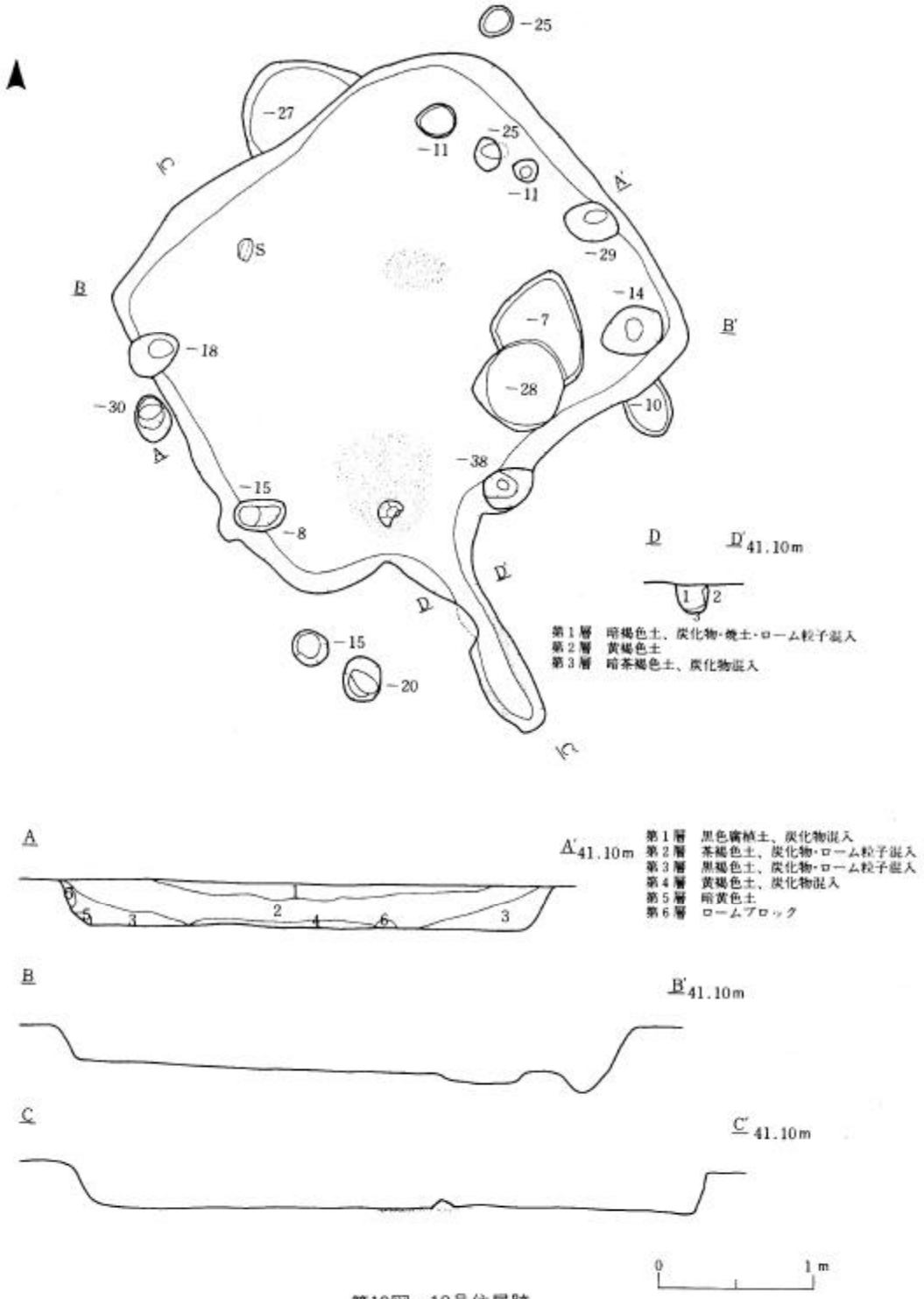
鉄製品（第35図１）

１は覆土出土である。刀子の一部で、かなり錆化が進んでいる。

11号住居跡（第20図）



第18図　遺構内出土土器


−25
−27
−11
−25
−11
−29
−14
−7
−28
−10
−18
−30
−38
−15
−8
−15
−20
S
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
41.10m
第1層　暗褐色土、炭化物・焼土・ローム粒子混入
第2層　黄褐色土
第3層　暗茶褐色土、炭化物混入
第1層　黒色腐植土、炭化物混入
第2層　茶褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第3層　黒褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第4層　黄褐色土、炭化物混入
第5層　暗黄色土
第6層　ロームブロック
41.10m
41.10m
41.10m
0
1 m

第19図　10号住居跡

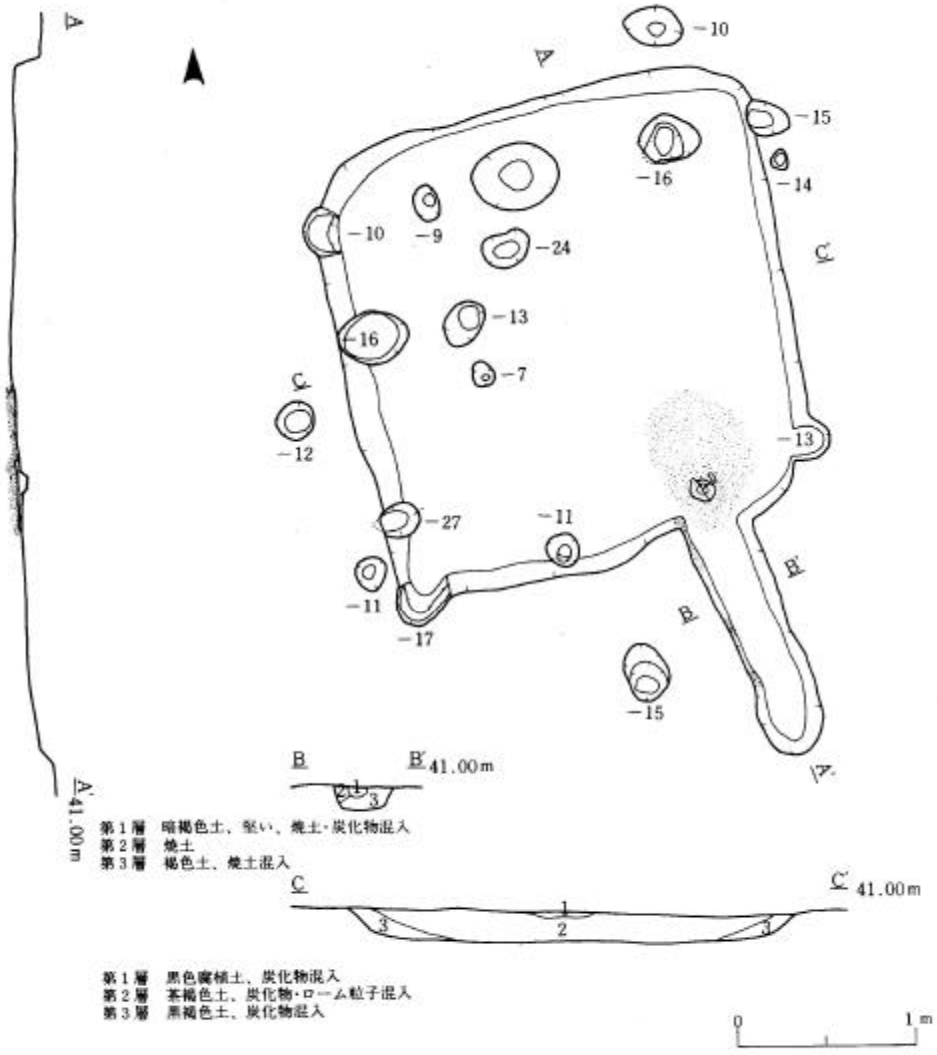
調査区の中央部で検出された。

プランは径2.6ｍの方形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは13個検出され、主柱穴は各コーナーの４個と考えられる。カマドは南壁の東側に構築されている。袖部は壊れ、燃焼部は火熱を受けて赤変し、赤褐色土器坏を伏せて支脚としている。煙道部は溝状に検出され、壁外へ1.4ｍ延びる。床は平坦である。

出土遺物

土器（第31図39）

39はカマド支脚である。赤褐色土器坏で、底部切り離し回転糸切り、無調整である。底部より内湾しながら立ち上がる。



第20図　11号住居跡

12号住居跡（第21図）

調査区の中央部南側で検出された。

プランは長軸3.5ｍ、短軸３ｍの不整方形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは21個検出されたが、主柱穴は不明である。カマドは東壁の北側に構築されている。袖部は壊れ、燃焼部は火熱を受けて赤変している。煙道部は溝状に検出され、壁外へ1.1ｍ延び、煙出し部はピット状に掘られ、側面が焼けている。カマドの両脇には径60cm、深さ20cmと28cmのピットがある。床は平坦である。

出土遺物

土器

赤褐色土器坏（底部切り離し回転糸切り、無調整）、土師器甕の破片が数量出土した。

13号住居跡（第22図）

調査区の中央部南側で検出された。

プランは径3.7ｍの方形を呈し、確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは34個検出されたが、主柱穴は不明である。カマドは東壁の北側に構築されている。袖部は壊れているが、北袖の芯材である土師器甕が残っていた。燃焼部は火熱を受けて赤変している。煙道部はトンネル状に検出され、壁外へ1.6ｍ延び、煙出し部の側面が焼けている。カマドの南側には径55cm、深さ51cmのピットがある。床は平坦で、住居中央部に径10cmの範囲の焼け痕が認められる。

出土遺物

土器（第31図40、41）

40はカマド北袖の芯材、41は覆土出土である。40は土師器甕である。胴部外面に縦位の刷毛目調整が施される。41は須恵器坏である。底部切り離し回転ヘラ切り、無調整で、底部より内湾しながら立ち上がる。焼成は不良である。

鉄製品（第35図２）

２は床面出土である。棒状をなし、先端部が尖るものである。かなり錆化が進んでいる。

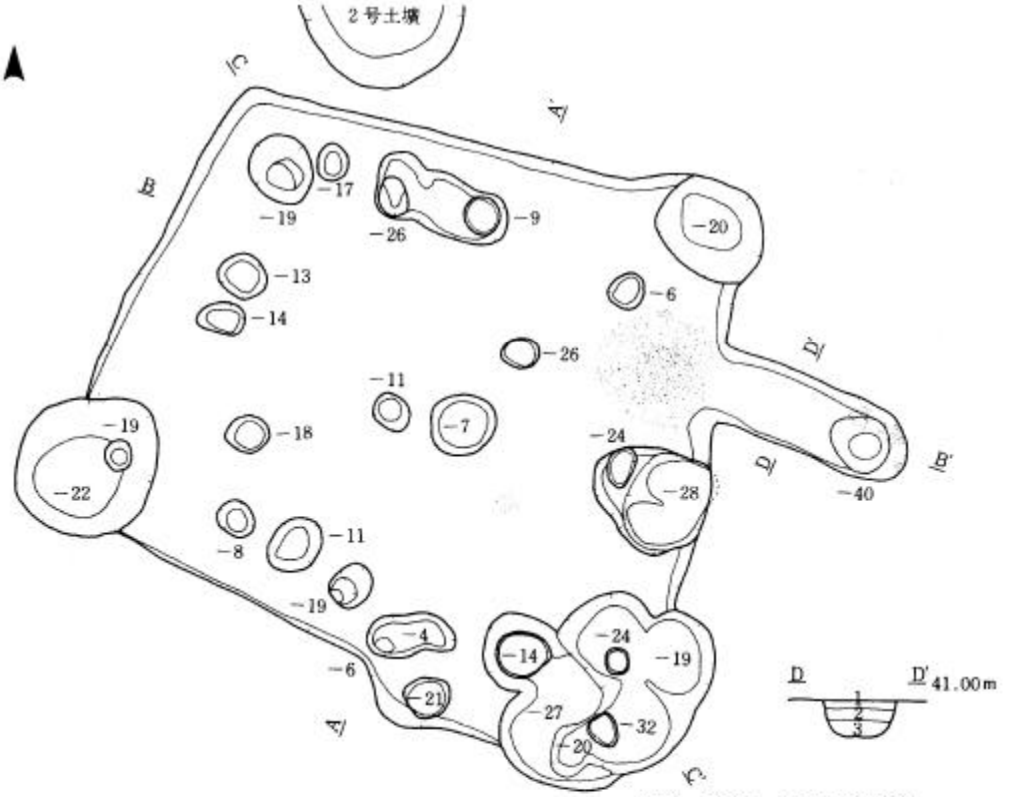
14号住居跡（第23図）

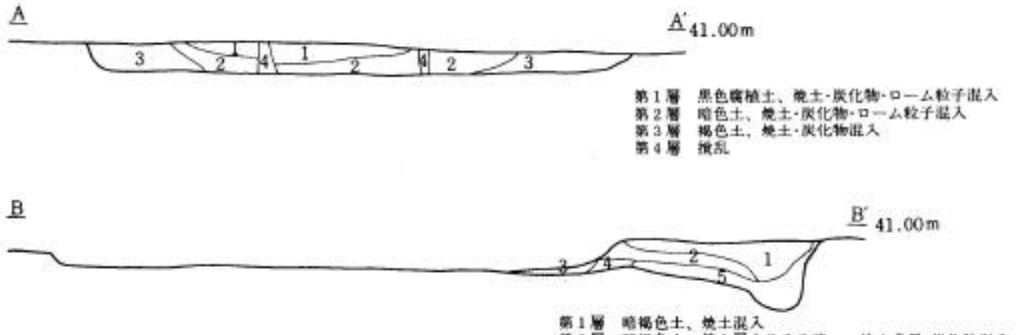
調査区の中央部で検出された。

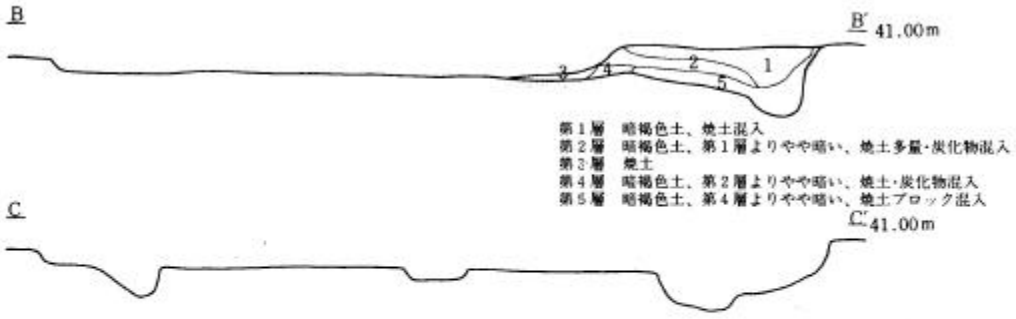
プランは長軸3.1ｍ、短軸2.9ｍのほぼ方形を呈し、確認面からの深さは40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは14個検出されたが、主柱穴は不明である。カマドは東壁の南側に構築されている。袖部は壊れ、燃焼部は火熱を受けて赤変している。煙道部は溝状に検出され、壁外へ1.5ｍ延び、煙出し部はピット状に掘られている。床は若干凹凸があり、住居中央部に長軸50cm、短軸20cmの範囲の焼け痕が認められる。

出土遺物

土器（第31図42～44、第39図117）

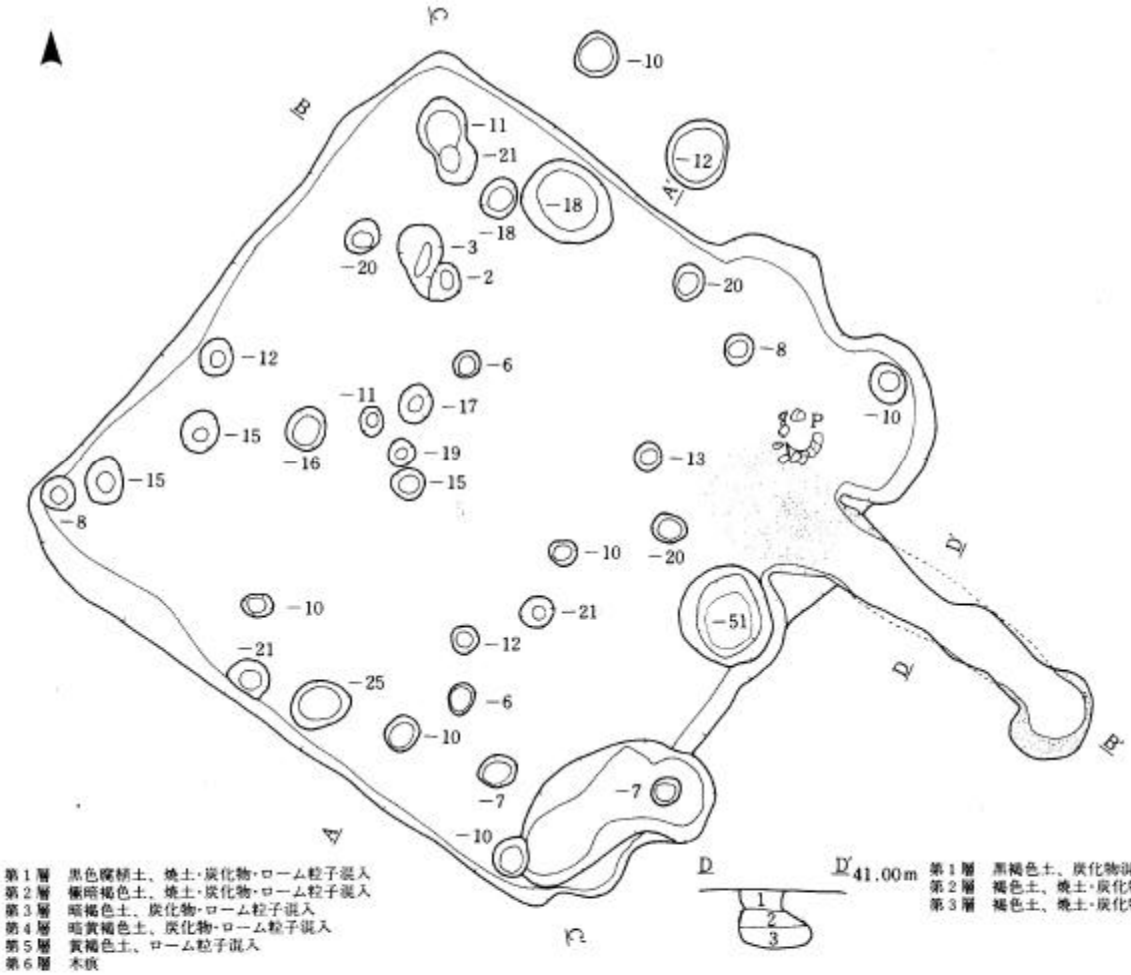






0　1m

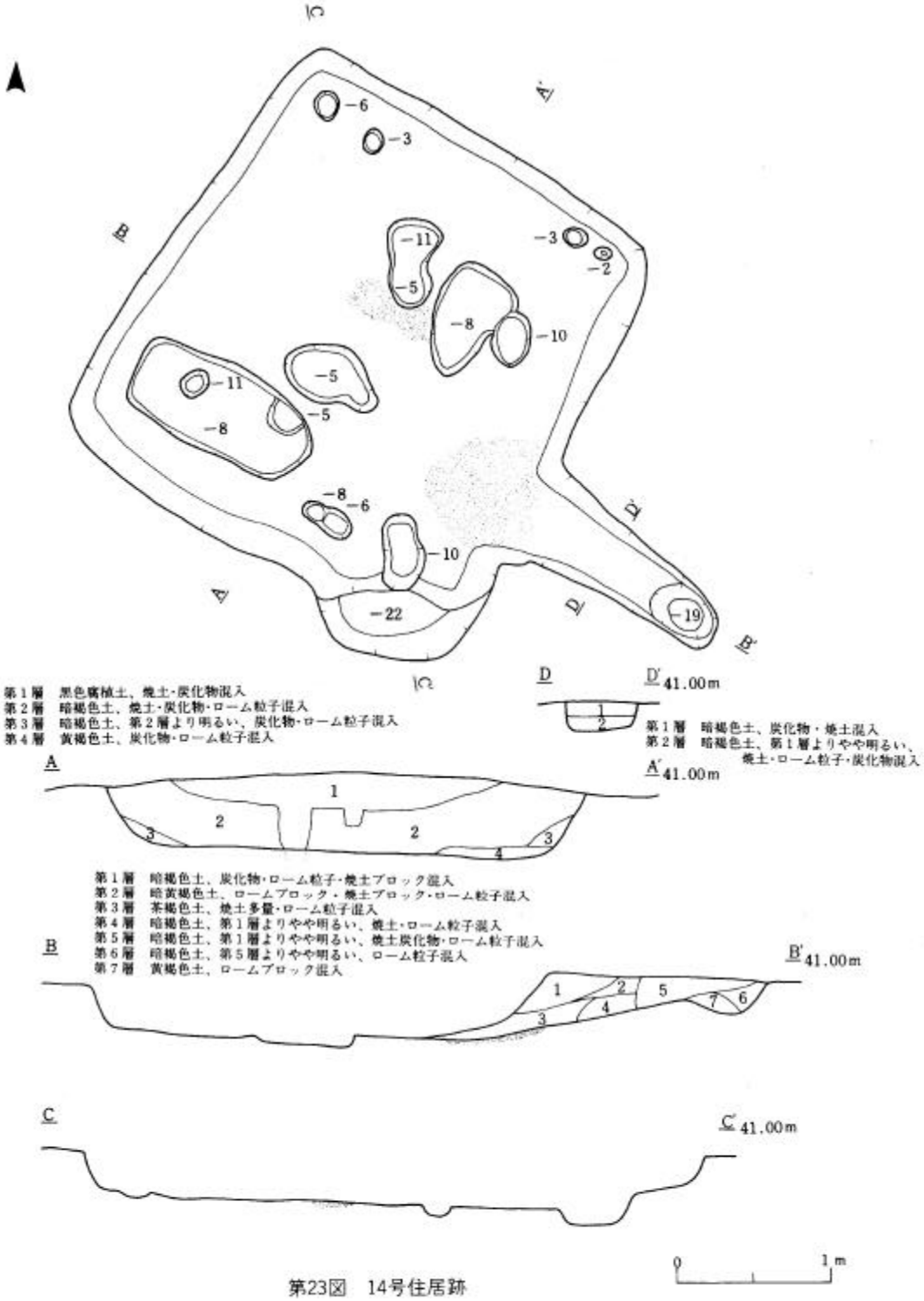
第21図　12号住居跡



第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第3層　褐色土、焼土多量・炭化物・ローム粒子混入
第4層　黒色土、炭化物混入
第5層　黒色土、焼土混入
第6層　焼土
第7層　焼土
第8層　褐色土、焼土・炭化物混入
第9層　褐色土、焼土粒子・炭化物混入
第10層　褐色土、焼土粒子・炭化物・ロームブロック混入
第11層　暗褐色土、焼土・炭化物・ロームブロック混入
第12層　黒褐色土、焼土・炭化物混入
第13層　黒褐色土、しまりがない、焼土・炭化物多量・ロームブロック混入

第22図　13号住居跡

0　1m


第1層　黒色腐植土、焼土・炭化物混入
第2層　暗褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第3層　暗褐色土、第2層より明るい、炭化物・ローム粒子混入
第4層　黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第1層　暗褐色土、炭化物・焼土混入
第2層　暗褐色土、第1層よりやや明るい、焼土・ローム粒子・炭化物混入
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子・焼土ブロック混入
第2層　暗黄褐色土、ロームブロック・焼土ブロック・ローム粒子混入
第3層　茶褐色土、焼土多量・ローム粒子混入
第4層　暗褐色土、第1層よりやや明るい、焼土・ローム粒子混入
第5層　暗褐色土、第1層よりやや明るい、焼土炭化物・ローム粒子混入
第6層　暗褐色土、第5層よりやや明るい、ローム粒子混入
第7層　黄褐色土、ロームブロック混入
A
A′ 41.00m
B
B′ 41.00m
C
C′ 41.00m
D
D′ 41.00m
0
1m

第23図　14号住居跡

42はカマド煙道部、43、44、117は覆土出土である。42、43は赤褐色土器坏である。いずれも底部切り離し回転糸切り、無調整で、底部よりゆるく内湾しながら立ち上がる。43は全体に摩滅が著しい。44は土師器甕である。長胴で、頸部が「く」の字状に外反する。外面は縦位に、内面は横位に刷毛目調整を施し、外面には煤状炭化物が付着する。117は須恵器甕の口縁部である。外面にロクロ痕が認められ、内面に自然釉がみられる。焼成は良好である。

鉄製品（第35図３）

３は覆土出土である。鎌の一部と考えられ、かなり錆化が進んでいる。

15号住居跡（第24図）

調査区の中央部で検出された。

プランは長軸4.2ｍ、短軸3.5ｍのほぼ方形を呈し、確認面からの深さは45cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がり、西壁の下には溝が認められた。ピットは16個検出され、主柱穴は各コーナーとその中間の７個である。カマドは南壁の西側に構築されている。袖部は良好な状態で残存し、黄色粘土、褐色土、暗褐色土で構築されている。両袖とも大きな川原石を芯材とし、西袖から３個、東袖から４個検出された。燃焼部は火熱を受けて赤変している。煙道部は溝状に検出され、壁外へ1.2ｍ延び、煙出し部へ向かって急激に立ち上がり、側面が焼けている。煙出し部はピット状に掘られている。カマドの東側に径60cm、深さ20cmのピットが、南壁の東側には径80cm、深さが住居確認面より80cm床面より25cmで、壁を40cm袋状に掘り込むピットが認められる。床は平坦で、カマド周辺が堅く、住居中央部に径25cmの範囲の焼け痕が認められる。

出土遺物

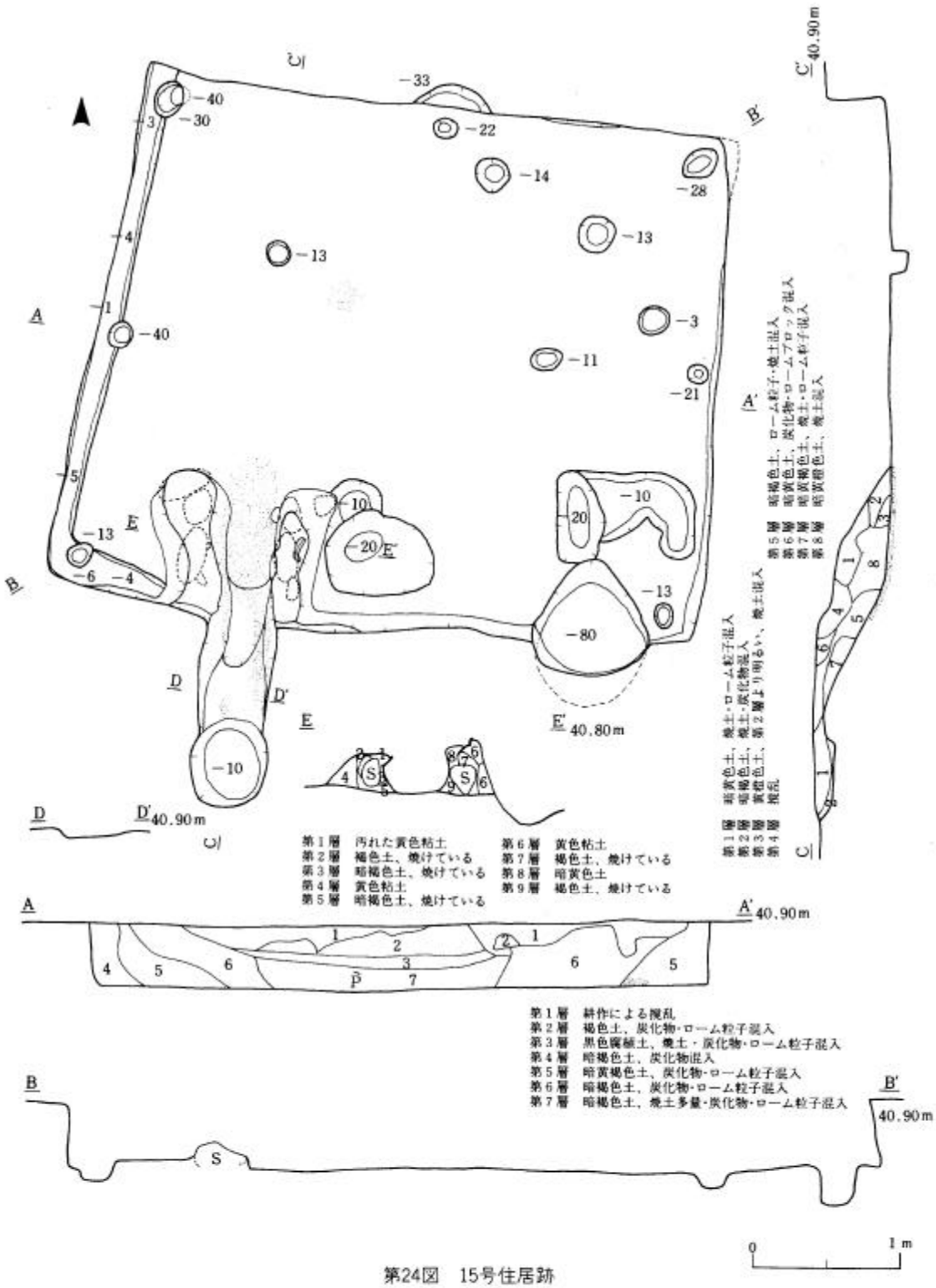
土器（第31、32図45～53、第39、40図118～121）

45はカマド燃焼部、118は床面、46～49はピット、50～53、119～121は覆土出土である。45は土師器甕である。胴部外面上方は刷毛目、下方及び底部周縁部はヘラケズリが施される。胎土に小石・砂が多く混入し、外面下方は器面に小石が露出している。46～53は赤褐色土器坏である。いずれも底部切り離し回転糸切り、無調整で、51の内外面にはタール状の付着物が認められる。48、49、51、52は全体に摩滅している。118は須恵器壺の破片である。ロクロ整形後外面はヘラケズリ、内面は刷毛目調整が施される。焼成は良好である。119～121は須恵器甕の破片である。119は口縁部、120、121は胴部で、外面は平行叩き板痕、内面は同心円状のアテ板痕が認められる。焼成は良好で、119、120の外面には自然釉がみられる。

鉄製品（第35図４～８）

４～８は覆土出土である。４は鎌、５は刀子、６は釘と考えられる。７は棒状をなし、先端部にかえしの付くものである。８は幅２～2.5cm、厚さ１～２mmの板状のものを重ねて折り曲げたものである。全て錆化が著しい。

石器（第75図１、２）


第1層　汚れた黄色粘土
第2層　褐色土、焼けている
第3層　暗褐色土、焼けている
第4層　黄色粘土
第5層　暗褐色土、焼けている
第6層　黄色粘土
第7層　褐色土、焼けている
第8層　暗黄色土
第9層　褐色土、焼けている
第1層　耕作による攪乱
第2層　褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第3層　黒色腐植土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第4層　暗褐色土、炭化物混入
第5層　暗黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第6層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第7層　暗褐色土、焼土多量・炭化物・ローム粒子混入
40.90m
40.80m
0
1 m

第24図　15号住居跡

1、2は覆土出土である。1は砥石で、三面を使用している。石質は緑色凝灰岩である。2は磨石で、両面を使用し、側面に敲打痕が認められる。

16号住居跡（第25図）

調査区の中央部で検出された。

プランは径3.9ｍの方形を呈し、確認面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは23個検出され、主柱穴は各コーナーの4個と考えられるが、いずれも浅い。カマドは南壁の西側に構築されている。袖部は西袖が一部残存するのみで、黄色粘土で構築され、土師器甕の破片で補強している。燃焼部は火熱を受けて赤変し、赤褐色土器坏を伏せて支脚としている。煙道部は溝状に検出され、壁外へ1.3ｍ延び、煙出し部は側面の一部が焼けている。床は平坦で、住居中央部に径30cm、東側に径50cmの範囲の焼け痕が認められる。

出土遺物

土器（第32図54～56）

54はカマド支脚、55、56は覆土出土である。54は赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、底部よりゆるく内湾しながら立ち上がる。55は須恵器台付坏である。底部切り離し回転糸切りで、切り離し後に低い台を付けている。焼成は良好である。56は須恵器壺である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、肩部の張る器形で、口縁部を欠く。焼成は良好である。

17号住居跡（第26図）

調査区の南西部で検出された。

プランは径2.1ｍの方形を呈し、確認面からの深さは7cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは5個検出されたが、主柱穴は不明である。カマドは南壁の東側に構築されている。袖部は壊れ、燃焼部は火熱を受けて赤変し、煙道部は短かく急激に立ち上がり、底部・側面が焼けている。床は平坦である。

出土遺物

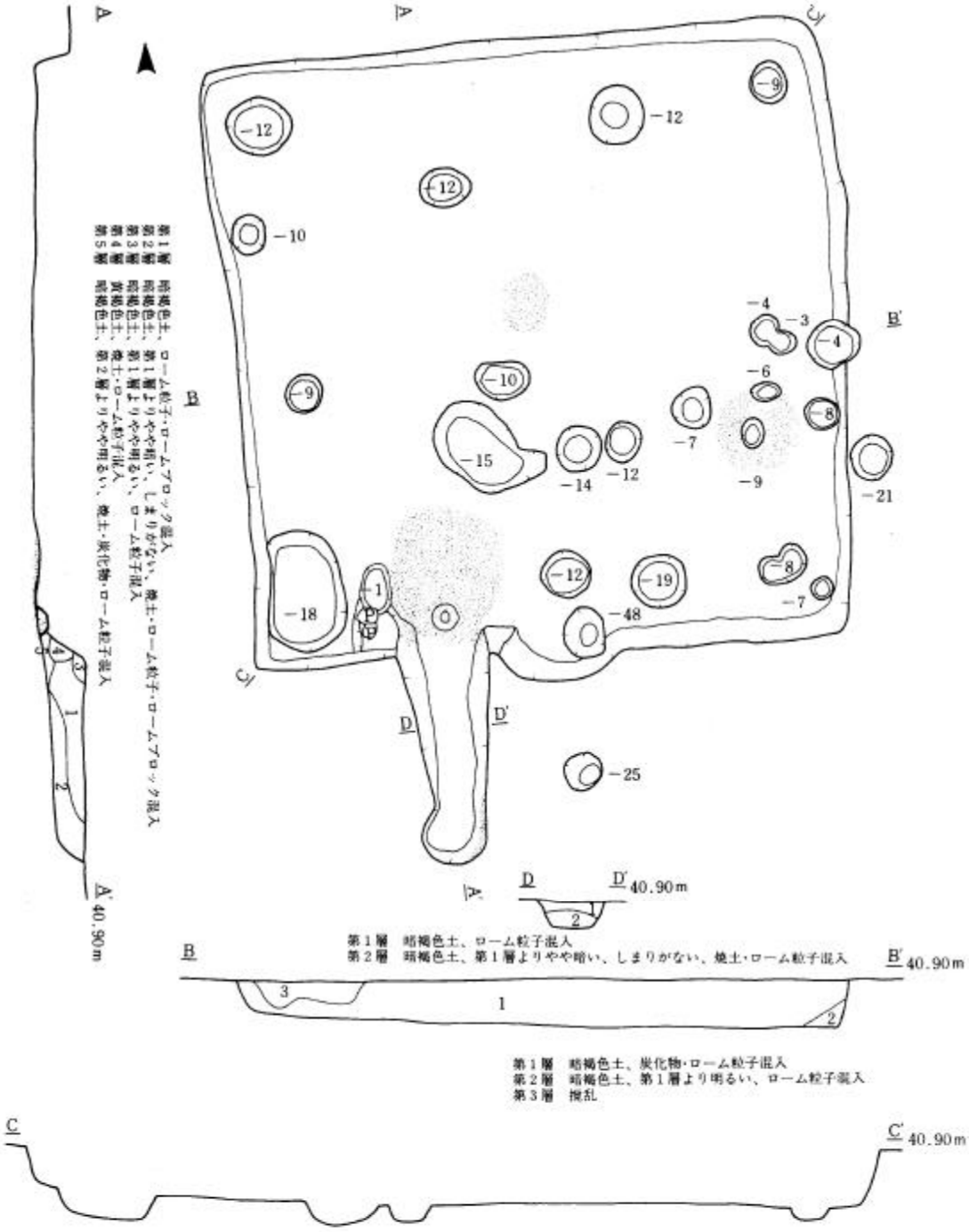
土器（第32図57～61、第40図122）

57～61、122は覆土出土である。57～60は赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、60は全体に摩滅している。61は赤褐色土器甕である。頸部が外反し、口縁部が内湾しながら立ち上がる。ロクロ整形で、底部切り離し回転糸切り、無調整である。外面に煤状炭化物の付着が著しい。122は須恵器壺の破片である。ロクロ痕が認められ、焼成は良好である。

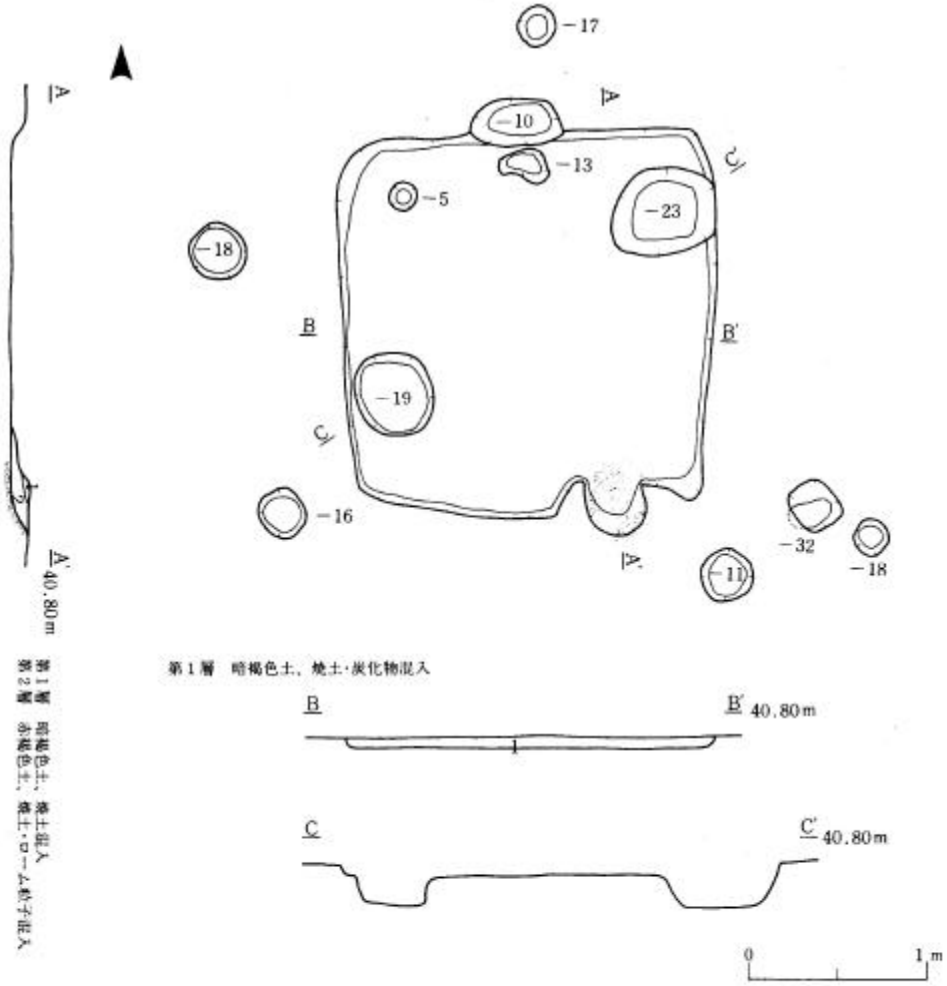
18号住居跡（第27図）

調査区の南西部で検出された。

プランは長軸3.4ｍ、短軸3.1ｍのほぼ方形を呈し、確認面からの深さは40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは12個検出され、主柱穴は各コーナーとその中間の7個と考えられる。カマドは東壁の南側に構築されている。袖部は一部が残存し、黄色粘土と褐色土で構築されている。燃


第1層　暗褐色土、ローム粒子・ローム・ブロック混入
第2層　黒褐色土、第1層よりやや暗い、しまりがない、焼土・ローム粒子・ローム・ブロック混入
第3層　黒褐色土、第1層よりやや明るい、ローム粒子混入
第4層　黄褐色土、焼土・ローム粒子混入
第5層　黒褐色土、第2層よりやや明るい、焼土・炭化物・ローム粒子混入
A
A'
40.90m
B
B'
40.90m
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、第1層よりやや暗い、しまりがない、焼土・ローム粒子・ローム・ブロック混入
C
C'
40.90m
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、第1層より明るい、ローム粒子混入
第3層　撹乱
D
D'
40.90m
0
1m

第25図　16号住居跡



第26図　17号住居跡

焼部は火熱を受けて赤変している。煙道部は溝状に検出され、壁外へ75cm延び、煙出し部へ向かって斜めに立ち上がり、底面・側面が焼けている。床は北側が約５cm低くなり、住居中央部に径40cmの範囲の焼け痕が認められる。

出土遺物

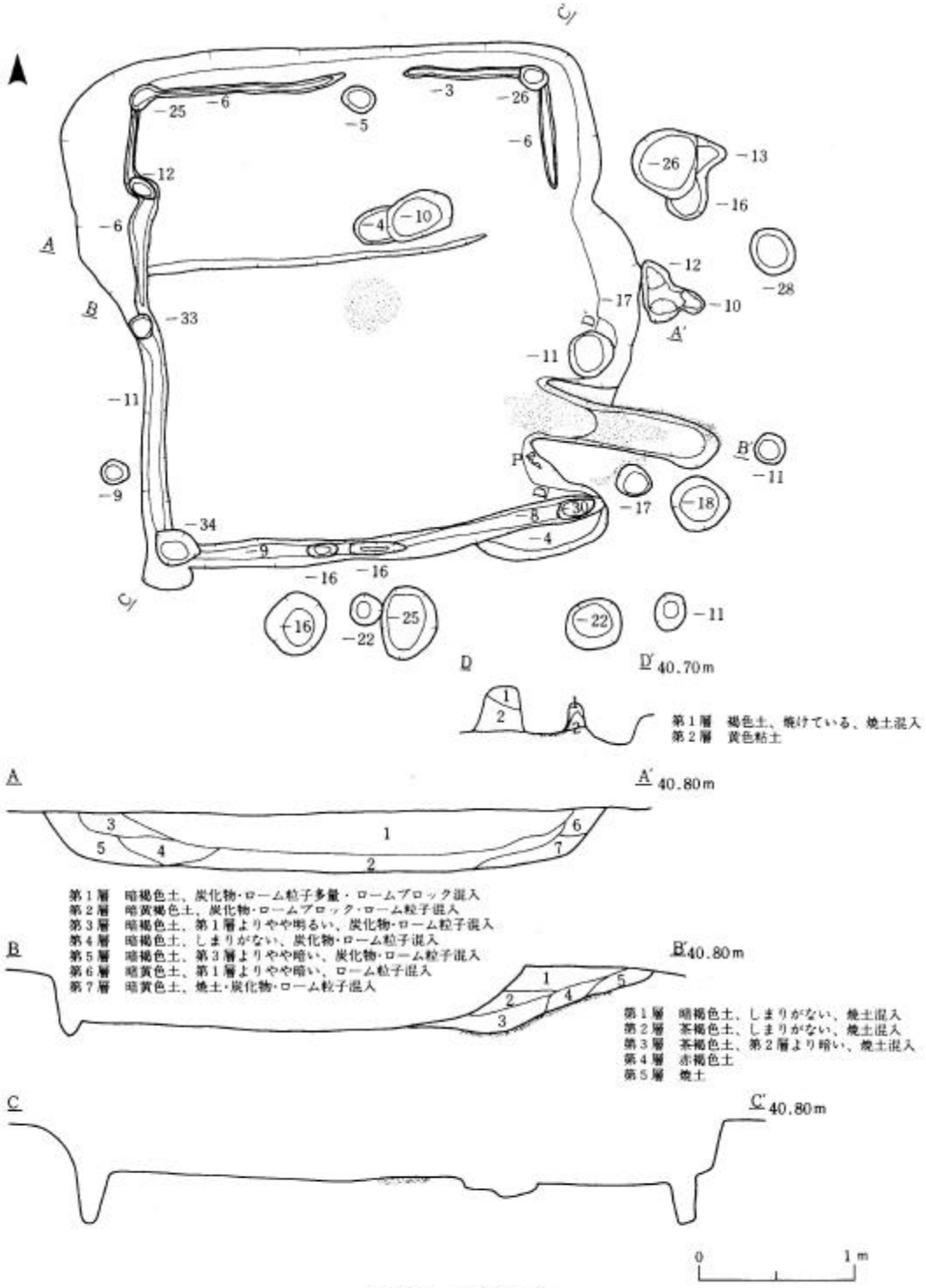
土器（第32図62、63）

62はカマド南袖の補強土器、63は覆土出土である。いずれも赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、底部より内湾しながら立ち上がる。63の内面にはタール状の付着物が認められる。

土製品（第28図１）

１は覆土出土である。フイゴの羽口で、径7.2cm、中心部に径2.6cmの穴があいている。

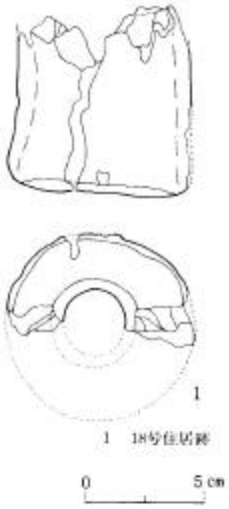
19号住居跡（第29図）


A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
40.70m
40.80m
40.80m
第1層　褐色土、焼けている、焼土混入
第2層　黄色粘土
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子多量・ロームブロック混入
第2層　暗黄褐色土、炭化物・ロームブロック・ローム粒子混入
第3層　暗褐色土、第1層よりやや明るい、炭化物・ローム粒子混入
第4層　暗褐色土、しまりがない、炭化物・ローム粒子混入
第5層　暗褐色土、第3層よりやや暗い、炭化物・ローム粒子混入
第6層　暗黄色土、第1層よりやや暗い、ローム粒子混入
第7層　暗黄色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第1層　暗褐色土、しまりがない、焼土混入
第2層　茶褐色土、しまりがない、焼土混入
第3層　茶褐色土、第2層より暗い、焼土混入
第4層　赤褐色土
第5層　焼土
0
1m

第27図　18号住居跡

調査区の南側で検出された。

プランは長軸4ｍ、短軸3.4ｍの長方形を呈し、7号土壙を切っている。確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは27個検出されたが、主柱穴は不明である。カマドは東壁の北側に構築されている。袖部は壊れ、燃焼部は火熱を受けて赤変し、煙道部は短かく急激に立ち上がる。カマドの北側には径50cm、深さ15cmのピットが、南側には長軸60cm、短軸40cm、深さ48cmの袋状をなすピットがある。床は平坦で中央部が堅い。また、住居中央部に3カ所焼け痕が認められる。



第28図
遺構内出土土製品

出土遺物

土器（第32、33図64～92）

64～70は床面、73～80はカマド南側のピット、71、72、81はピット、83～92は覆土出土である。72は内黒土師器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、底部よりゆるく内湾しながら立ち上がる。内外面に漆状の付着物が認められる。他は赤褐色土器坏である。底部切り離しは65が摩滅により不明であるが、他は回転糸切り、無調整である。ほとんどのものは底部より内湾しながら立ち上がり、口縁部が外反するものもある。かなりいびつなものもみられる。

20号住居跡（第30図）

調査区の南西部で検出された。

プランは長軸2.3ｍ、短軸2ｍのほぼ方形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは住居内に2個、住居外に数個検出されたが、主柱穴は不明である。カマドは東壁の南側に構築されている。袖部は一部が残存し、黄色粘土、暗褐色土、褐色土で構築されている。燃焼部は火熱を受けて赤変し、伏せた赤褐色土器坏と細長い石を立てて支脚としている。煙道部は短かく急激に立ち上がる。カマドの南側には長軸90cm、短軸50cm、深さ18cmで底面の焼けたピットがある。床は平坦である。

出土遺物

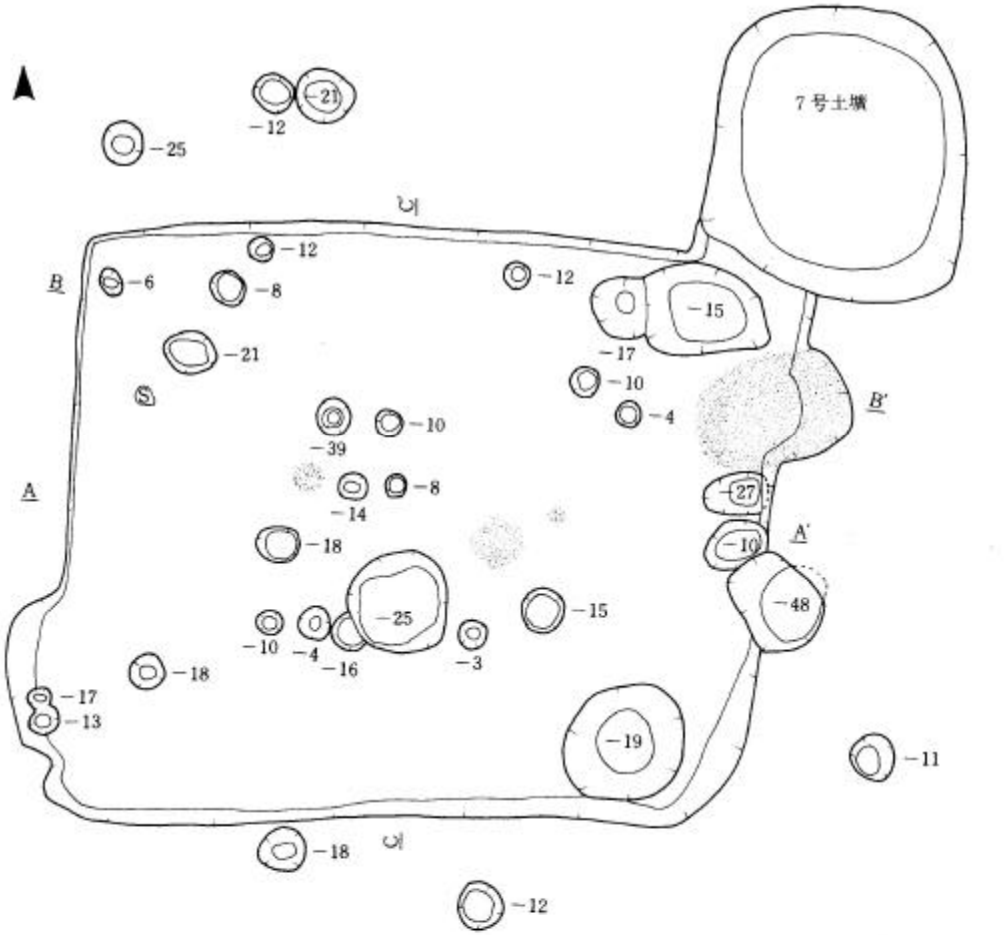
土器（第38図93、94、第40図123）

93はカマド煙道部、94はピット、123はカマド燃焼部の覆土出土である。93、94は赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、底部より内湾しながら立ち上がる。123は須恵器甕の破片である。外面は平行叩き板痕、内面は平行アテ板痕が認められる。

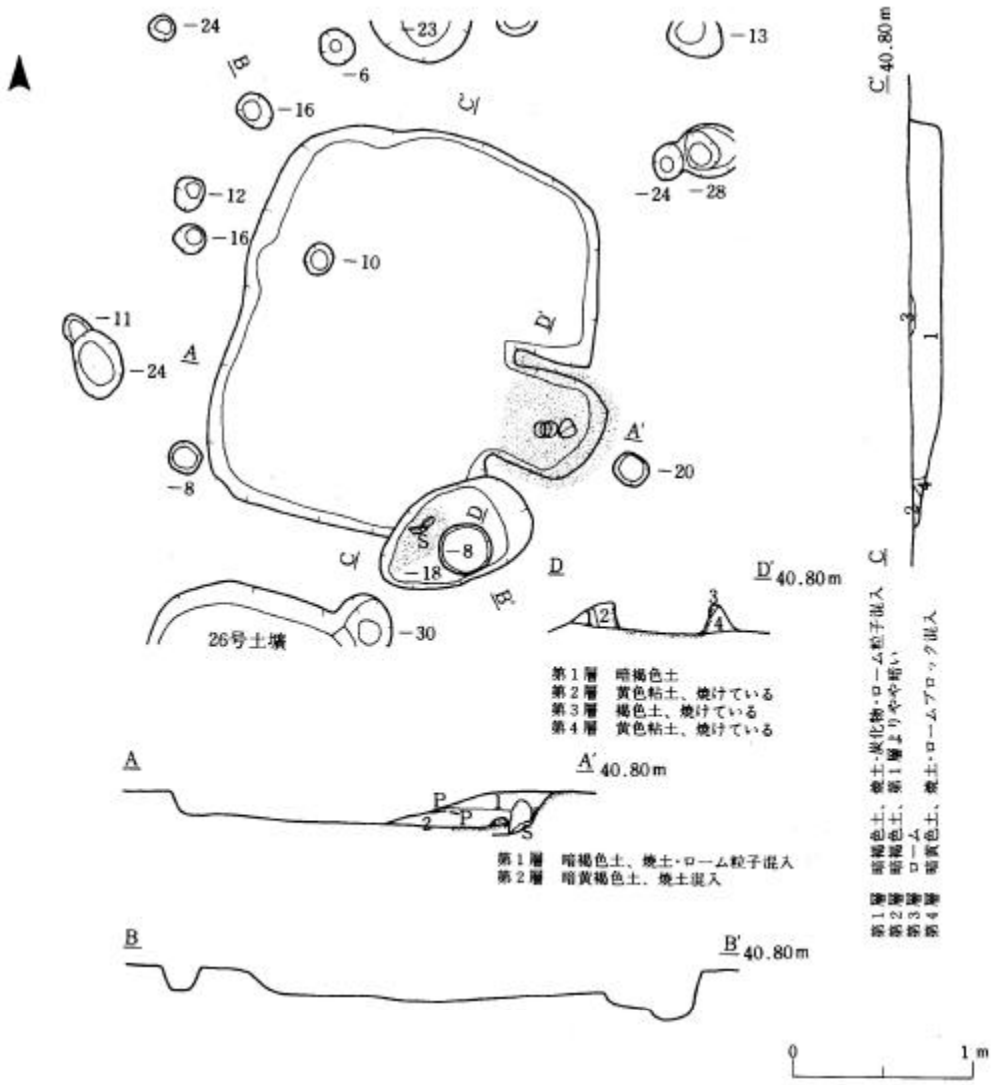
21号住居跡（第34図）

調査区の南西部で検出された。

プランは長軸6ｍ、短軸3.3ｍの長方形を呈し、31、36号土壙を切っている。確認面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がり、部分的に周溝が認められる。ピットは18個検出されたが、


7号土壙
A
A'
B
B'
C
C'
S
P
40.80m
第1層　暗黄褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子・ロームブロック混入
第2層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第3層　焼土
第4層　暗褐色土、焼土・炭化物多量混入
第5層　黄褐色土、しまりがない、焼土混入
第6層　暗褐色土、焼土・炭化物混入
第7層　暗褐色土、焼土多量・炭化物混入
第8層　暗褐色土、焼土・ローム粒子混入
第9層　暗黄褐色土、第1層よりやや暗い、焼土・ローム粒子混入
第10層　焼土、しまりがない
第11層　暗褐色土、焼土・ローム粒子混入
第1層　暗褐色土、焼土混入
第2層　暗黄色土、しまりがない、焼土混入
0
1m

第29図　19号住居跡



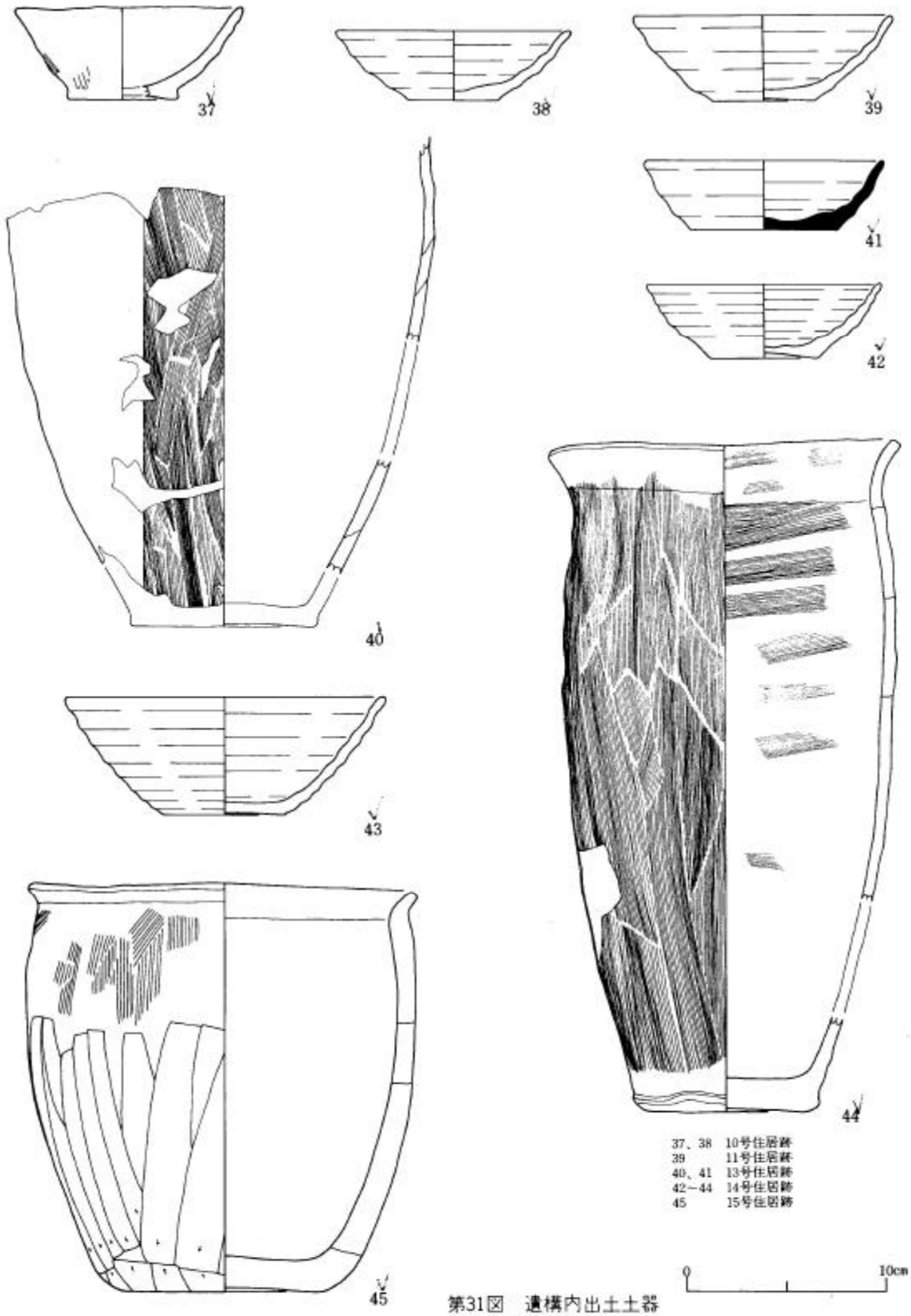
第30図　20号住居跡

主柱穴は不明である。カマドは東壁の南側に構築されている。袖部は南袖の一部が残存し、握り拳大やそれよりもやや大き目の川原石を芯材とし、黄色粘土で構築されている。燃焼部は火熱を受けて赤変し、煙道部は短かく急激に立ち上がり、側面が焼けている。カマドの南側には径40cm、深さ17cmのピットがある。床は平坦で堅いが、西側1.5ｍの範囲は軟らかい。

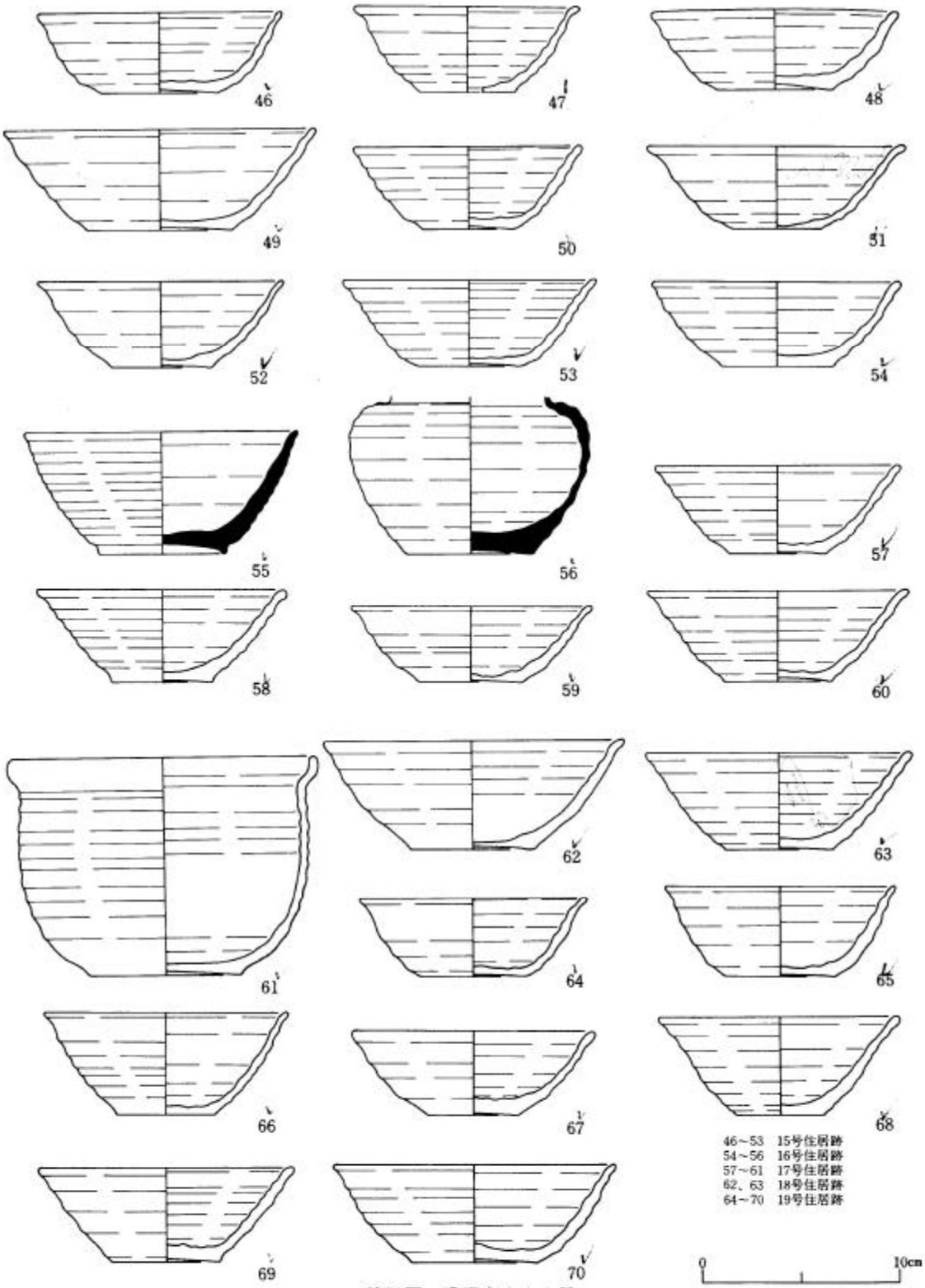
出土遺物

土器（第38図95～102）

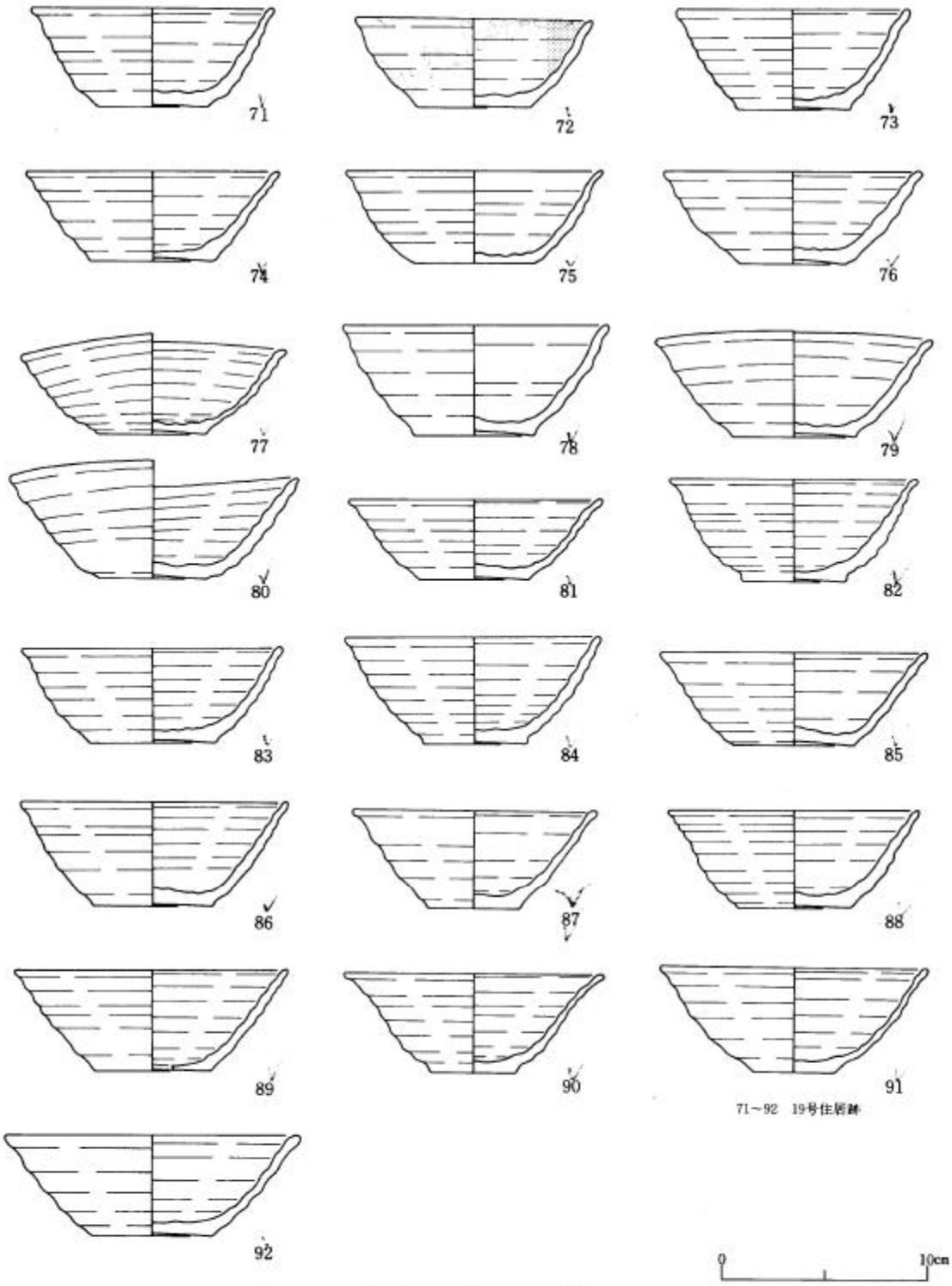
95～97は床面、98、99はピット、100はカマド燃焼部、101、102は覆土出土である。98は内黒土師器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、内面黒色処理を施す。底部より内湾しながら



第31図　遺構内出土土器

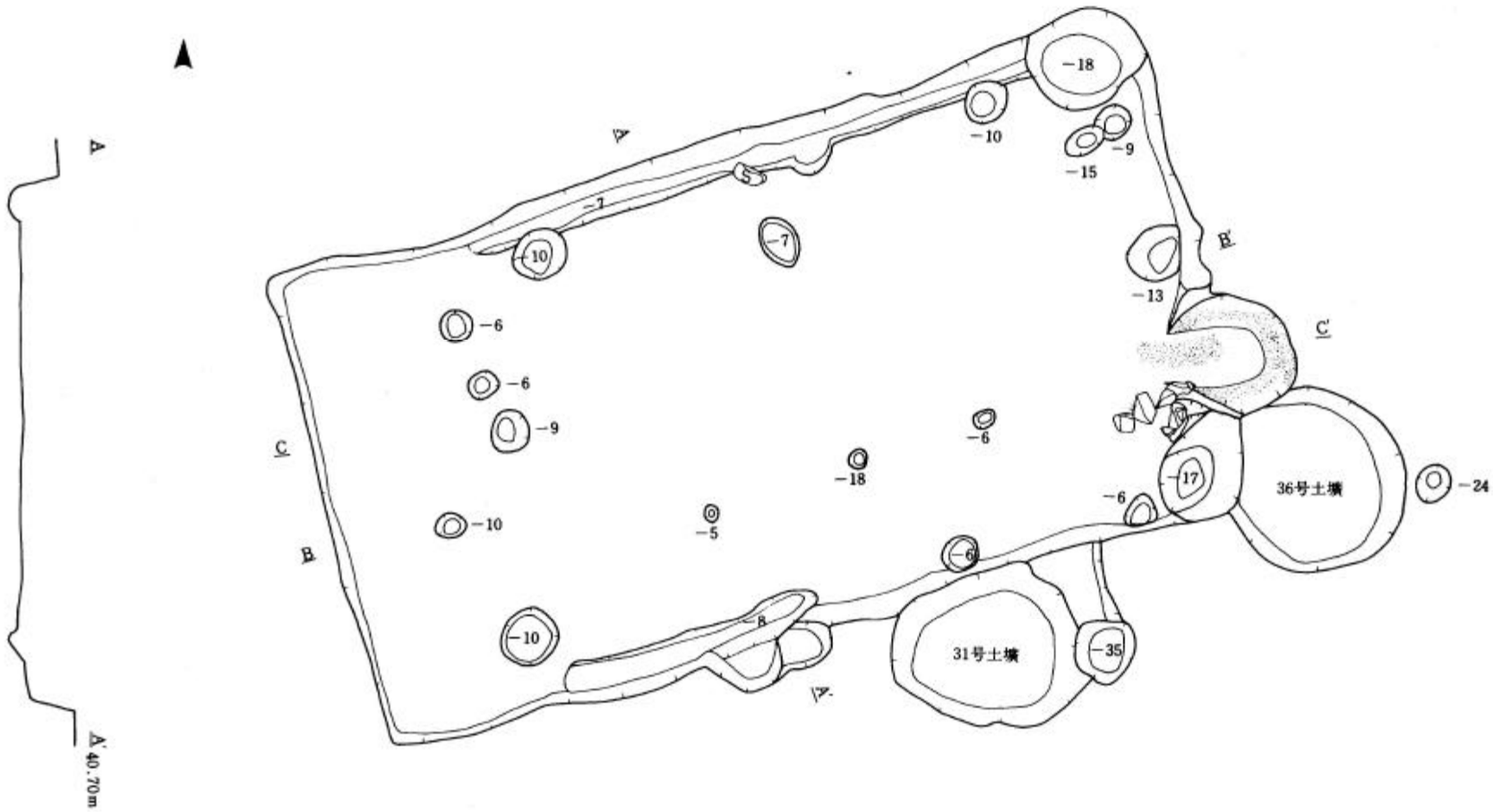


第32図　遺構内出土土器

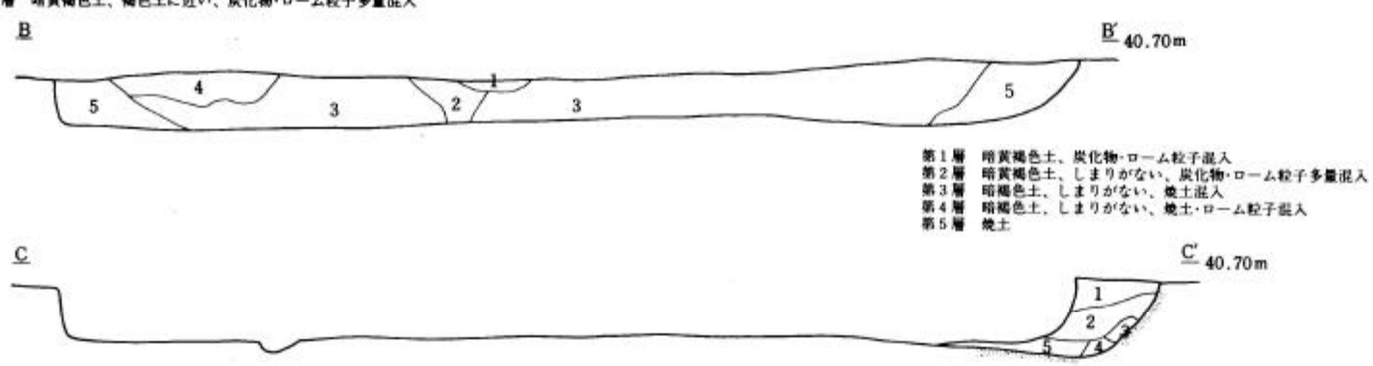


71～92　19号住居跡

第33図　遺構内出土土器



第1層　暗黄褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗黄褐色土、やや焼みがある、炭化物・ローム粒子混入
第3層　暗黄褐色土、炭化物・ローム粒子多量混入
第4層　暗黄褐色土、炭化物・ローム粒子多量混入
第5層　暗黄褐色土、褐色土に近い、炭化物・ローム粒子多量混入



第1層　暗黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗黄褐色土、しまりがない、炭化物・ローム粒子多量混入
第3層　暗褐色土、しまりがない、焼土混入
第4層　暗褐色土、しまりがない、焼土・ローム粒子混入
第5層　焼土

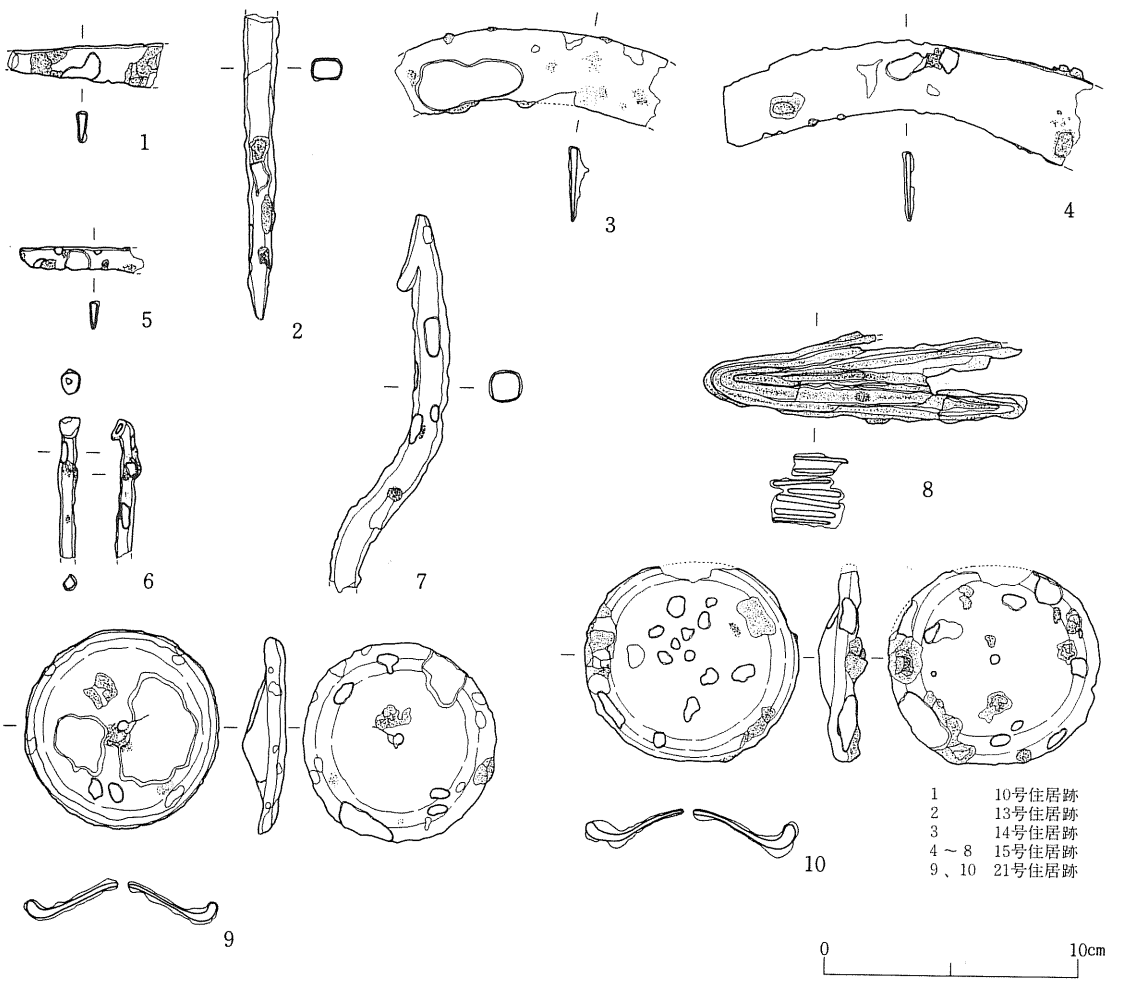
第34図　21号住居跡

0　1m

立ち上がり、内面底部と外面下方にヘラミガキが施される。95～97、99、101、102は赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整である。100は赤褐色土器甕である。ロクロ成形で、頸部が外反して口縁部が立ち上がる。底部切り離し回転糸切り、無調整である。

鉄製品（第35図９、10）

９、10は覆土出土である。円形を呈し、中央部と周縁部が盛り上がり、中心部に孔がみられる。紡錘車であろうか。かなり錆化が進んでいる。



第35図　遺構内出土鉄製品

22号住居跡（第36図）

調査区の南西部で検出された。

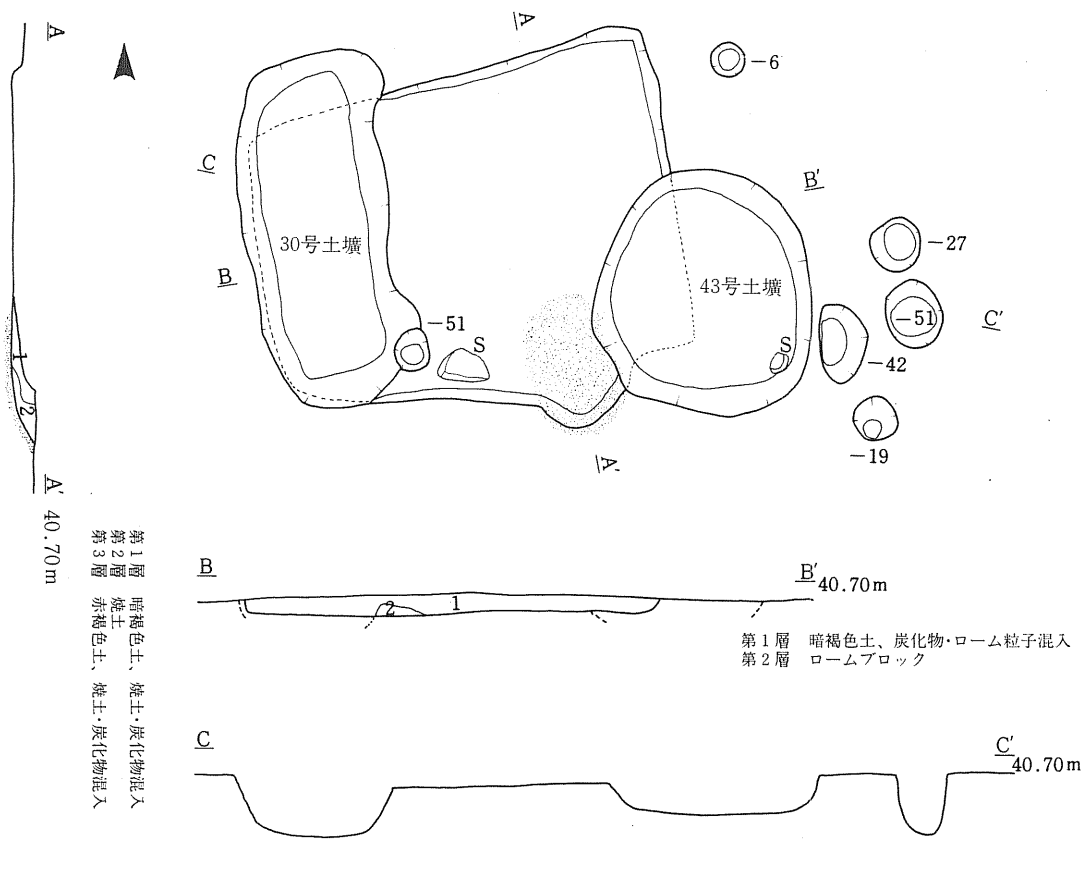
プランは推定長軸2.2ｍ、短軸1.7ｍのほぼ方形を呈し、30、43号土壙を切っている。確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは１個のみの検出である。カマドは南壁の東側に構築されている。袖部は壊れ、燃焼部は火熱を受けて赤変し、煙道部は短かく急激に立ち上

がる。床は平坦である。

出土遺物

土器（第38図103、104）

103、104は覆土出土である。103は赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、底部より内湾しながら立ち上がり、口縁部が外反する。104は赤褐色土器台付皿である。底部切り離し回転糸切りで、切り離し後に台を付けている。

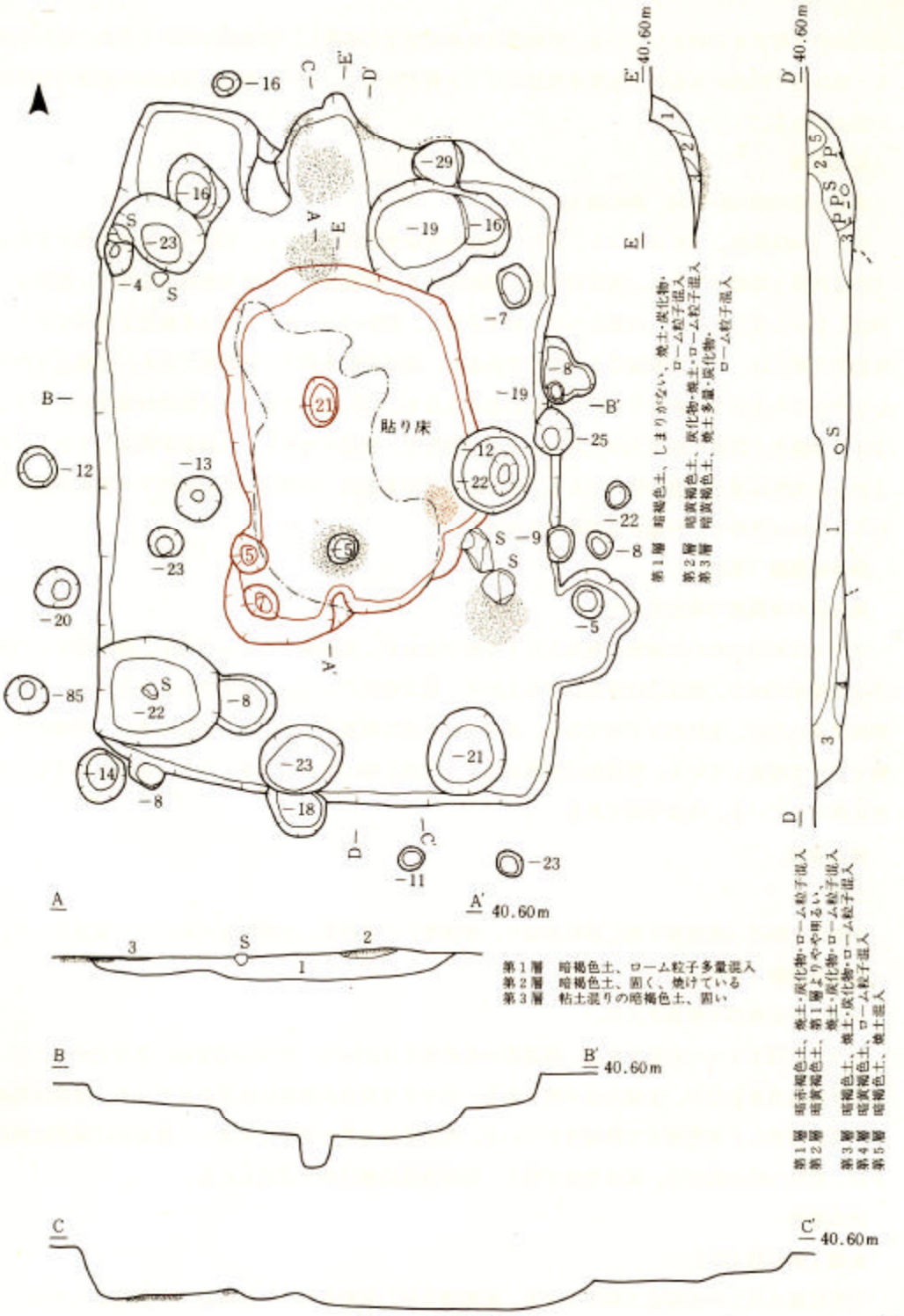


第36図　22号住居跡

23号住居跡（第37図）

調査区の南西部で検出された。

プランは長軸4.3m、短軸2.9mの長方形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居中央部に長軸2.2m、短軸1.5m、深さ15cmの掘り込みが認められ、底面の南東部に径20cmの焼け痕が認められる。住居はこの掘り込みを貼って床とし、貼り床は堅い。ピットは19個検出され、主柱穴は各コーナーの径40～70cm、深さ16～22cmの4個と考えられる。カマドは北壁の中央部に構築されている。袖部は一部が残存し、小礫の混じった黄色粘土で構築され、西袖は


貼り床
A
A'
40.60m
第1層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
第2層　暗褐色土、固く、焼けている
第3層　粘土混りの暗褐色土、固い
B
B'
40.60m
C
C'
40.60m
D
D'
40.60m
E
E'
40.60m
第1層　暗褐色土、しまりがない、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗黄褐色土、炭化物・焼土・ローム粒子混入
第3層　暗黄褐色土、焼土多量・炭化物・ローム粒子混入
第1層　暗赤褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗黄褐色土、第1層よりやや明るい、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第3層　暗褐色土、焼土・ローム粒子混入
第4層　暗黄褐色土、ローム粒子混入
第5層　暗褐色土、焼土混入
0
1m

第37図　23号住居跡

径13cmの川原石を芯材としている。燃焼部は火熱を受けて赤変し、煙道部は短かく急激に立ち上がる。床は若干凹凸がみられ、住居中央部のピット周辺は堅く、焼け、東側に径40cmの範囲の焼け痕が認められる。

出土遺物

土器（第38図105～114、第40図 124 ）

105、124は床面、 106 はピット、107、108は住居中央部の掘り込み、109～114は覆土出土である。109 は内黒土師器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、内面黒色処理を施す。底部より内湾しながら立ち上がり、内面にヘラミガキを施す。105～108、110～113は赤褐色土器坏である。底部切り離しは、 105 が摩滅により不明であるが、他は回転糸切り、無調整である。底部より内湾しながら立ち上がり、かなりいびつなものもみられる。110、112にはタール状の付着物がみられる。114 は赤褐色土器甕の胴部上半である。ロクロ整形で、頸部が外反し、口縁部が内湾しながら立ち上がる。 124 は須恵器甕の破片である。外面は平行叩き板痕、内面は同心円状のアテ板痕が認められる。焼成は良好で、外面に自然釉がみられる。

24号住居跡（第41図）

調査区の南西部で検出された。

プランは斜面のために南壁が検出されず不明であるが、東西軸が 3.4 m である。確認面からの深さは北側が10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がり、縄文時代の 2 基の土壙を切っている。ピットは11個検出されたが、主柱穴は不明である。カマドは東壁に構築されている。袖部は壊れ、燃焼部は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁側が広く、煙出し部に向かって狭くなり、煙出し部はピット状に掘られている。床は平坦である。

出土遺物

土器

赤褐色土器坏（底部切り離し回転糸切り、無調整）・台付皿、土師器甕の破片が少量出土した。

25号住居跡（第42図）

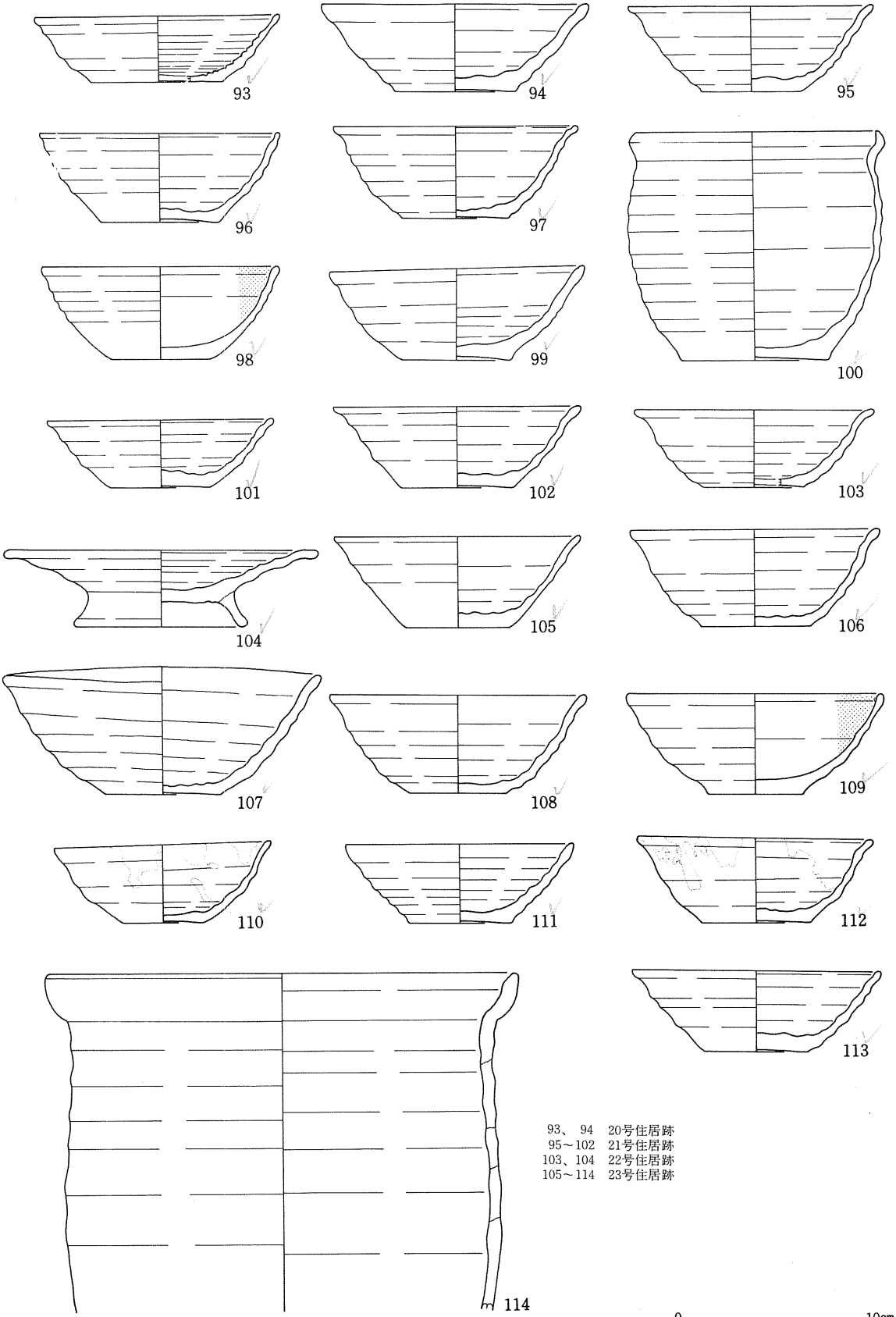
調査区の南西部で検出された。

プランは径 2.4 m の方形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは 9 個検出されたが、主柱穴は不明である。カマドは南壁の東側に構築されている。袖部は西袖の一部が残存し、黄色粘土で構築されている。燃焼部は火熱を受けて赤変し、煙道部は溝状に検出され、壁外へ65cm延びる。床は平坦で堅く、住居南側に焼け痕が認められる。

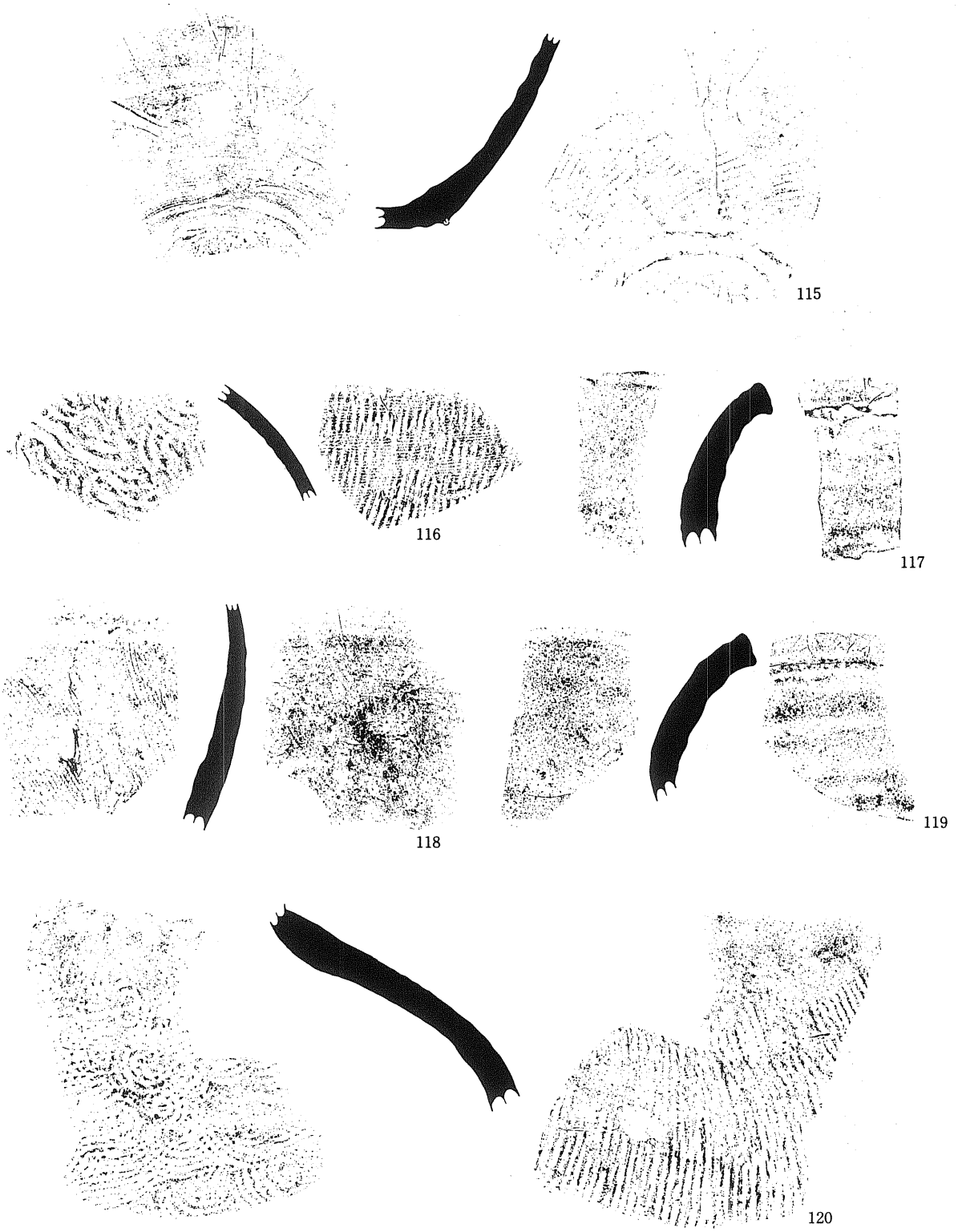
出土遺物

土器（第49図 125 ）

125 は覆土出土の赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、底部より内湾しながら立ち上がる。



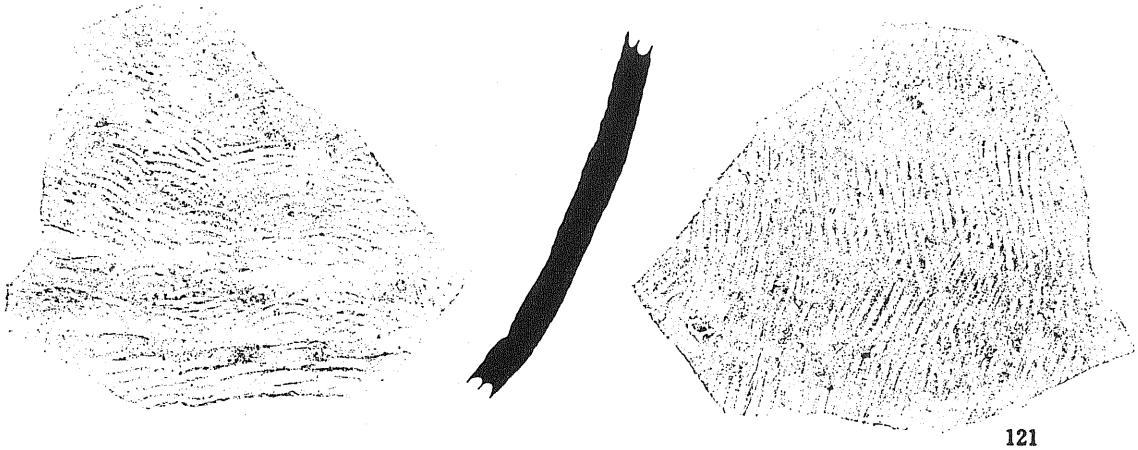
第38図　遺構内出土土器



115　2号住居跡　　117　　14号住居跡
116　9号住居跡　　118～120　15号住居跡

第39図　遺構内出土土器

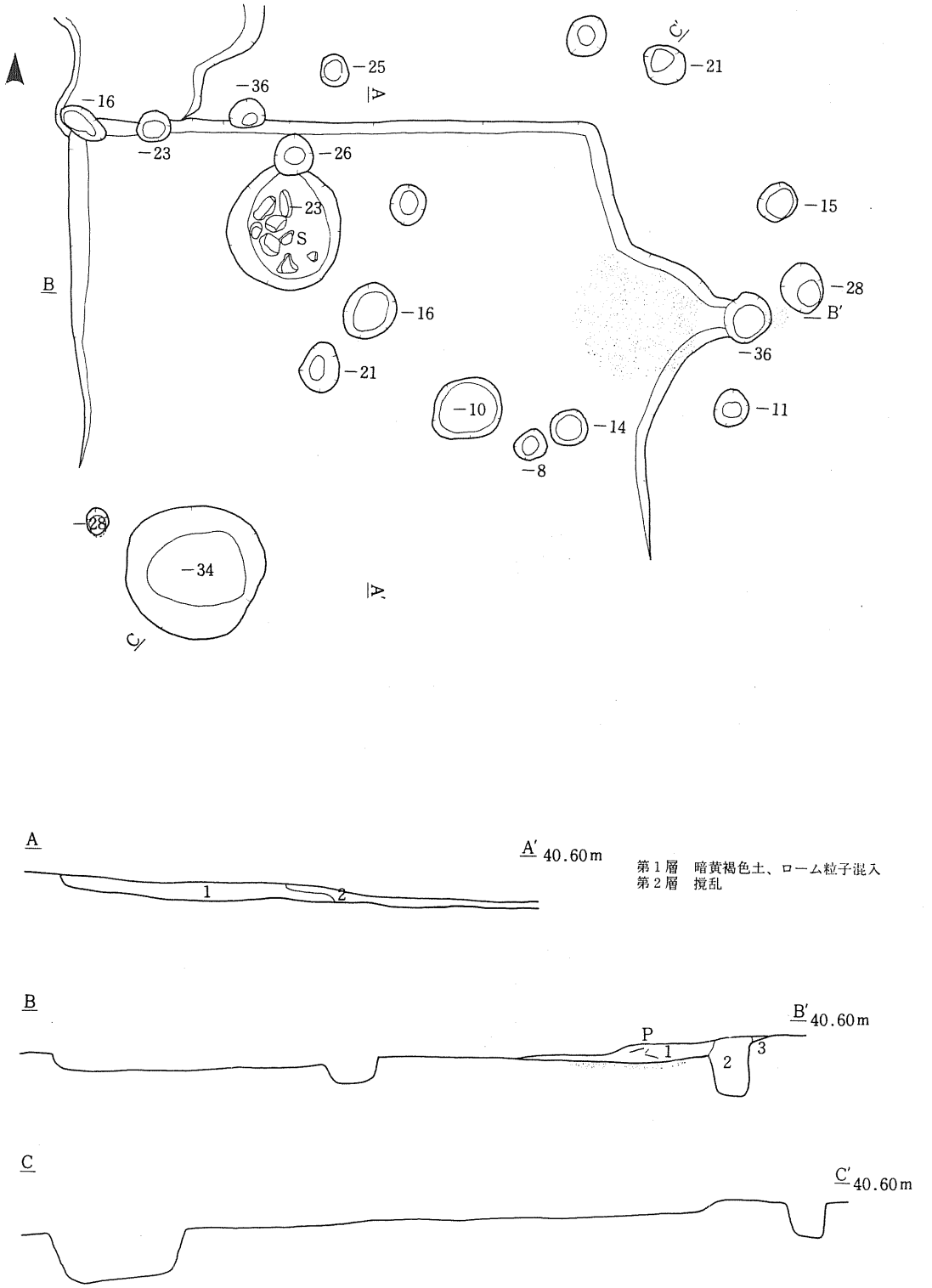
0　10cm



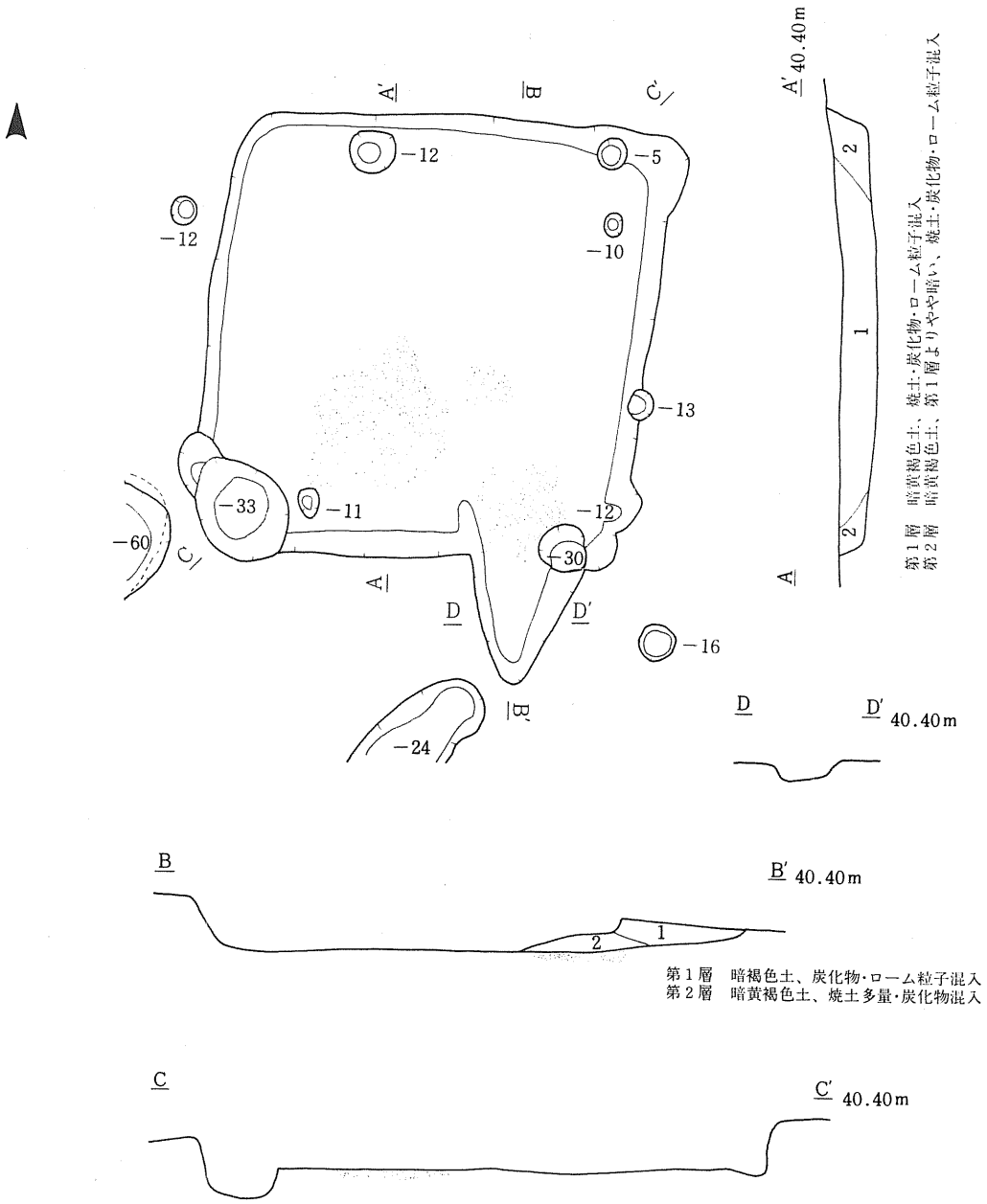
121　15号住居跡　　123　20号住居跡
122　17号住居跡　　124　23号住居跡

第40図　遺構内出土土器

0　10cm


−16
−23
−36
−25
A
−26
−23
S
B
−16
−21
−10
−14
−8
−28
−34
A′
C′
C′
−21
−15
−28
B′
−36
−11
A
A′ 40.60m
1
2
第1層　暗黄褐色土、ローム粒子混入
第2層　撹乱
B
B′ 40.60m
P
1
2
3
C
C′ 40.60m
0
1 m

第41図　24号住居跡



第42図　25号住居跡

26号住居跡（第43図）

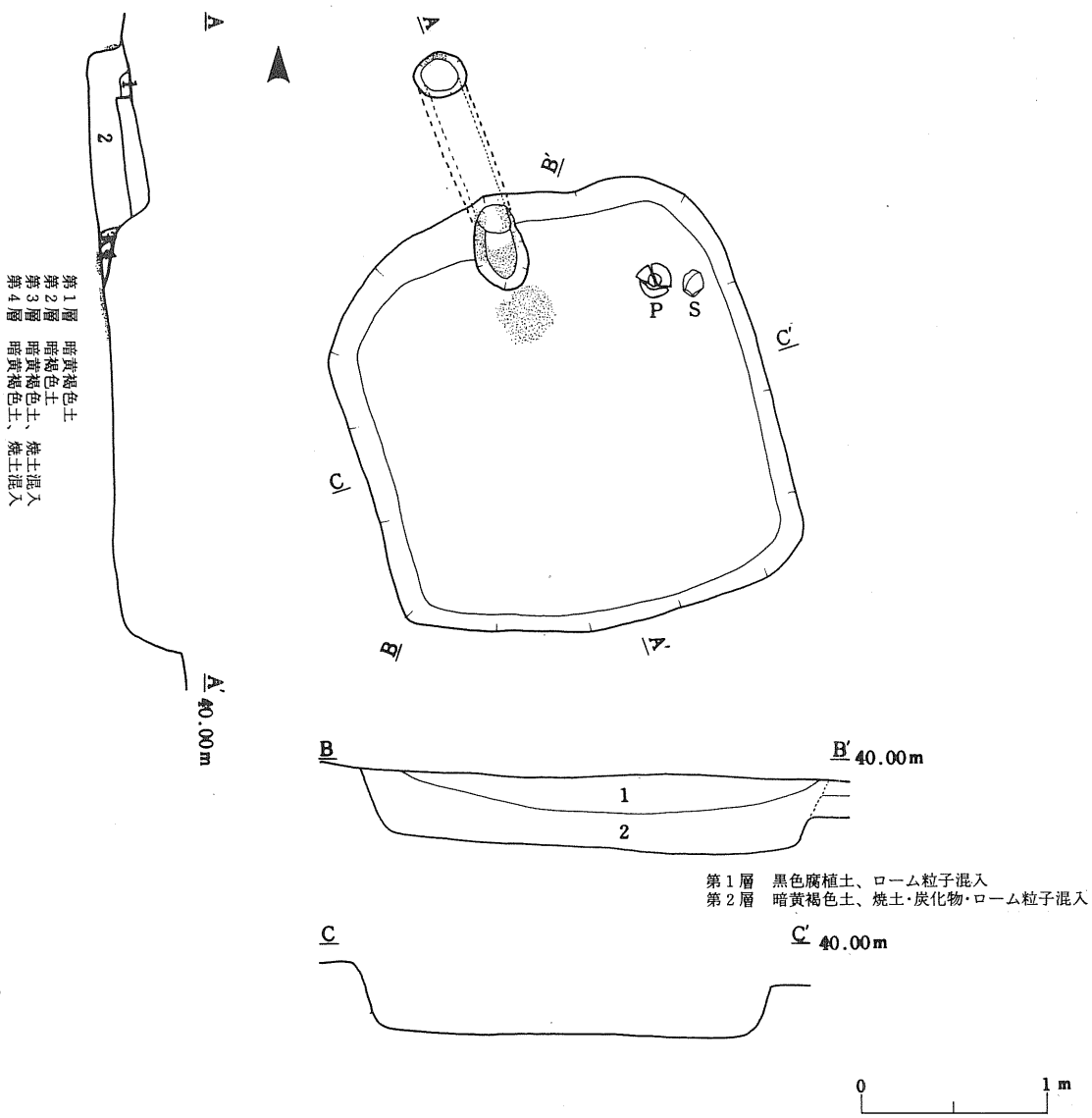
調査区の東側で検出された。

プランは長軸2.4ｍ、短軸2.2ｍのほぼ方形を呈し、確認面からの深さは40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは検出されない。カマドは北壁の中央部に構築されている。袖部は壊れ、燃焼部は火熱を受けて赤変している。煙道部はトンネル状に検出され、壁外へ80cm延び、煙出し部の側面が焼けている。床は平坦である。

出土遺物

土器（第49図126～129）

126は床面、127～129は覆土出土である。126～128は赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、底部よりゆるく内湾しながら立ち上がる。129は土師器甕である。頸部が外反し、口縁部はゆるく内湾しながら立ち上がる器形で、巻き上げ後に全体を指ナデにより整形している。底部に菅葉痕のような圧痕が認められる。

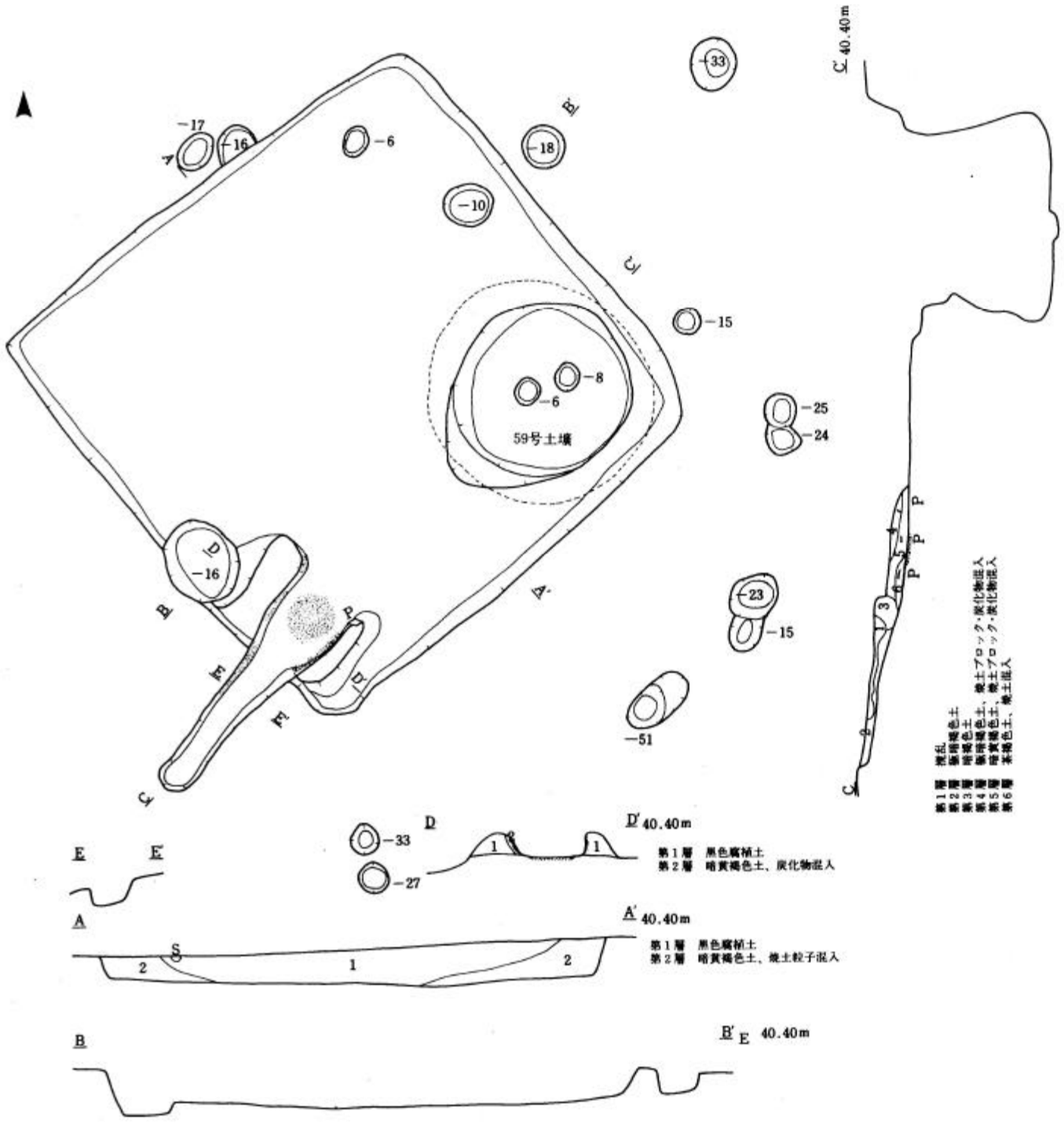


第43図　26号住居跡

27号住居跡（第44図）

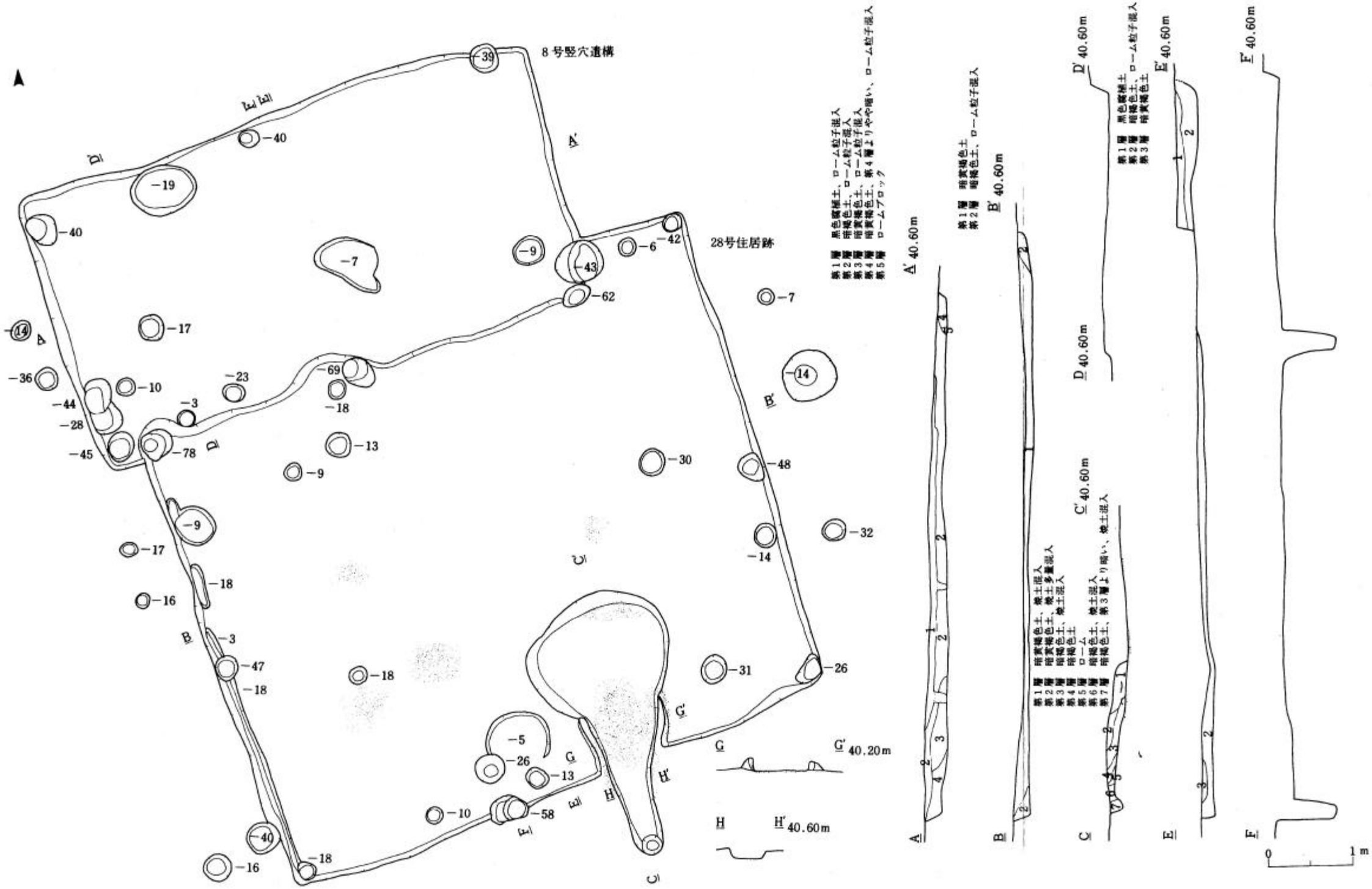
調査区の東側で検出された。

プランは径3.8ｍの方形を呈し、59号土壙を切っている。確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ


59号土壙
C' 40.40m
D' 40.40m
第1層　黒色腐植土
第2層　暗黄褐色土、炭化物混入
A' 40.40m
第1層　黒色腐植土
第2層　暗黄褐色土、焼土粒子混入
B' E 40.40m

第44図　27号住居跡

0
1 m



第45図　28号住居跡、8号竪穴遺構

垂直に立ち上がる。ピットは3個検出されたが、主柱穴は不明である。カマドは南西壁の南東側に構築されている。袖部は比較的良好に残存し、黄色粘土で構築されている。燃焼部は火熱を受けて赤変している。煙道部は溝状に検出され、壁外へ1.2 m延び、側面が焼け、煙出し部へ向かってゆるく立ち上がる。カマドの北側には長軸70cm、短軸50cm、深さ16cmのピットがある。

出土遺物

土器

土師器甕の破片が数点出土した。

28号住居跡（第45図）

調査区の東側で検出された。

プランは長軸6.9 m、短軸6 mのほぼ方形を呈し、8号竪穴遺構と重複するが、切り合いは不明である。確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がり、西壁の下には溝が認められる。ピットは20個検出され、主柱穴は各コーナーとその中間にある8個と考えられる。カマドは南壁の東側に構築されている。袖部は一部が残存し、黄色粘土で構築され、燃焼部は火熱を受けて赤変している。煙道部は溝状に検出され、壁外へ1.1 m延び、側面の一部が焼け、煙出し部はピット状に掘られている。床は平坦であるが、一部に凹凸がみられ、全体的に堅く、4カ所に焼け痕が認められる。

出土遺物

土器（第49図 130）

130はカマド燃焼部出土の赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、底部より内湾しながら立ち上がる。

29号住居跡（第46図）

調査区の東側で検出された。

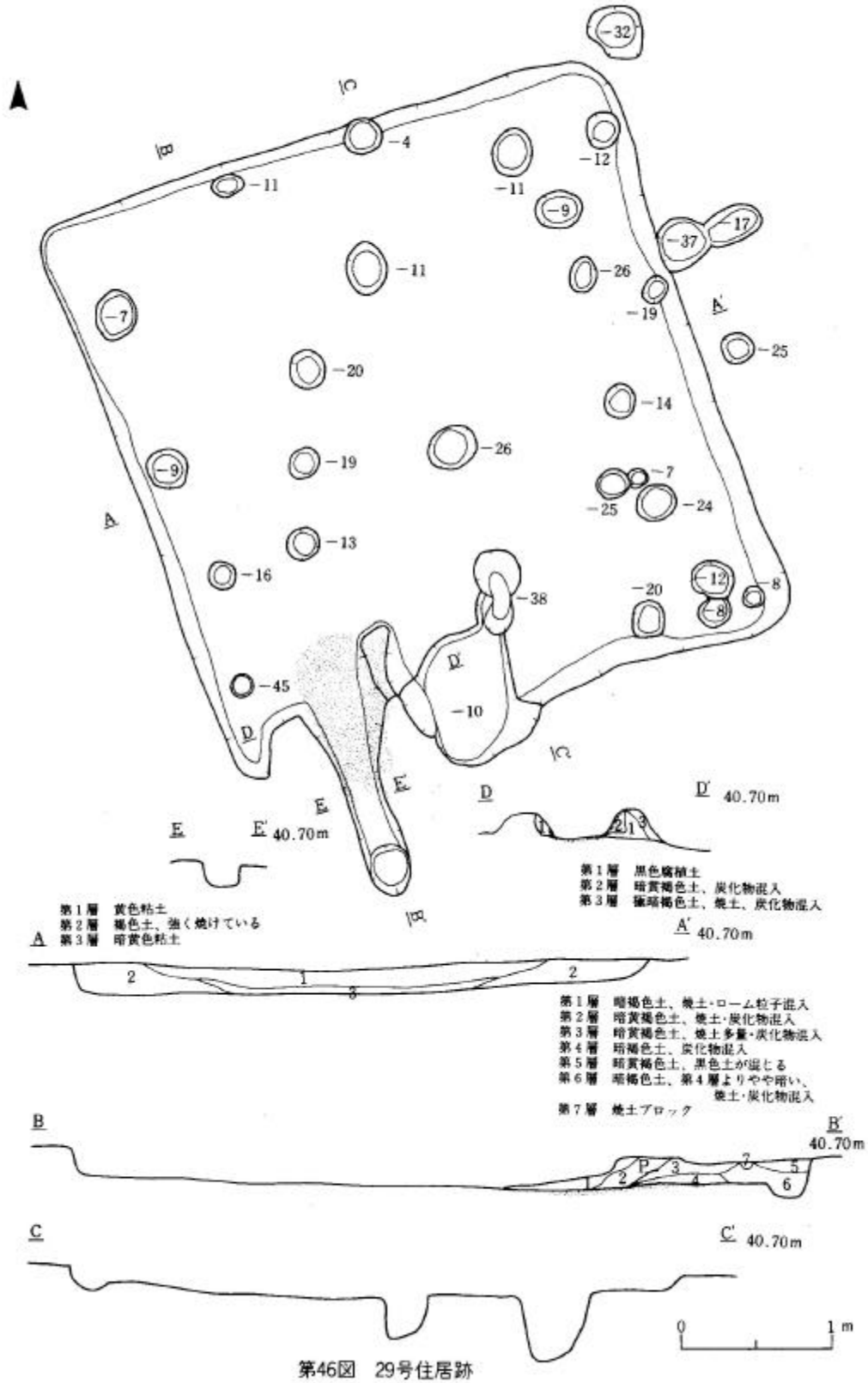
プランは長軸4 m、短軸3.8 mのほぼ方形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは26個検出され、主柱穴は各コーナーの比較的深い4個と考えられる。カマドは南壁の西側に構築されている。袖部は一部が残存し、黄色粘土で構築され、燃焼部は火熱を受けて赤変している。煙道部は溝状に検出され、壁外へ1 m延び、側面の一部が焼け、煙出し部はピット状に掘られている。カマドの東側には長軸90cm、短軸60cm、深さ10cmのピットがある。床は平坦である。

出土遺物

土器（第49図 131）

131はカマド燃焼部出土の土師器甕である。頸部が「く」の字状に外反し、胴部にやや丸味のある器形をなす。胴部外面はヘラケズリ、内面は刷毛目調整を施し、胎土に小石・砂が多く混入する。

30号住居跡（第47図）


A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
40.70m
第1層　黒色腐植土
第2層　暗黄褐色土、炭化物混入
第3層　極暗褐色土、焼土、炭化物混入
第1層　黄色粘土
第2層　褐色土、強く焼けている
第3層　暗黄色粘土
第1層　暗褐色土、焼土・ローム粒子混入
第2層　暗黄褐色土、焼土・炭化物混入
第3層　暗黄褐色土、焼土多量・炭化物混入
第4層　暗褐色土、炭化物混入
第5層　暗黄褐色土、黒色土が混じる
第6層　暗褐色土、第4層よりやや暗い、焼土・炭化物混入
第7層　焼土ブロック
0
1 m

第46図　29号住居跡

調査区の東側で検出された。

プランは北壁が検出されず不明であるが、東西軸が3.9ｍで、6、15号溝跡に切られている。確認面からの深さは南側が20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは10個検出されたが、主柱穴は不明である。カマドは東壁の北側に構築されている。袖部は壊れ、燃焼部は火熱を受けて赤変し、煙道部は短かく急激に立ち上がる。床は若干凹凸がみられ、住居中央部に長軸1ｍ、短軸60cmの範囲の焼け痕が認められる。

出土遺物

土器（第49図132～134）

132～134はピット出土である。132、133は赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、底部より内湾しながら立ち上がる。134は須恵器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、底部より内湾しながら立ち上がり、数カ所に焼き膨れがみられる。

31号住居跡（第48図）

調査区の中央部で検出され、昭和47年に調査されたものである。

プランは長軸4.1ｍ、短軸3.6ｍのほぼ方形を呈し、確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは多数検出されたが、主柱穴は不明である。カマドは東壁の北側に構築されている。袖部は壊れ、燃焼部は長軸85cm、短軸60cm、深さ12cmに掘り込まれ、火熱を受けて赤変している。煙道部は溝状に検出され、壁外へ1.7ｍ延び、側面の一部が焼けている。床はほぼ平坦である。住居南西隅には長軸1.2ｍ、短軸1ｍ、深さ49cmの袋状土壙が検出されている。

出土遺物

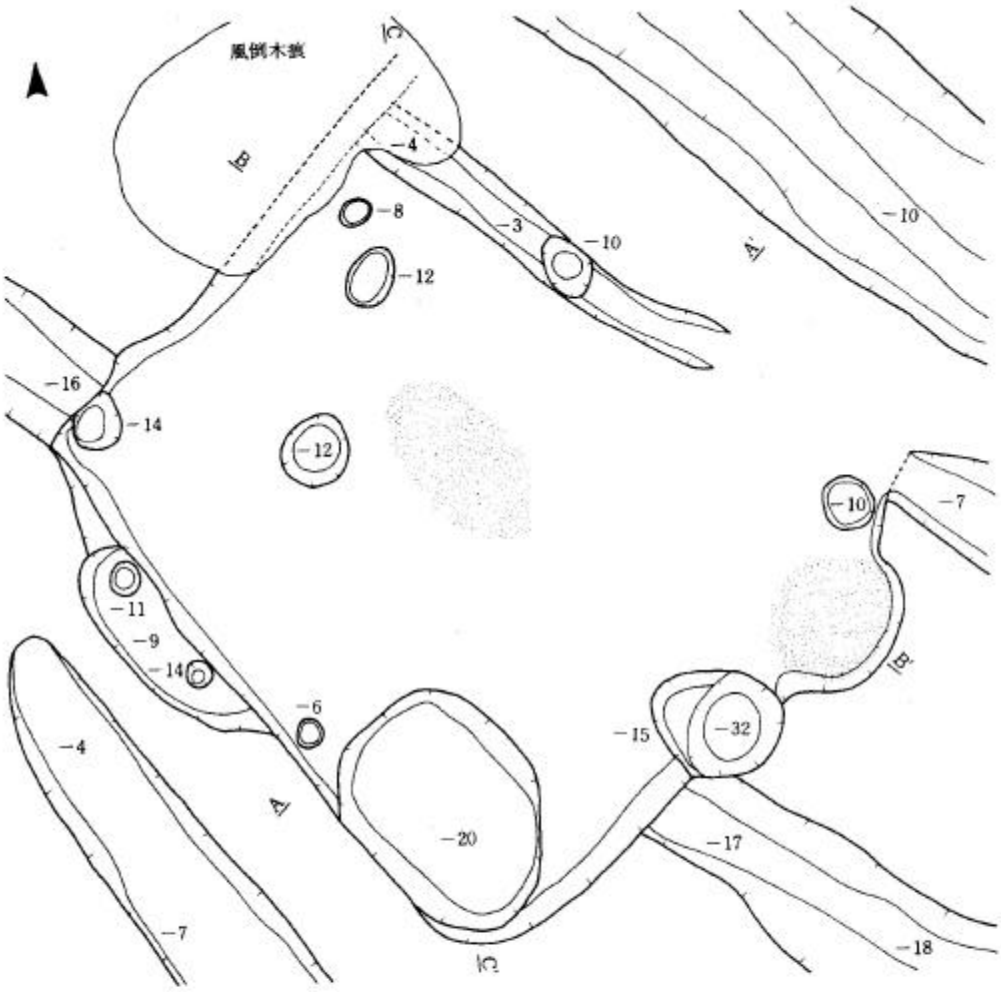
昭和47年の調査で出土したものである。

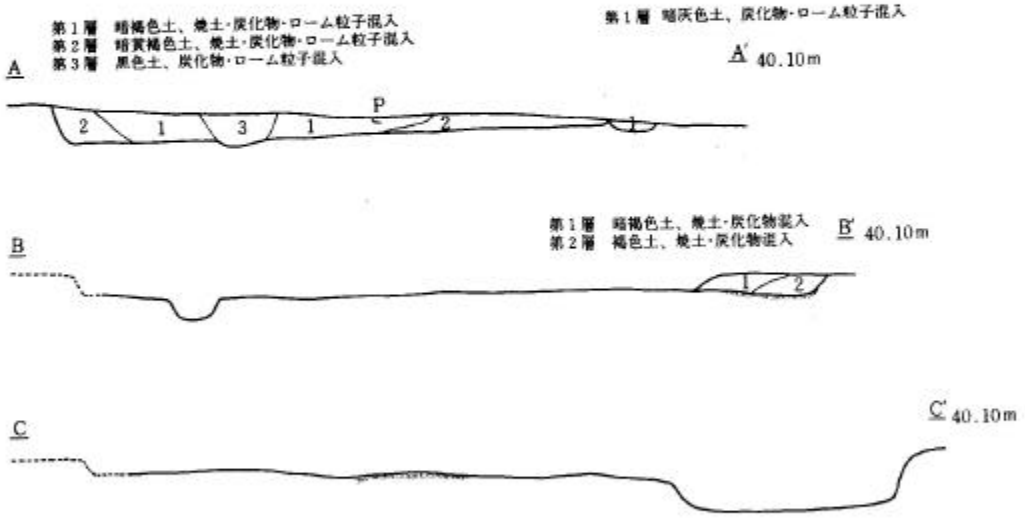
土器（第50、51図135～143）

135は内黒土師器坏である。輪積み成形で、底部が厚く作られている。底部より内湾しながら立ち上がり、内面黒色処理を施している。外面の体部立ち上がり付近に刷毛目調整が認められる。胎土に砂が多く混入し、焼成は不良である。136～143は土師器甕である。頸部が「く」の字状に外反し、外面は縦位に内面は横位または斜位に刷毛目調整を施すものである。136の内外面は摩滅が著しい。137の内面はナデが行われ、煤状炭化物が付着する。138の胴部には膨らみがあり、140の頸部には幅0.5cmの沈線が巡る。138、142、143の底部には木葉痕が認められる。

鉄製品（第51図11）

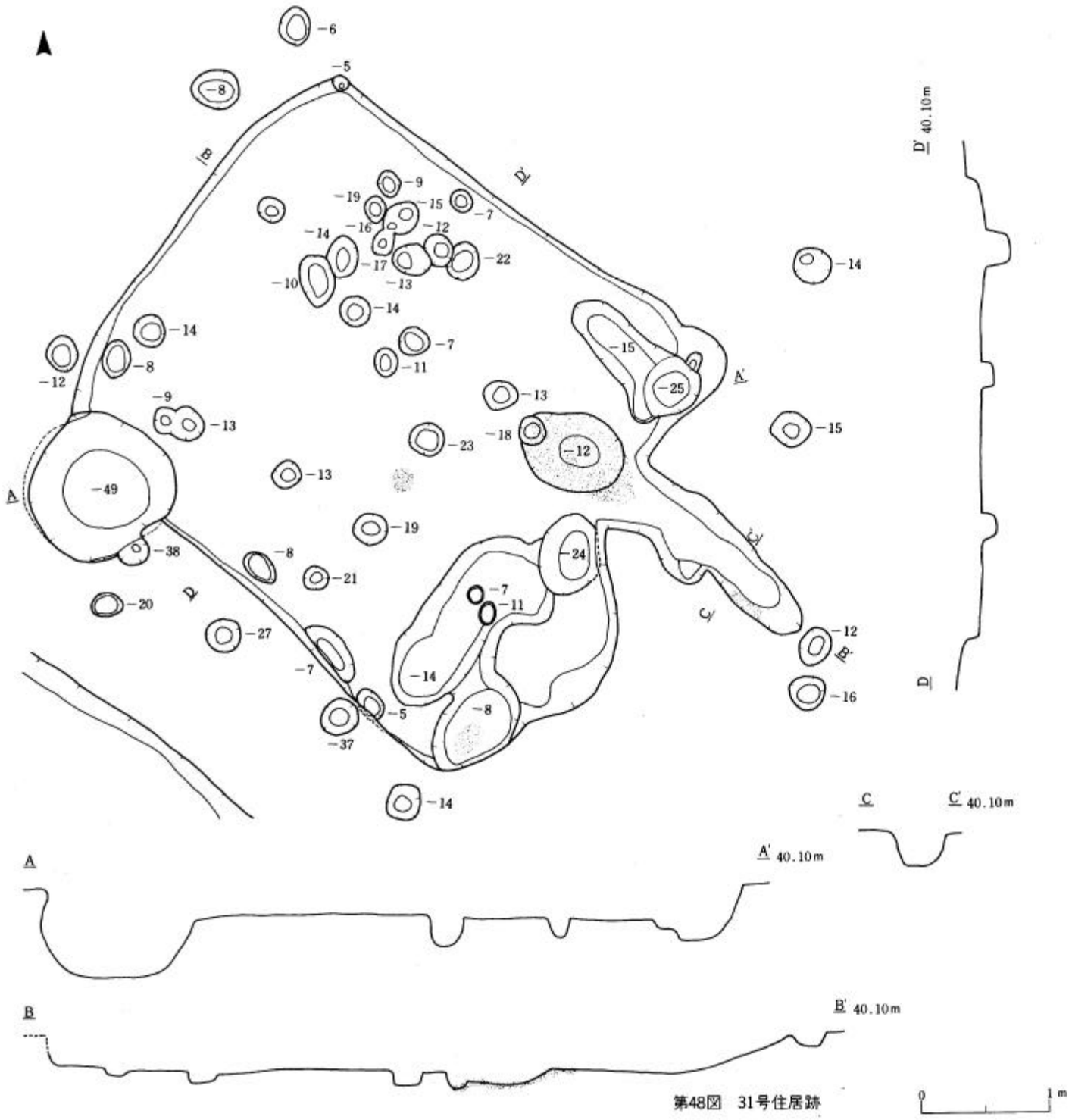
11は覆土出土の刀子である。全体に僅かなソリが認められる。かなり錆化が進んでいる。





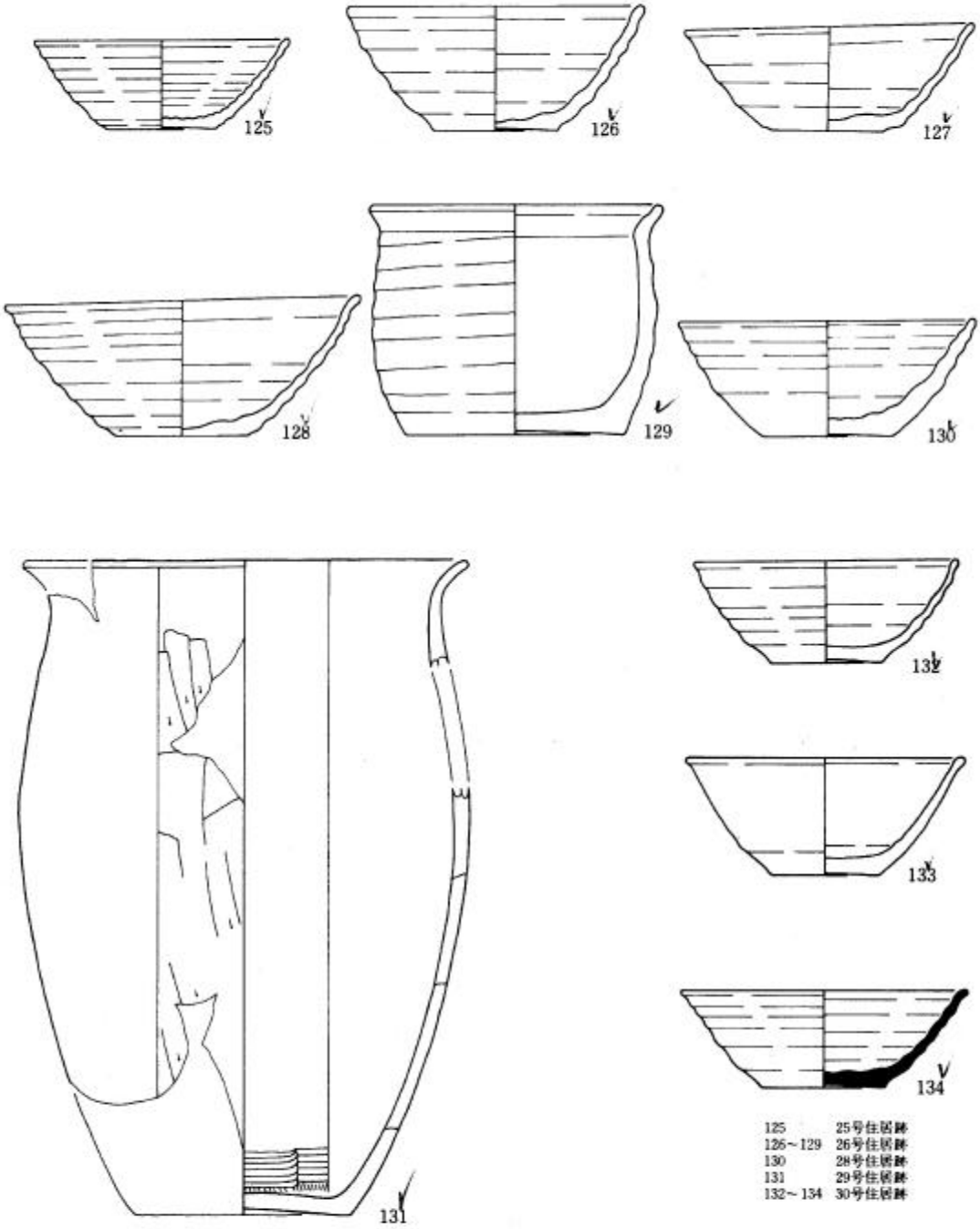
第47図　30号住居跡

0　1 m

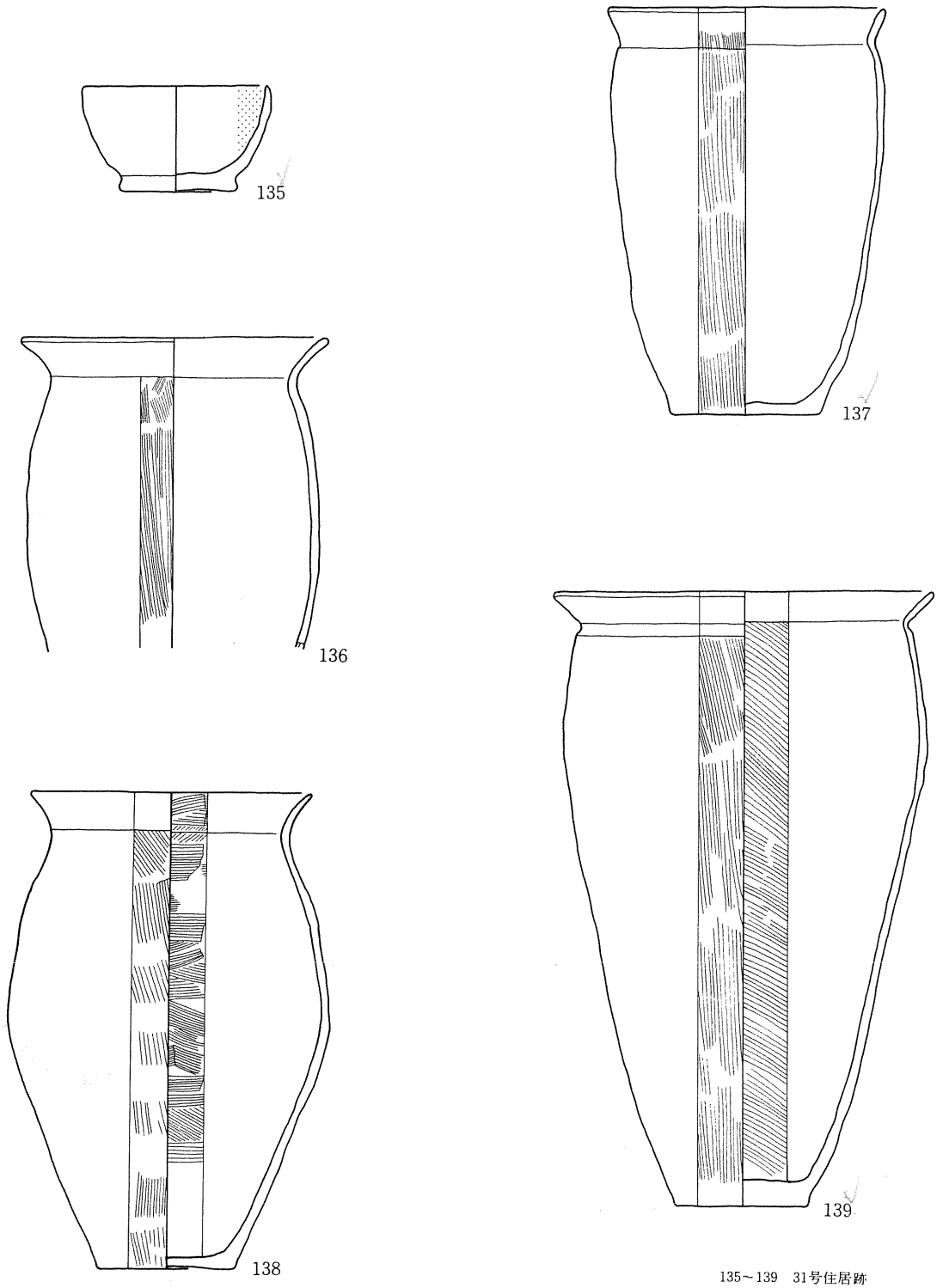


第48図　31号住居跡

0　1m



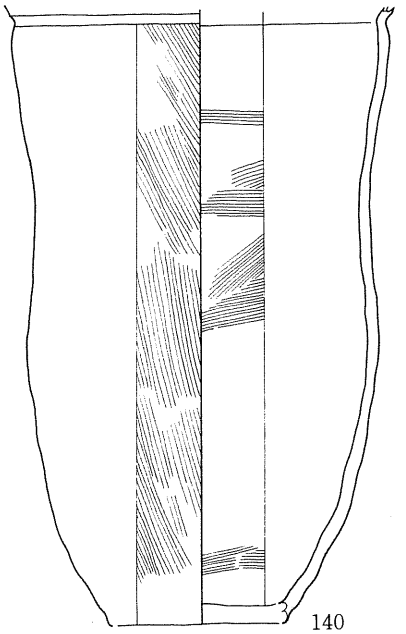
第49図　遺構内出土土器

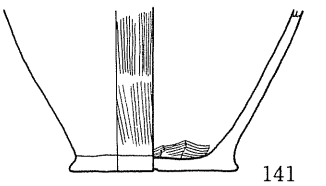


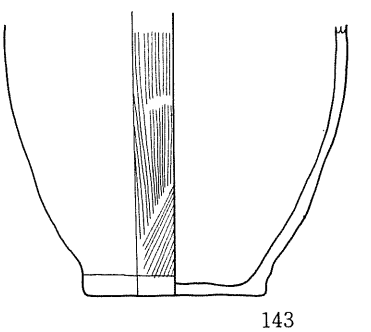
135～139　31号住居跡

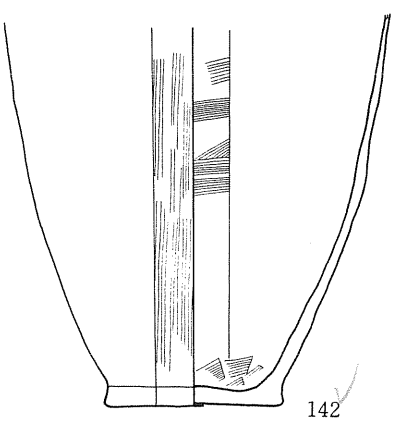
第50図　遺構内出土土器

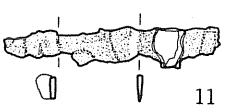
0　10cm





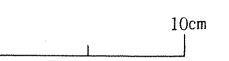






140～143、11　31号住居跡

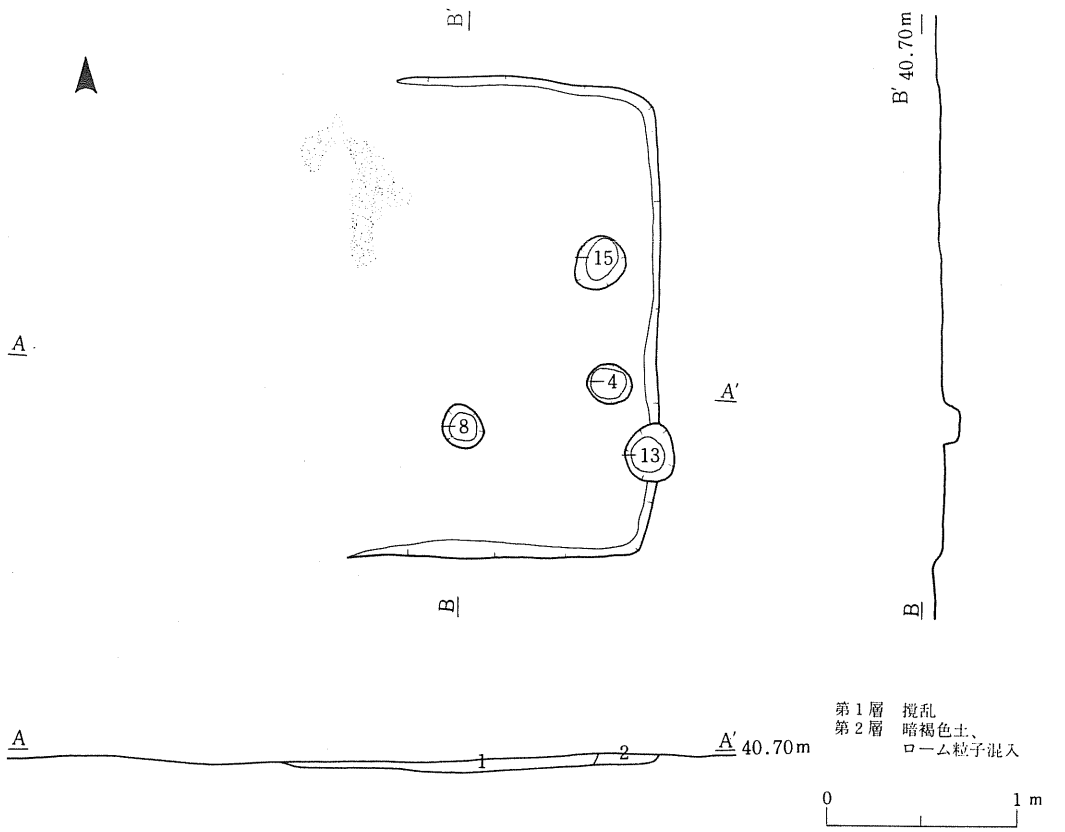
第51図　遺構内出土土器・鉄製品



1号竪穴遺構（第52図）

調査区の西側で検出された。

プランは西壁が検出されず不明であるが、南北軸は2.5ｍである。確認面からの深さは7㎝で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは4個検出されたが、主柱穴は不明である。床は平坦であるが、畑の耕作による撹乱をかなり受け、北側に焼け痕が認められる。出土遺物はない。



第52図　1号竪穴遺構

2号竪穴遺構（第53図）

調査区の南西部で検出された。

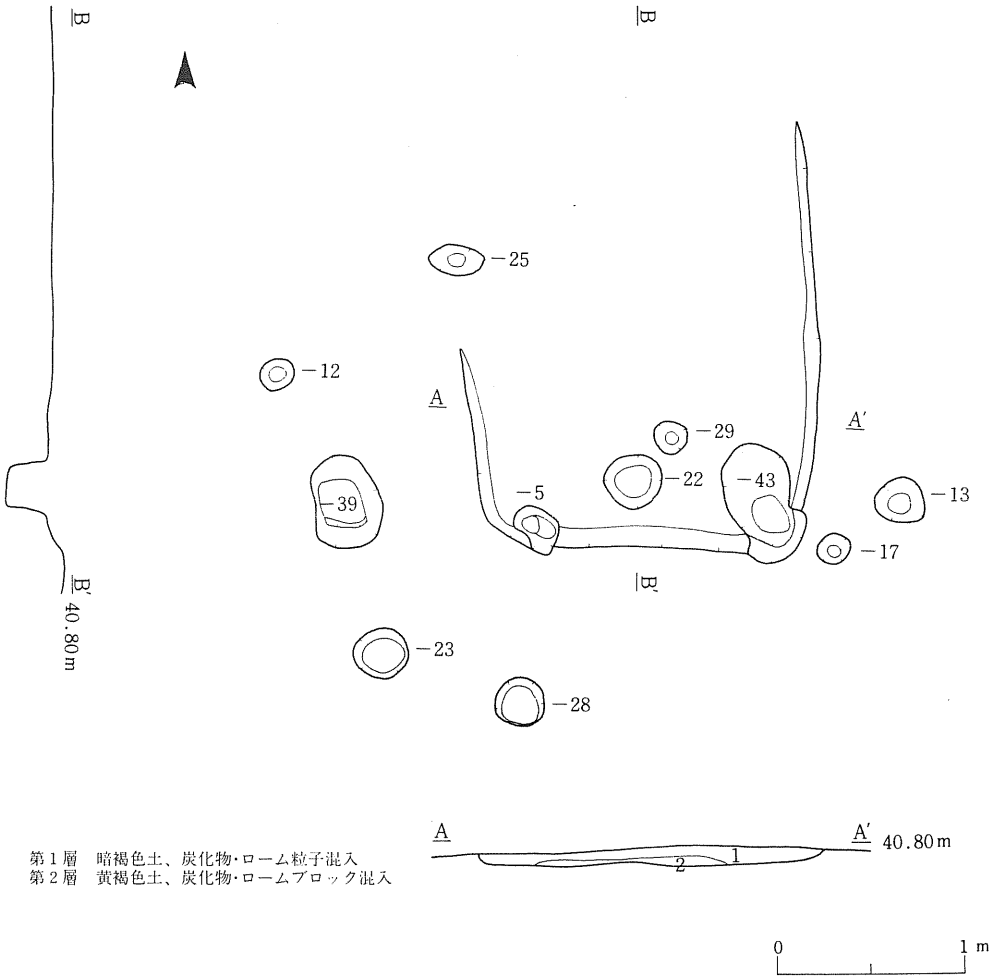
プランは北壁が検出されず不明であるが、東西軸が1.9ｍである。確認面からの深さは10㎝で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは5個検出されたが、主柱穴は不明である。床はほぼ平坦である。

出土遺物

土器（第59図144～147）

144は床面、145～147は覆土出土である。全て赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、底部より内湾しながら立ち上がる。

3号竪穴遺構（第54図）



第53図　2号竪穴遺構

調査区の南西部で検出された。

プランは長軸2.8m、短軸2.6mのほぼ方形を呈し、28号土壙を切っている。確認面からの深さは7cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは15個検出されたが、主柱穴は不明である。床は平坦である。

出土遺物

赤褐色土器坏（底部切り離し回転糸切り、無調整）、土師器甕の破片が少量出土した。

4号竪穴遺構（第55図）

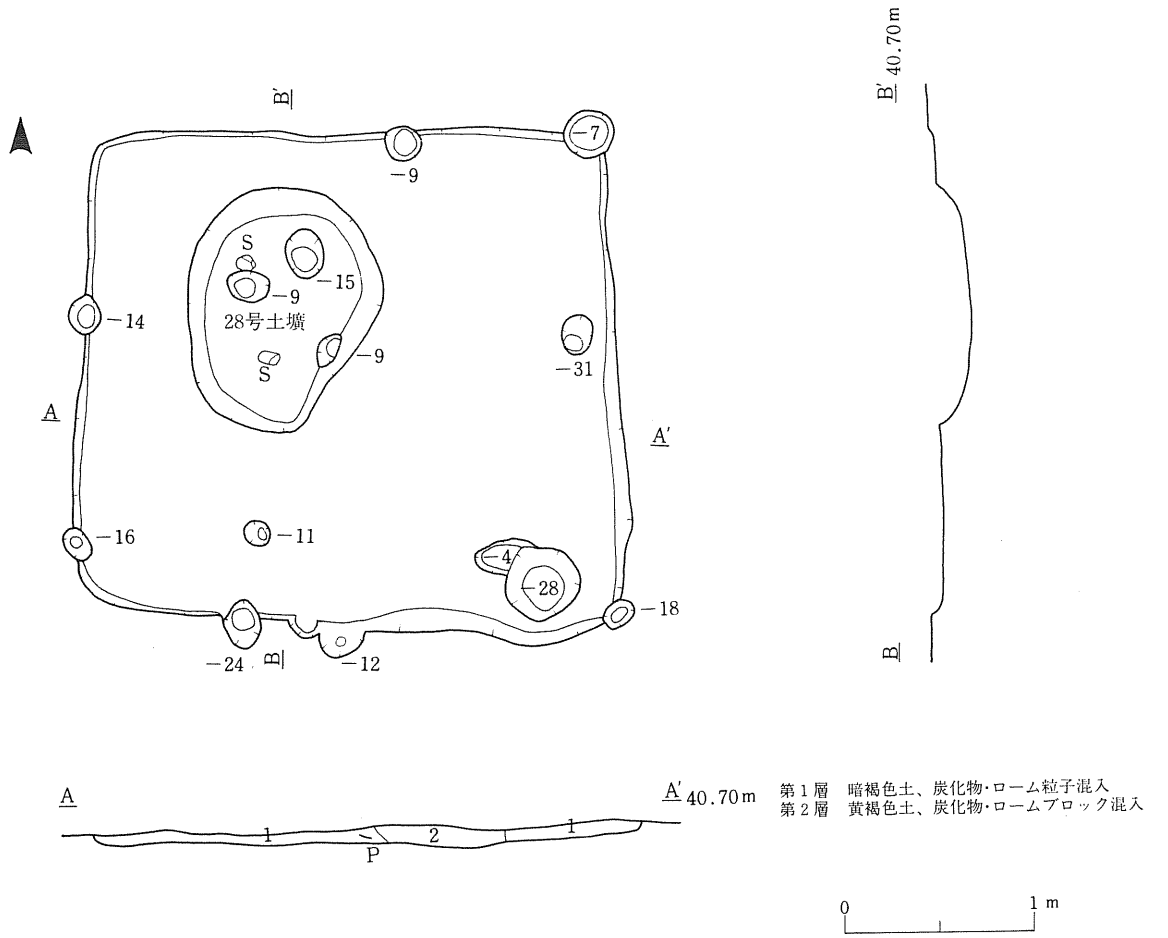
調査区の南西部で検出された。

プランは長軸3m、短軸2.9mのほぼ方形を呈し、確認面からの深さは12cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは17個検出され、主柱穴は各コーナーの深さ23～34cmの4個である。床は平坦である。

出土遺物

土器

赤褐色土器坏（底部切り離し回転糸切り、無調整）、土師器甕の破片が少量出土した。



第54図　3号竪穴遺構

5号竪穴遺構（第56図）

調査区の東側で検出された。

プランは長軸3.3m、短軸2.9mのほぼ方形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは25個検出されたが、主柱穴は不明である。床は中央部が若干低くなっている。

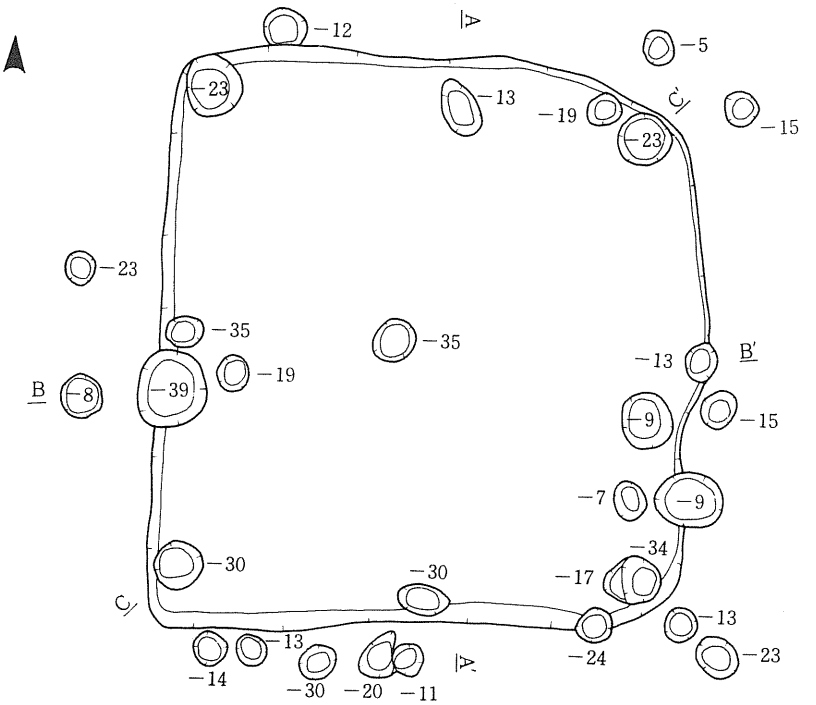
出土遺物

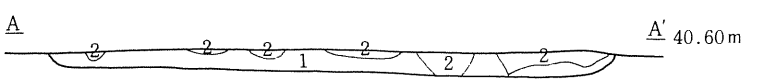
赤褐色土器坏（底部切り離し不明）、土師器甕の破片が数点出土した。

6号竪穴遺構（第57図）

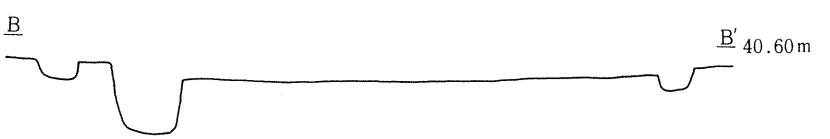
調査区の東側で検出された。

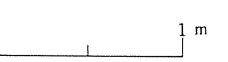
プランは長軸3.7m、短軸3.6mのほぼ方形を呈し、確認面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直



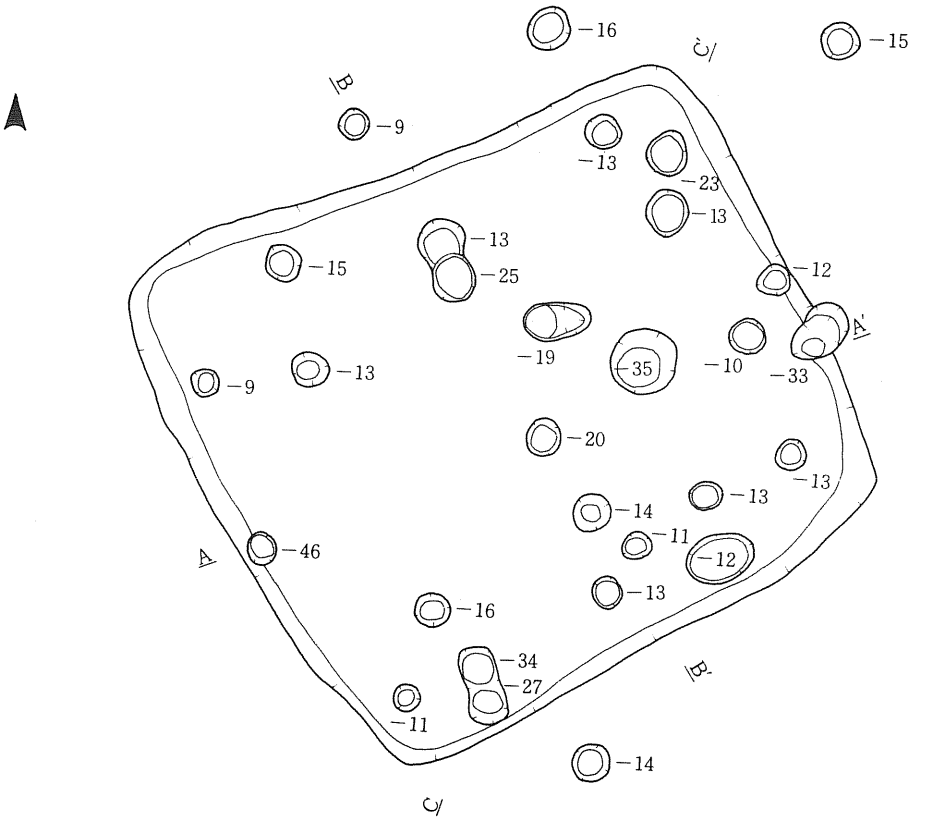


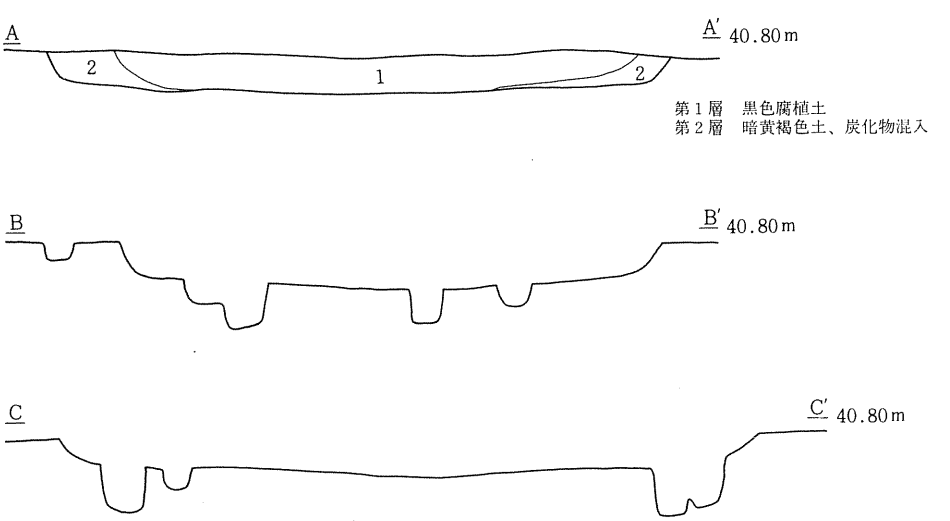
第１層　暗黄褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第２層　撹乱





第55図　４号竪穴遺構





第56図　5号竪穴遺構

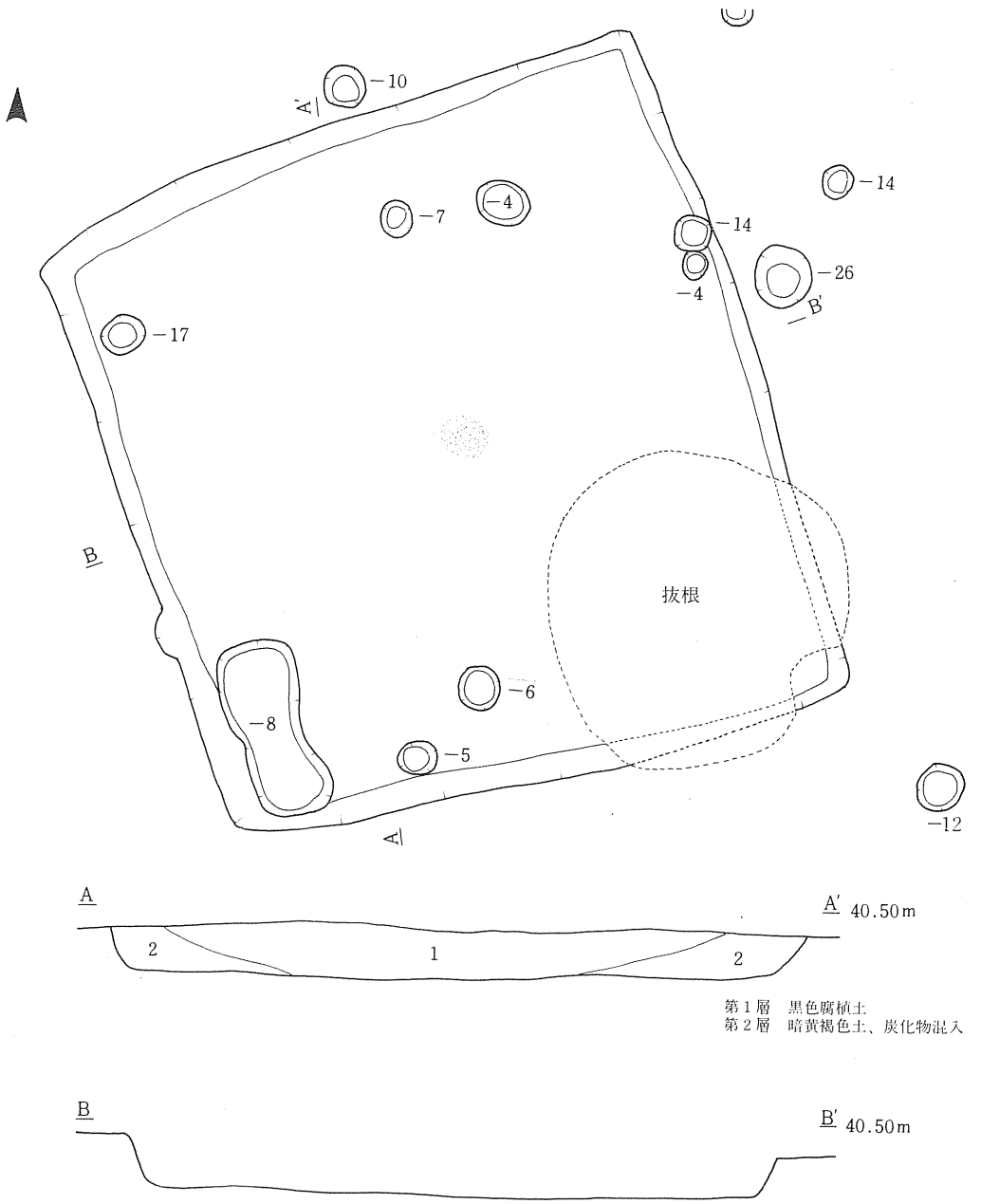
0　1 m

に立ち上がる。ピットは８個検出されたが、主柱穴は不明である。床は平坦で堅く、中央部に径25cmの範囲の焼け痕が認められる。

出土遺物

土器

赤褐色土器坏（底部切り離し回転糸切り、無調整）、土師器甕の破片が少量出土した。



第57図　６号竪穴遺構

7号竪穴遺構（第58図）

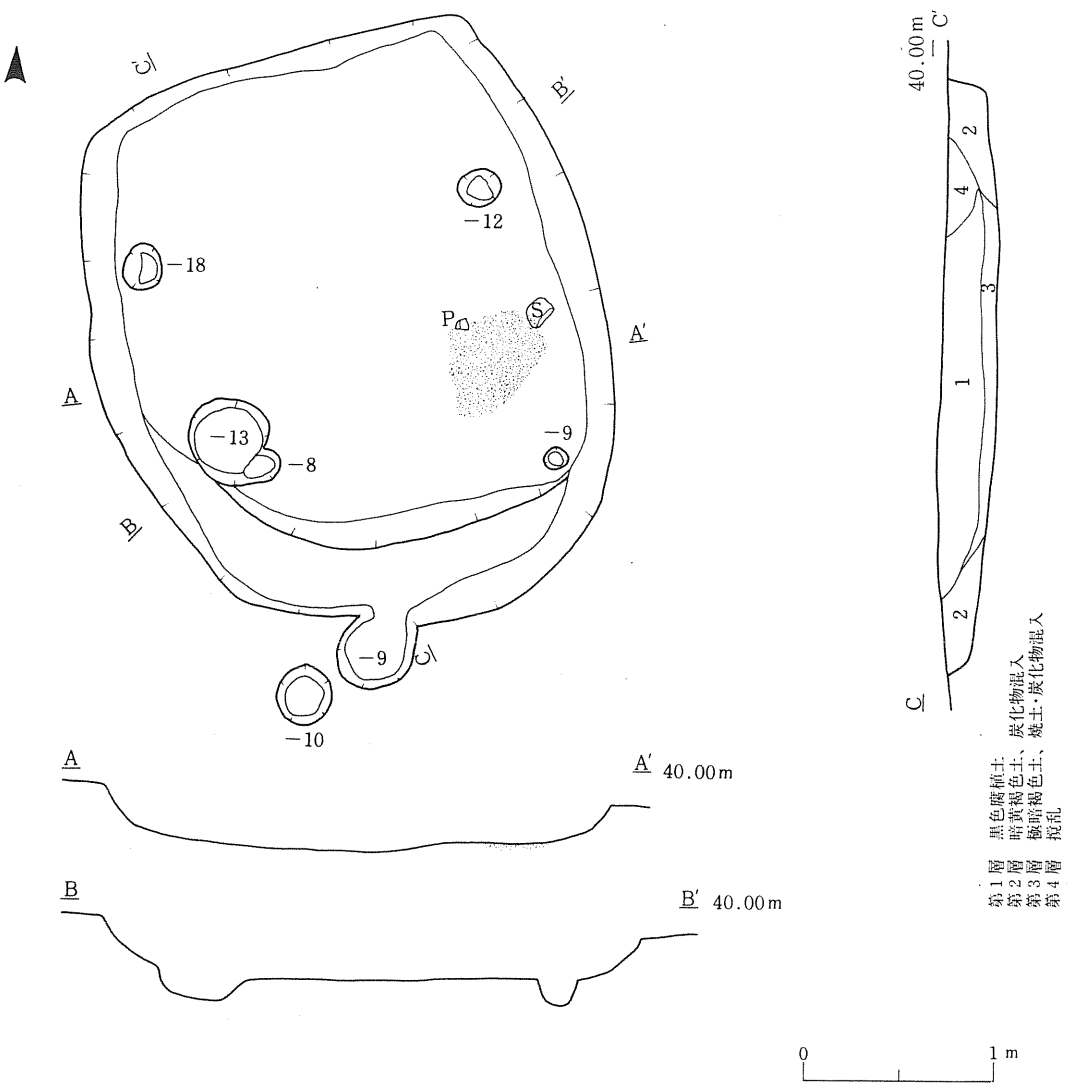
調査区の東側で検出された。

プランは長軸3.1ｍ、短軸2.7ｍの不整方形を呈し、確認面からの深さは30cmで、壁は北壁がほぼ垂直で、他はゆるく立ち上がり、南側に段が付く。ピットは5個検出されたが、主柱穴は不明である。床は平坦で、東側に径50cmの範囲の焼け痕が認められる。

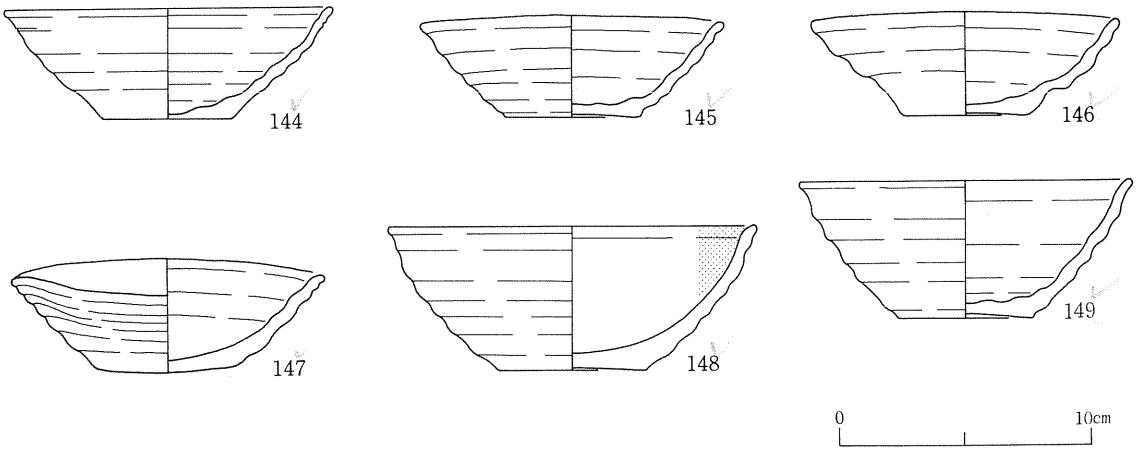
出土遺物

土器（第59図148、149）

148、149は覆土出土である。148は内黒土師器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、内面黒色処理を施す。底部より内湾しながら立ち上がり、内面はナデを行っている。149は赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、底部より内湾しながら立ち上がる。



第58図　7号竪穴遺構



144～147　2号竪穴遺構
148、149　7号竪穴遺構

第59図　遺構内出土土器

8号竪穴遺構（第45図）

調査区の東側で検出された。

プランは長軸6.2ｍ、短軸3.3ｍの長方形を呈し、28号住居跡と重複するが、切り合いは不明である。確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは14個検出され、主柱穴は各コーナーと南壁・北壁の中間にある6個である。床は平坦であるが、部分的に凹凸がみられる。

出土遺物

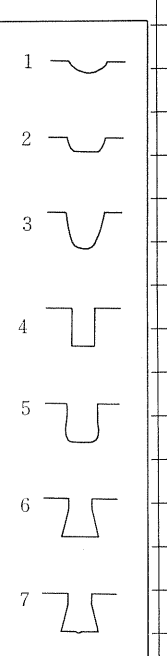
土器

赤褐色土器坏（底部切り離し回転糸切り、無調整）、土師器甕の破片が数点出土した。

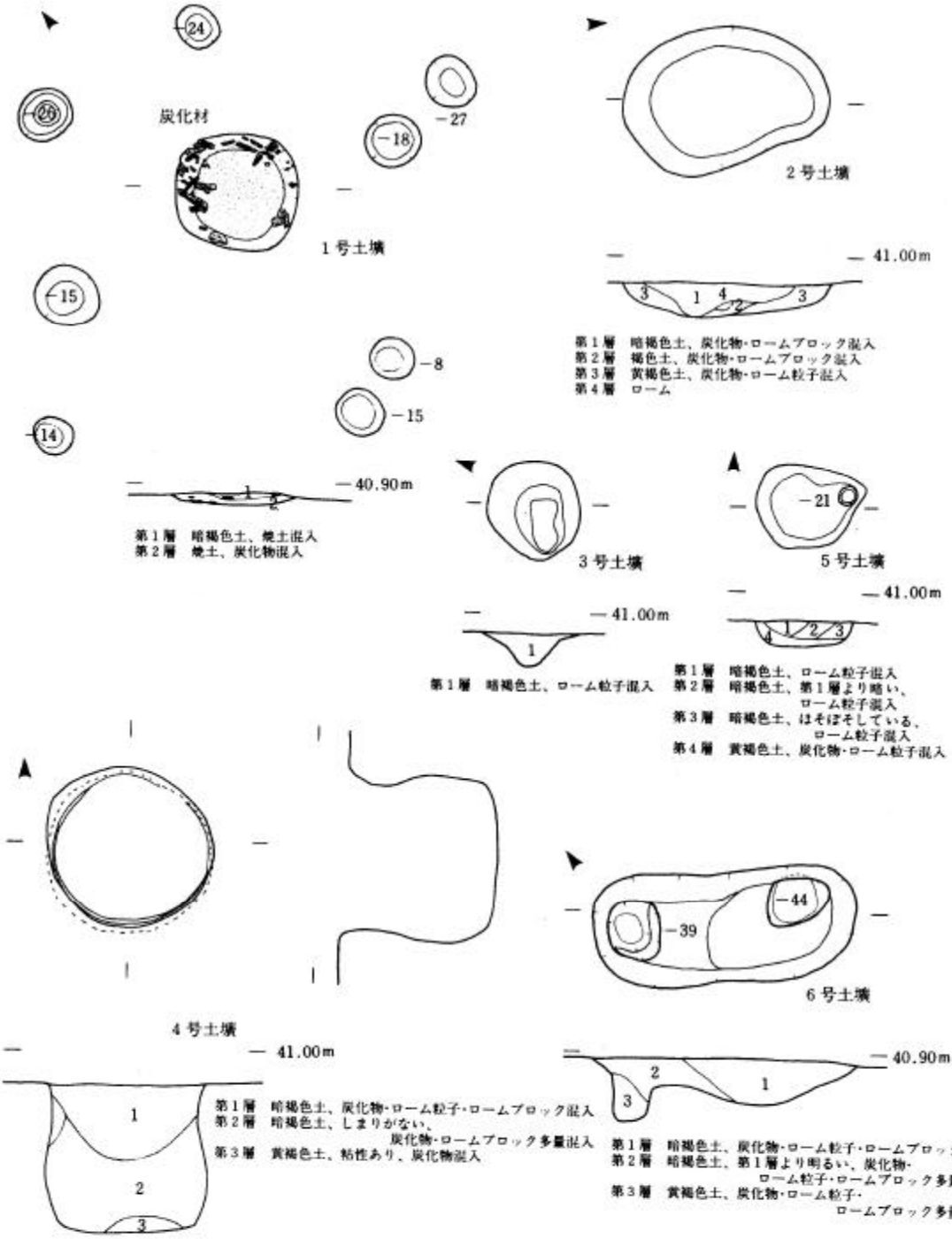
土　壙　一　覧　表

番号	規模 (cm) 長軸	短軸	深さ	平面形	断面形	出土遺物	備考
1	78	74	7	楕円形	1	第69、70図150、赤褐色土器浅鉢、151、赤褐色土器甕	壙底・側面が焼けている
2	131	90	21	楕円形	2		
3	62	59	21	楕円形	1		
4	105		94	円形	5		
5	70	51	16	楕円形	2		
6	168	69	29	楕円形	1		
7	165	142	39	方形	2	第70図152～158、赤褐色土器坏、159、赤褐色土器長頸壺、土師器甕・須恵器甕破片	
8	125	72	26	不整形	1		
9	86	72	20	楕円形	2	赤褐色土器坏・土師器甕破片	壙底・側面が焼けている
10	91		10	円形	2	赤褐色土器坏・土師器甕破片	壙底・側面が焼けている
11	90	74	5	楕円形	2	第70図160、赤褐色土器坏	壙底・側面が焼けている
12	234	158	36	不整形	1	赤褐色土器坏破片	
13	136	98	26	長方形	2	第70図161、赤褐色土器坏、土師器甕破片	壙底・側面が焼けている
14	132	108	17	楕円形	2	第71図170、須恵器甕破片、赤褐色土器坏	
15	89	58	25	楕円形	1		
16	85	77	8	楕円形	2	第71図171、須恵器甕破片、赤褐色土器坏破片	
17	140	125	14	楕円形	2	赤褐色土器坏・土師器甕破片	
18	153		26	円形	2	第71図172、173、須恵器破片、赤褐色土器坏・土師器甕・須恵器壺破片	
19	178	159	36	楕円形	2	赤褐色土器坏・土師器甕破片	
20	184	136	17	楕円形	2	赤褐色土器坏・土師器甕破片	壙底・側面が焼けている
21	206	180	30	楕円形	1	赤褐色土器坏・土師器甕・須恵器壺破片	
22	184	140	24	楕円形	1	赤褐色土器坏・土師器甕破片	
23	78	65	17	楕円形	1	赤褐色土器坏破片	
24	182	104	26	楕円形	2		
25	115	108	130	楕円形	4	赤褐色土器坏・土師器甕破片	
26	128	79	14	楕円形	2	赤褐色土器坏・土師器甕破片	
27	149	120	8	方形	2	赤褐色土器坏・土師器甕破片	
28	129	104	14	楕円形	2	赤褐色土器坏・土師器甕破片	
29	66	47	13	楕円形	2	赤褐色土器坏・土師器甕破片	
30	186	77	24	不整長形	3	赤褐色土器坏・土師器甕破片	
31	124	103	42	楕円形	1	赤褐色土器坏破片	
32	100	98	25	楕円形	2	赤褐色土器坏・土師器甕破片	側面が焼けている
33	149	138	14	楕円形	2	第71図162～164、赤褐色土器皿、赤褐色土器坏破片	壙底・側面が焼けている

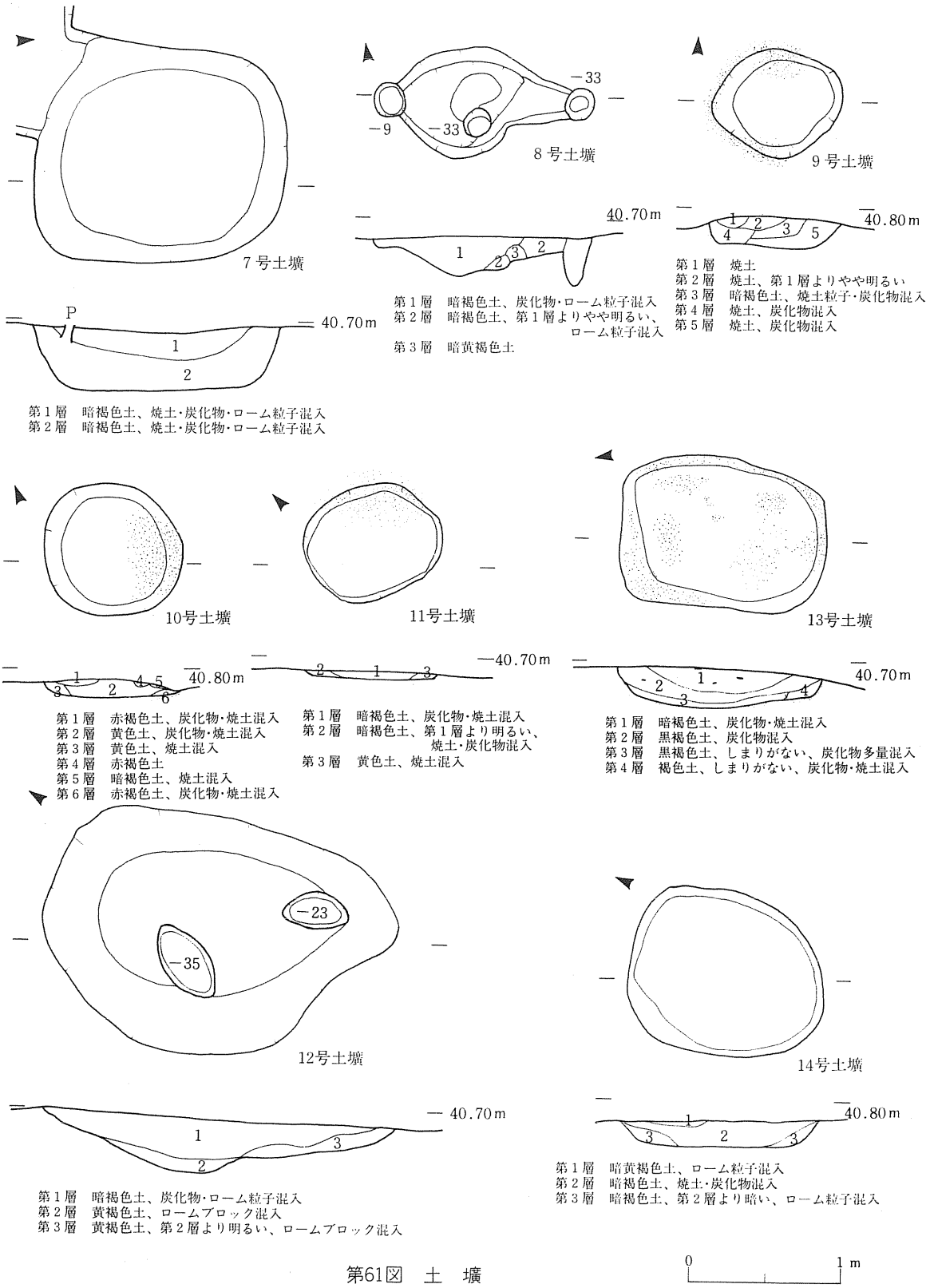
番号	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	平面形	断面形	出土遺物	備考
34	82	56	26	楕円形	2	赤褐色土器坏・土師器甕破片	
35	86	42	22	小判形	2		
36	122	118	14	楕円形	2	第71図165、赤褐色土器坏	
37	156	146	16	楕円形	1	第71図166、赤褐色土器皿、赤褐色土器坏破片	壙底・側面が焼けている
38	59	48	7	楕円形	1	赤褐色土器坏破片	壙底・側面が焼けている
39	92	66	8	楕円形	2	赤褐色土器坏破片	壙底・側面が焼けている
40	94		5	円形	2	赤褐色土器坏破片	壙底・側面が焼けている
41	不明	60	24	楕円形	1	赤褐色土器坏破片	
42	66	58	14	楕円形	2		
43	125	110	24	楕円形	2	第71図167、赤褐色土器坏	
44	95	63	3	楕円形	2	第71図168、赤褐色土器坏	壙底・側面が焼けている
45	102	90	8	楕円形	2	赤褐色土器坏破片	
46	66	54	64	楕円形	5	赤褐色土器坏破片	
47	不明	54	17	溝状	1	赤褐色土器坏・土師器甕破片	
48	不明	80	16	溝状	2		
49	120	86	20	不整形	1		
50	96	73	22	楕円形	1		
51	135	91	51	楕円形	2	第75図3、砥石	
52	70	62	18	楕円形	2		
53	86	71	12	楕円形	1		
54	84	55	31	楕円形	1	第71図169、弥生	
55	83	76	16	楕円形	2	第71図174、175、弥生	
56	58	52	9	楕円形	2		
57	117	111	10	楕円形	2	第71図176、177弥生	
58	62	58	22	楕円形	2		
59	161	128	105	楕円形	7		
60	106		100	円形	6		
61	60		74	円形	4		
62	125	106	96	楕円形	4		
63	92	74	47	楕円形	2		
64	92	68	44	楕円形	2		
65	138		76	円形	6		



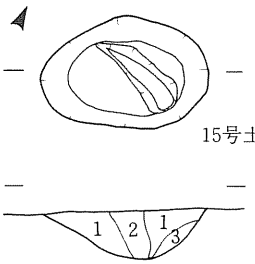
※ 赤褐色土器坏は底部切り離し回転糸切り、無調整


24
26
炭化材
18
27
1号土壌
15
8
15
14
40.90m
第1層　暗褐色土、焼土混入
第2層　焼土、炭化物混入
2号土壌
41.00m
第1層　暗褐色土、炭化物・ロームブロック混入
第2層　褐色土、炭化物・ロームブロック混入
第3層　黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第4層　ローム
3号土壌
41.00m
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
5号土壌
21
41.00m
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、第1層より暗い、ローム粒子混入
第3層　暗褐色土、はそぼそしている、ローム粒子混入
第4層　黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
4号土壌
41.00m
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子・ロームブロック混入
第2層　暗褐色土、しまりがない、炭化物・ロームブロック多量混入
第3層　黄褐色土、粘性あり、炭化物混入
6号土壌
44
39
40.90m
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子・ロームブロック混入
第2層　暗褐色土、第1層より明るい、炭化物・ローム粒子・ロームブロック多量混入
第3層　黄褐色土、炭化物・ローム粒子・ロームブロック多量混入
0
1m

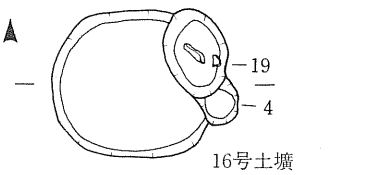
第60図　土　壌


7号土壙
P
40.70m
1
2
第1層　暗褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
8号土壙
−33
−9
−33
40.70m
1
2
3
2
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、第1層よりやや明るい、ローム粒子混入
第3層　暗黄褐色土
9号土壙
40.80m
1
2
3
4
5
第1層　焼土
第2層　焼土、第1層よりやや明るい
第3層　暗褐色土、焼土粒子・炭化物混入
第4層　焼土、炭化物混入
第5層　焼土、炭化物混入
10号土壙
40.80m
1
2
3
4
5
6
第1層　赤褐色土、炭化物・焼土混入
第2層　黄色土、炭化物・焼土混入
第3層　黄色土、焼土混入
第4層　赤褐色土
第5層　暗褐色土、焼土混入
第6層　赤褐色土、炭化物・焼土混入
11号土壙
40.70m
1
2
3
第1層　暗褐色土、炭化物・焼土混入
第2層　暗褐色土、第1層より明るい、焼土・炭化物混入
第3層　黄色土、焼土混入
13号土壙
40.70m
1
2
3
4
第1層　暗褐色土、炭化物・焼土混入
第2層　黒褐色土、炭化物混入
第3層　黒褐色土、しまりがない、炭化物多量混入
第4層　褐色土、しまりがない、炭化物・焼土混入
12号土壙
−23
−35
40.70m
1
2
3
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　黄褐色土、ロームブロック混入
第3層　黄褐色土、第2層より明るい、ロームブロック混入
14号土壙
40.80m
1
2
3
3
第1層　暗黄褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、焼土・炭化物混入
第3層　暗褐色土、第2層より暗い、ローム粒子混入
0
1m

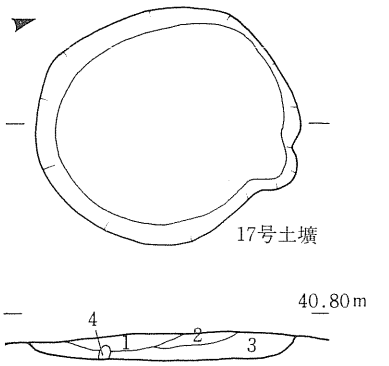
第61図　土　壙



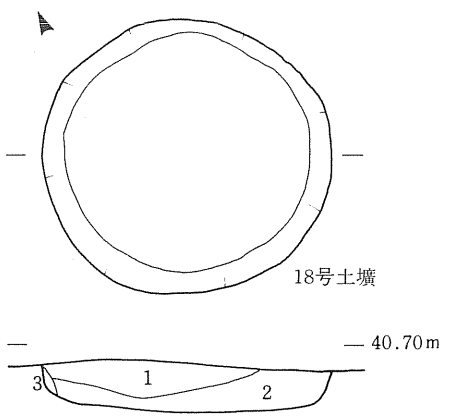
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　撹乱
第3層　暗黄褐色土、炭化物混入



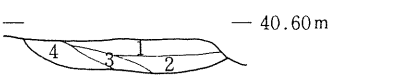
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入



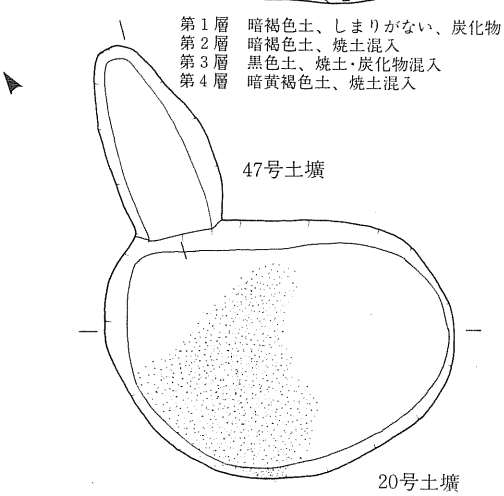
第1層　暗褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、焼土多量・炭化物混入
第3層　暗黄褐色土、焼土・ローム粒子混入
第4層　ロームブロック

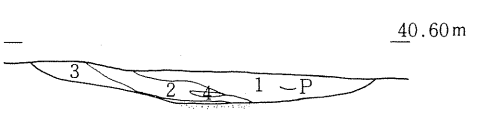


第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、第1層よりやや暗い、炭化物・ローム粒子混入
第3層　撹乱

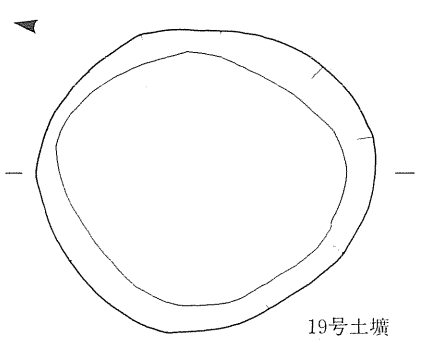


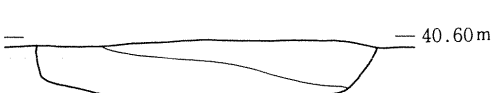
第1層　暗褐色土、しまりがない、炭化物・焼土混入
第2層　暗褐色土、焼土混入
第3層　黒色土、焼土・炭化物混入
第4層　暗黄褐色土、焼土混入





第1層　暗褐色土、炭化物・焼土混入
第2層　暗褐色土、炭化物・焼土・ローム粒子混入
第3層　暗黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第4層　焼土

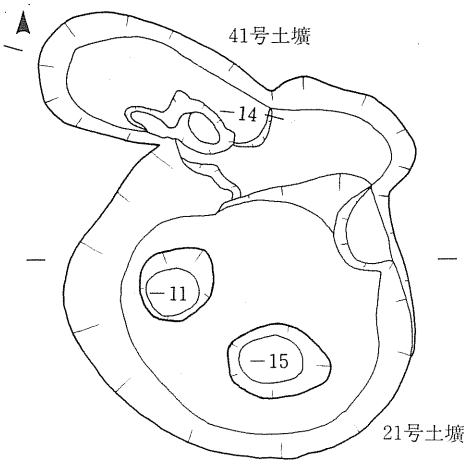


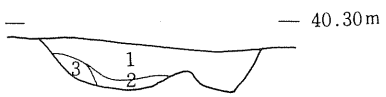


第1層　暗褐色土、炭化物・焼土混入
第2層　暗褐色土、第1層よりやや暗い、炭化物・焼土混入

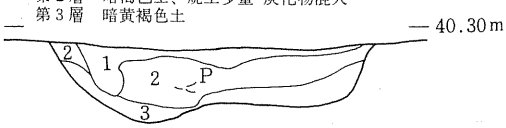
第62図　土　壙

0　1 m

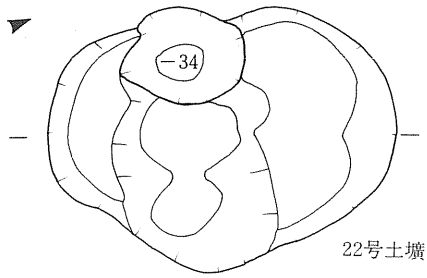


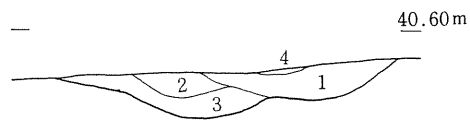


第1層　暗褐色土、焼土・炭化物混入
第2層　暗褐色土、焼土多量・炭化物混入
第3層　暗黄褐色土

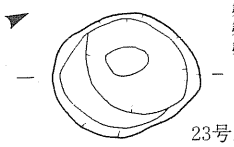


第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　暗黄褐色土、炭化物・焼土・ローム粒子混入
第3層　暗黄褐色土、第2層より明るい、炭化物・ローム粒子混入

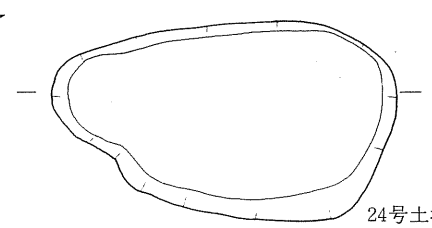


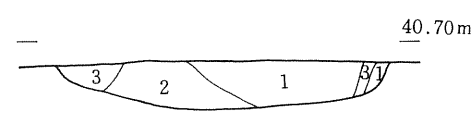


第1層　暗黄褐色土、炭化物・焼土・ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第3層　暗黄褐色土、第1層よりやや明るい、炭化物・ローム粒子混入
第4層　撹乱

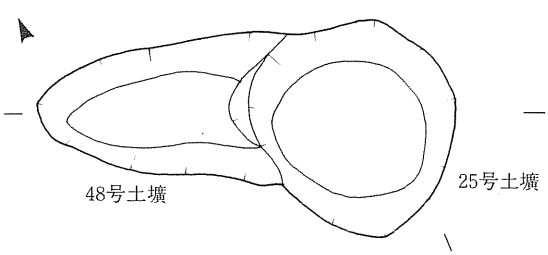


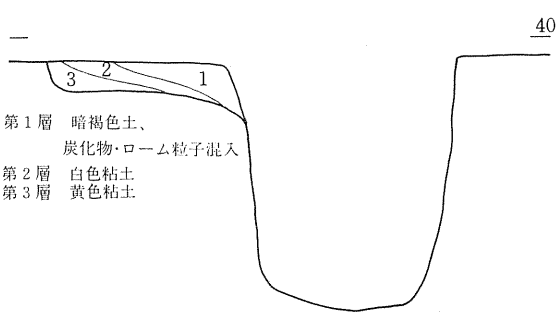
第1層　暗褐色土、焼土・炭化物混入



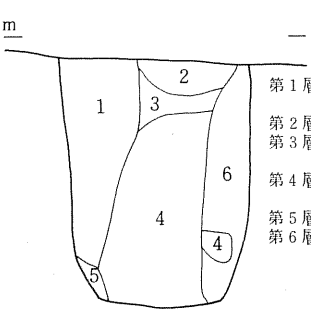


第1層　暗黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗黄褐色土、ローム粒子多量・炭化物混入
第3層　撹乱、黒色土





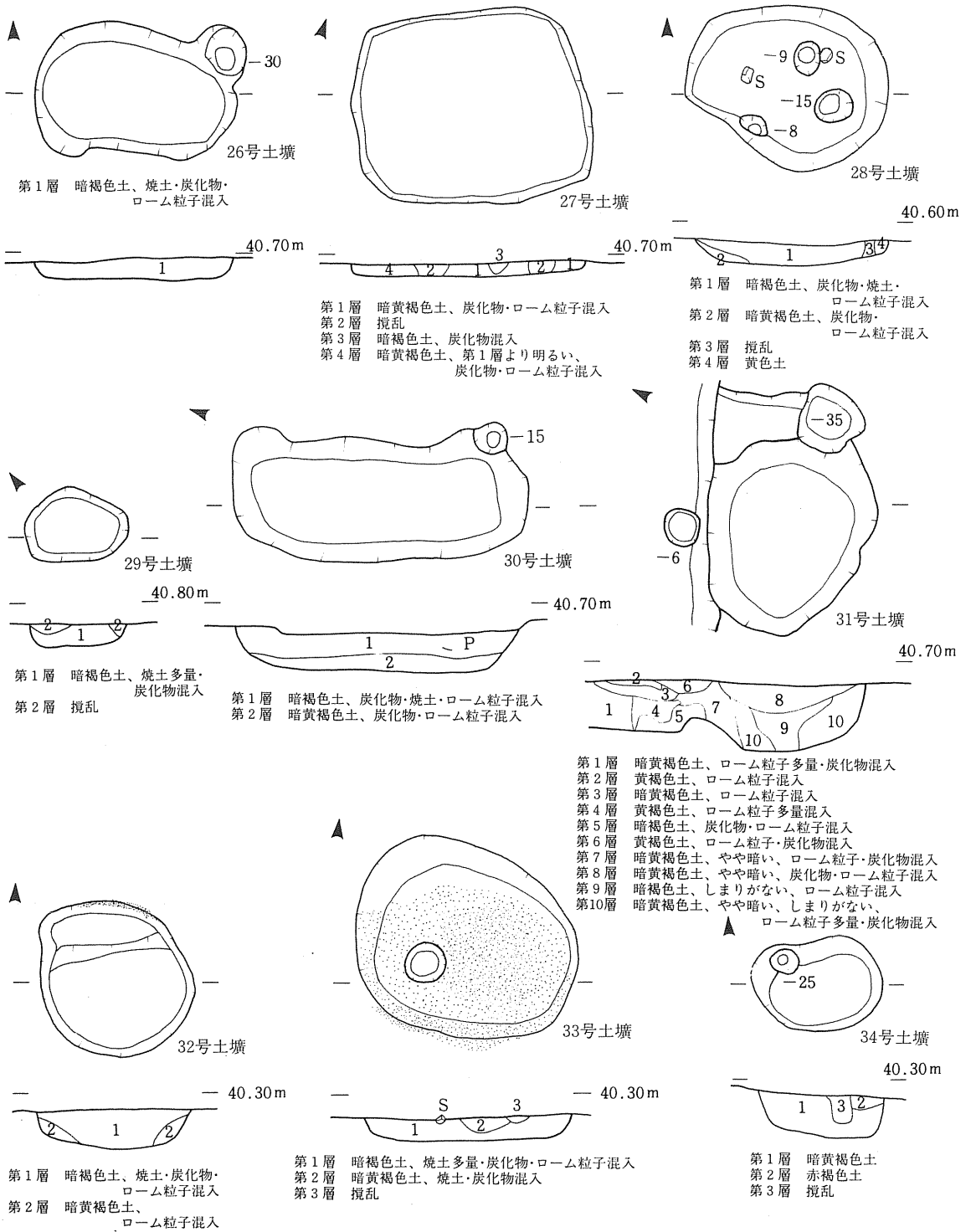
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　白色粘土
第3層　黄色粘土



第1層　暗褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、黒色土混入
第3層　暗褐色土、第1層よりやや暗い焼土・炭化物混入
第4層　暗褐色土、非常にやわらかい、ローム粒子混入
第5層　暗褐色土、ロームブロック混入
第6層　黄色粘土、白色粘土混入

第63図　土　壙

0　1m


26号土壙
第1層　暗褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
40.70m
27号土壙
第1層　暗黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　撹乱
第3層　暗褐色土、炭化物混入
第4層　暗黄褐色土、第1層より明るい、炭化物・ローム粒子混入
40.70m
28号土壙
40.60m
第1層　暗褐色土、炭化物・焼土・ローム粒子混入
第2層　暗黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第3層　撹乱
第4層　黄色土
29号土壙
40.80m
第1層　暗褐色土、焼土多量・炭化物混入
第2層　撹乱
30号土壙
40.70m
第1層　暗褐色土、炭化物・焼土・ローム粒子混入
第2層　暗黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
31号土壙
40.70m
第1層　暗黄褐色土、ローム粒子多量・炭化物混入
第2層　黄褐色土、ローム粒子混入
第3層　暗黄褐色土、ローム粒子混入
第4層　黄褐色土、ローム粒子多量混入
第5層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第6層　黄褐色土、ローム粒子・炭化物混入
第7層　暗黄褐色土、やや暗い、ローム粒子・炭化物混入
第8層　暗黄褐色土、やや暗い、炭化物・ローム粒子混入
第9層　暗褐色土、しまりがない、ローム粒子混入
第10層　暗黄褐色土、やや暗い、しまりがない、ローム粒子多量・炭化物混入
32号土壙
40.30m
第1層　暗褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗黄褐色土、ローム粒子混入
33号土壙
40.30m
第1層　暗褐色土、焼土多量・炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗黄褐色土、焼土・炭化物混入
第3層　撹乱
34号土壙
40.30m
第1層　暗黄褐色土
第2層　赤褐色土
第3層　撹乱
0
1m

第64図　土　壙

35号土壙

40.20m

第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　暗黄褐色土

36号土壙

24

40.70m

第1層　黒褐色土、焼土粒子・ローム粒子・炭化物混入
第2層　黒色土

37号土壙

40.60m

第1層　暗褐色土、ローム粒子・焼土混入

38号土壙

40.70m

第1層　黄褐色土、焼土混入
第2層　焼土
第3層　暗黄褐色土、焼土・炭化物混入

39号土壙

40.70m

第1層　暗褐色土
第2層　焼土
第3層　赤褐色土
第4層　撹乱

40号土壙

40.70m

第1層　暗黄褐色土、焼土・炭化物混入
第2層　撹乱
第3層　焼土
第4層　赤褐色土

42号土壙

40.60m

第1層　暗褐色土、焼土・炭化物混入

43号土壙

40.70m

第1層　暗黄褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入

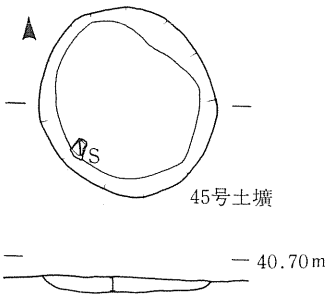
44号土壙

40.60m

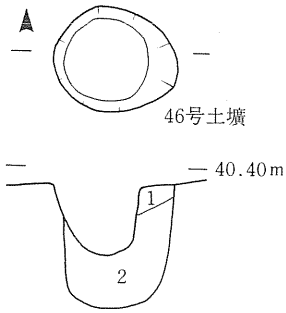
第1層　焼土

第65図　土　壙

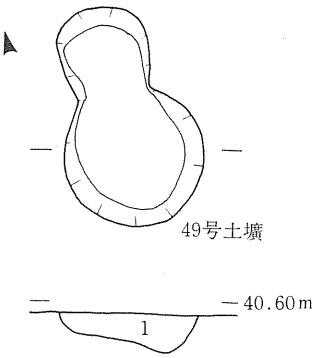
0　1m



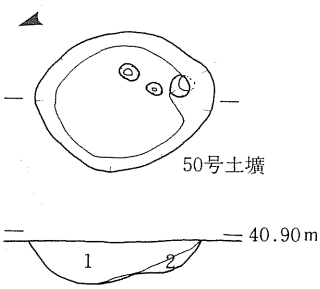
第１層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入



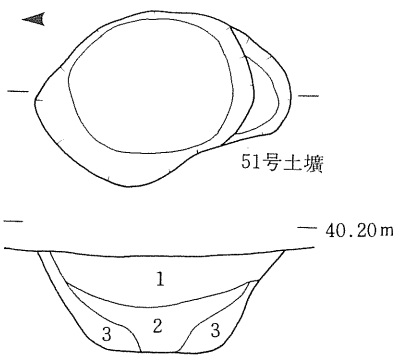
第１層　暗褐色土、白色粘土混入
第２層　黒褐色土、白色粘土混入

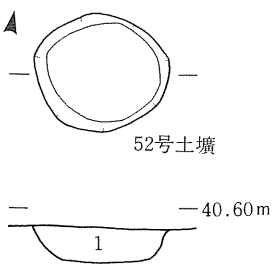


第１層　暗褐色土、炭化物・焼土混入



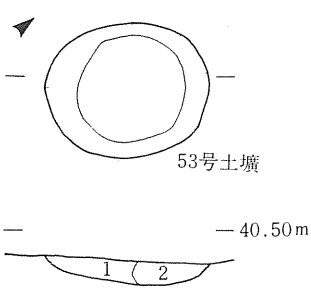
第１層　黒褐色土、ロームブロック混入
第２層　黄色土



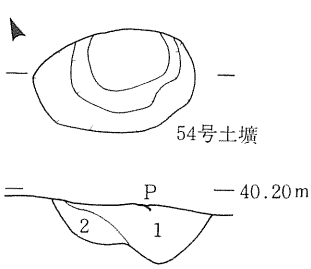


第１層　暗褐色土

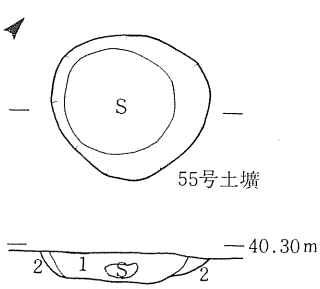
第１層　黒色腐植土、炭化物・ロームブロック・ローム粒子混入
第２層　暗褐色土、ローム粒子混入
第３層　暗黄褐色土、ローム粒子混入



第１層　黒色腐植土、炭化物混入
第２層　暗褐色土、ローム粒子混入



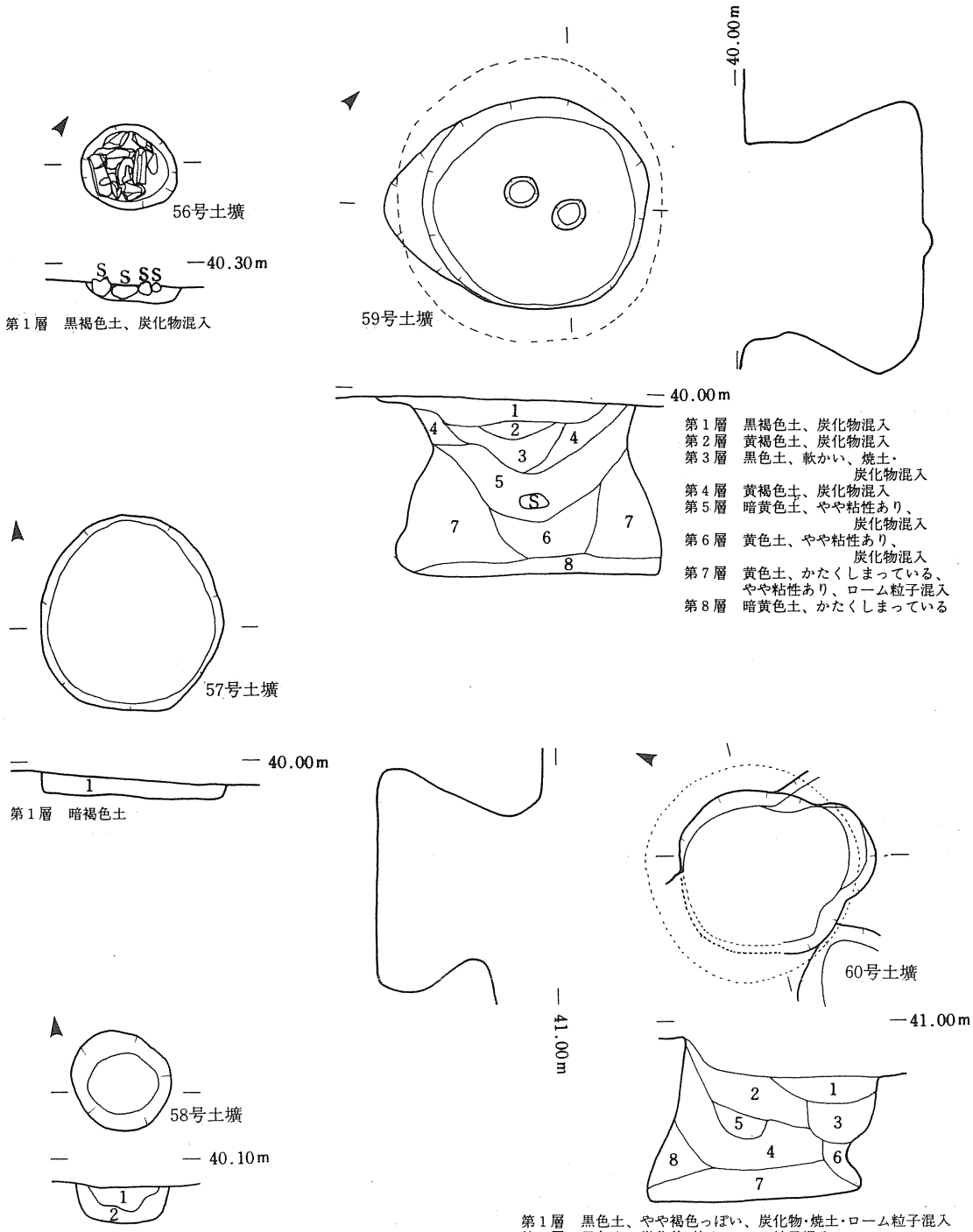
第１層　暗黄褐色土、炭化物混入
第２層　暗褐色土、ローム粒子混入



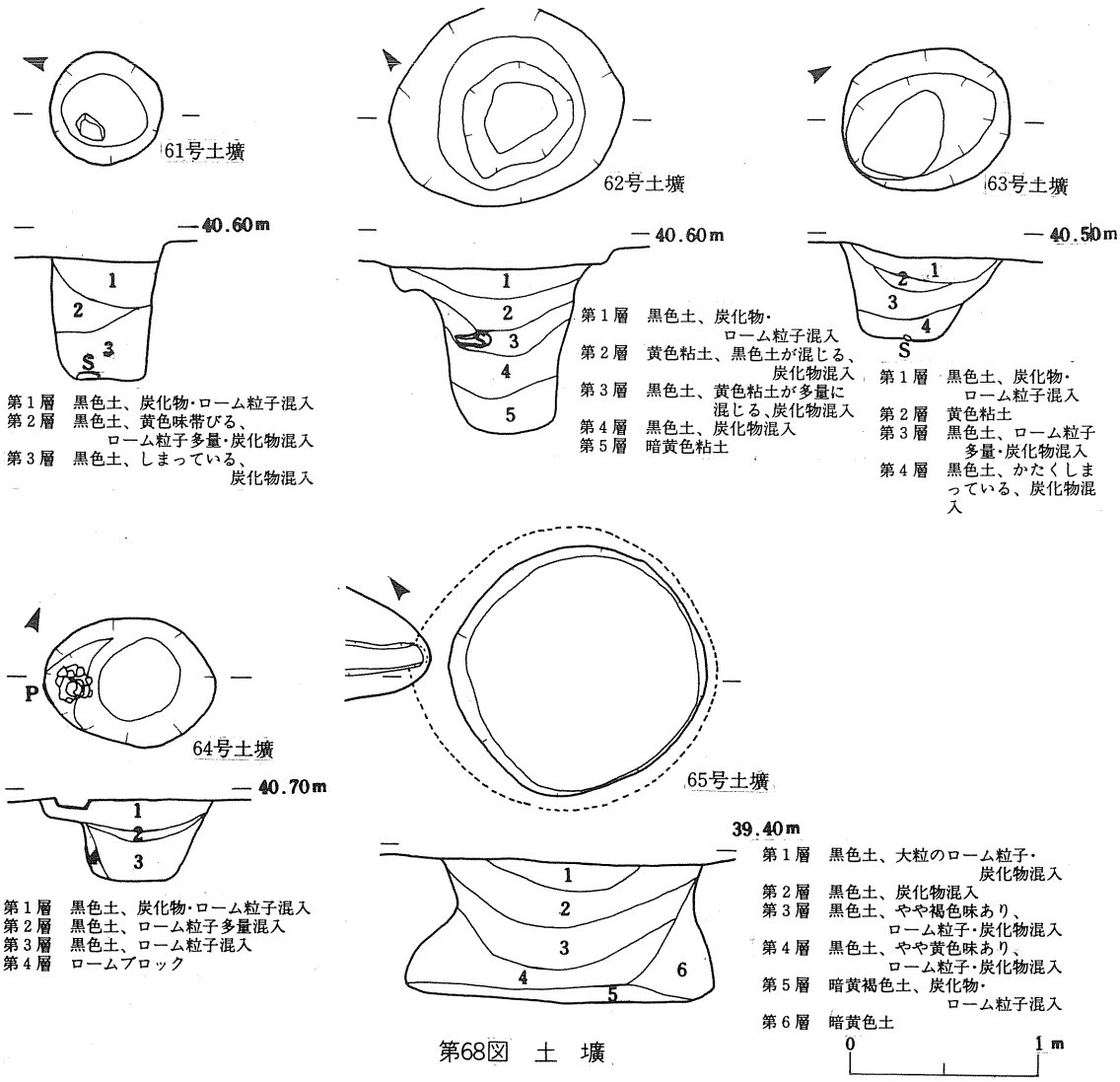
第１層　暗褐色土、ロームブロック混入
第２層　暗黄褐色土、ローム粒子混入

0　1 m

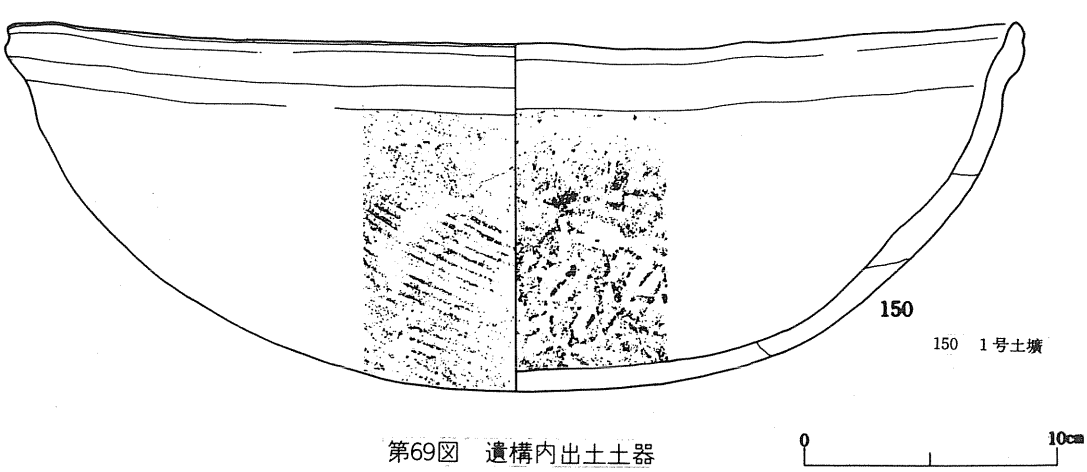
第66図　土　壙


56号土壙
40.30m
第1層　黒褐色土、炭化物混入
59号土壙
40.00m
40.00m
第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　黄褐色土、炭化物混入
第3層　黒色土、軟かい、焼土・炭化物混入
第4層　黄褐色土、炭化物混入
第5層　暗黄色土、やや粘性あり、炭化物混入
第6層　黄色土、やや粘性あり、炭化物混入
第7層　黄色土、かたくしまっている、やや粘性あり、ローム粒子混入
第8層　暗黄色土、かたくしまっている
57号土壙
40.00m
第1層　暗褐色土
60号土壙
41.00m
41.00m
58号土壙
40.10m
第1層　黒色腐植土、炭化物・焼土混入
第2層　暗黄褐色土、ローム粒子混入
第1層　黒色土、やや褐色っぽい、炭化物・焼土・ローム粒子混入
第2層　黒色土、炭化物・焼土・ローム粒子混入
第3層　褐色土、焼土多量・炭化物混入
第4層　黒色土、軟かい、炭化物混入
第5層　ロームブロック
第6層　ロームブロック
第7層　黒色土、ややしまっている、炭化物混入
第8層　ロームブロック
0
1m

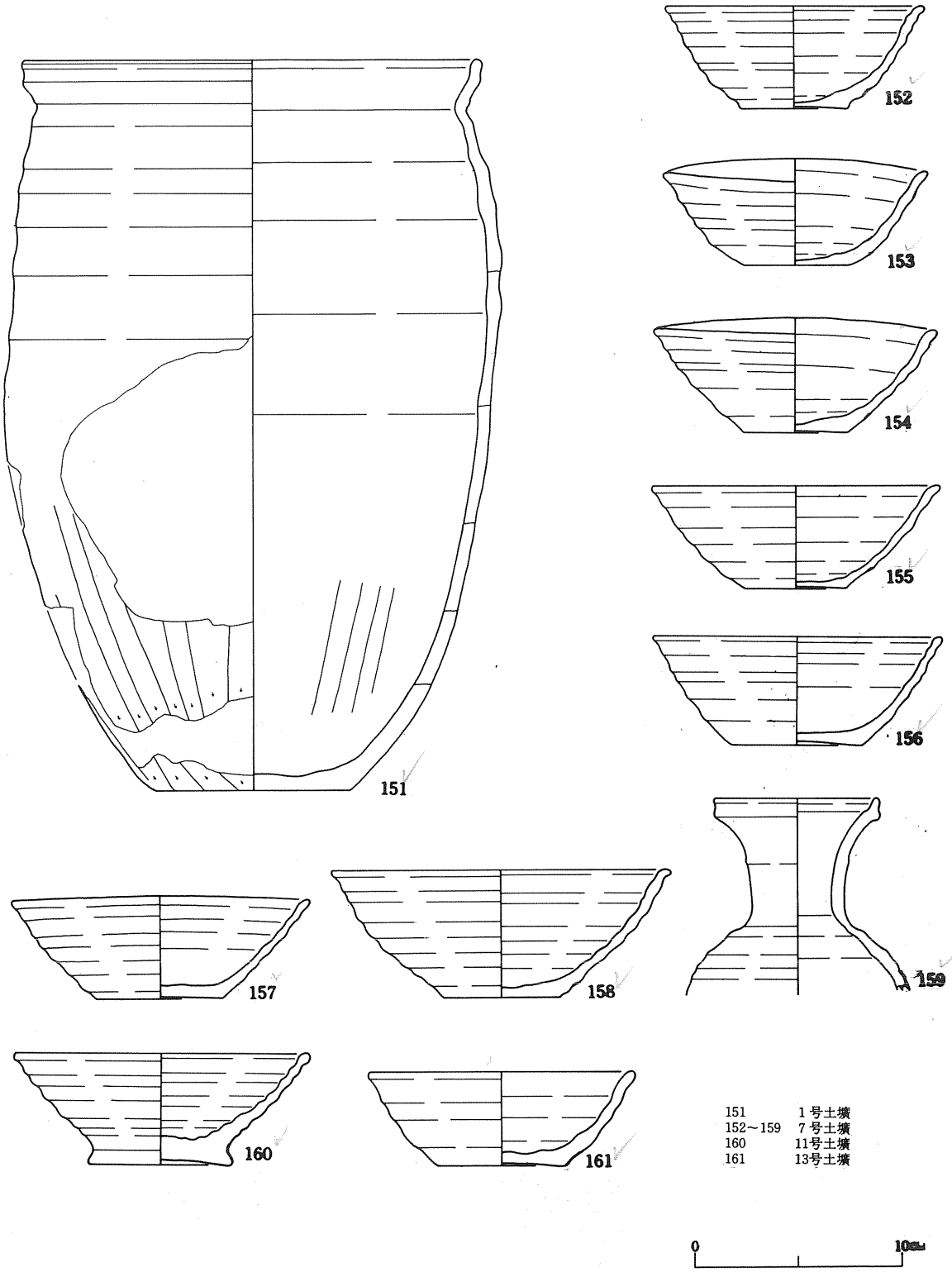
第67図　土　壙



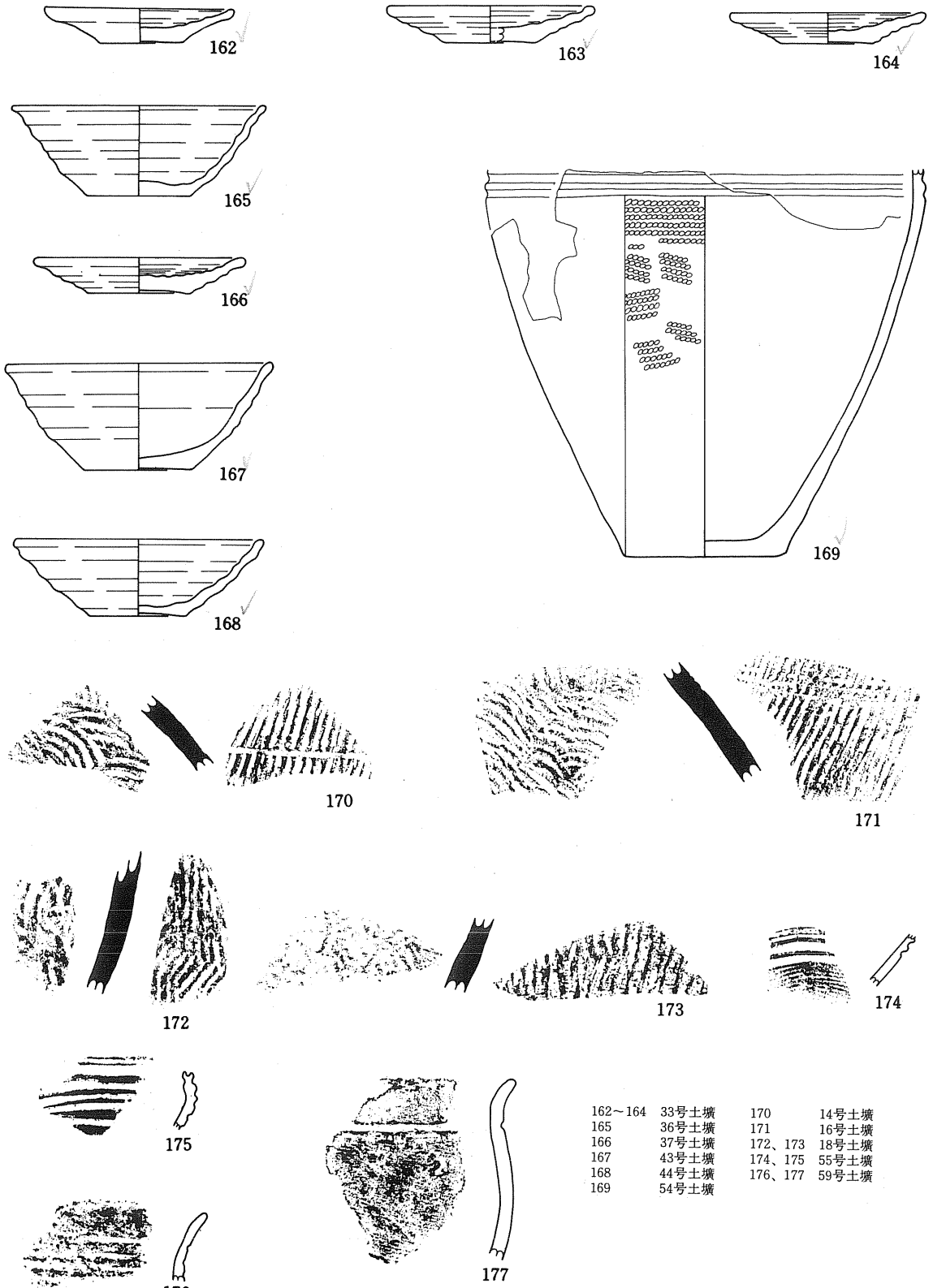
第68図　土　壙



第69図　遺構内出土土器

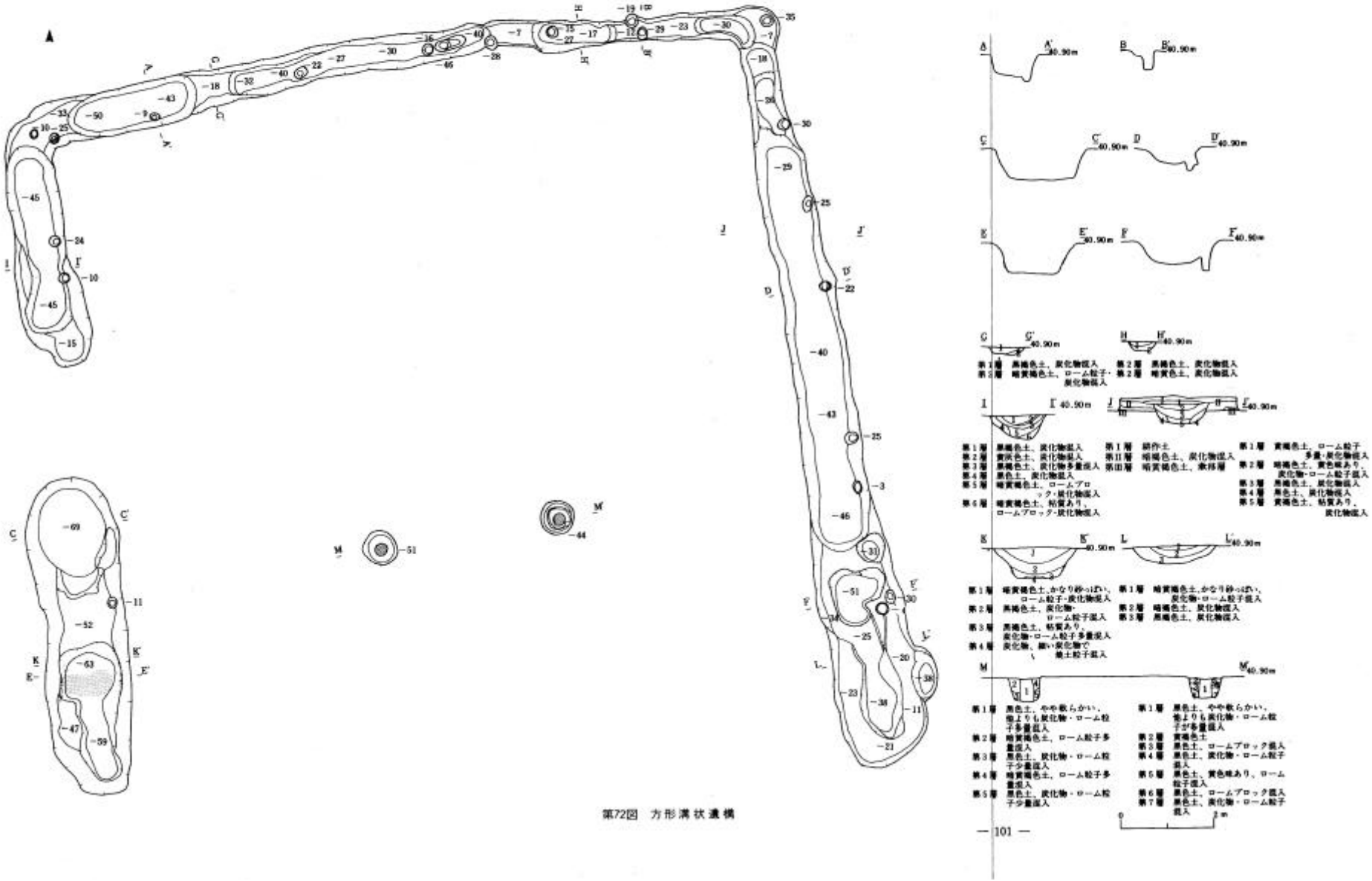


第70図　遺構内出土土器



162～164	33号土壙	170	14号土壙
165	36号土壙	171	16号土壙
166	37号土壙	172、173	18号土壙
167	43号土壙	174、175	55号土壙
168	44号土壙	176、177	59号土壙
169	54号土壙		

第71図　遺構内出土土器


A
A'
40.90m
B
B'
40.90m
C
C'
40.90m
D
D'
40.90m
E
E'
40.90m
F
F'
40.90m
G
G'
40.90m
H
H'
40.90m
第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　黒褐色土、炭化物混入
第3層　暗黄褐色土、ローム粒子・炭化物混入
第2層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　暗黄色土、炭化物混入
I
I'
40.90m
J
J'
40.90m
第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　黄灰色土、炭化物混入
第3層　黒褐色土、炭化物多量混入
第4層　黒色土、炭化物混入
第5層　暗黄褐色土、ロームブロック・炭化物混入
第6層　暗黄褐色土、粘質あり、ロームブロック・炭化物混入
第1層　耕作土
第II層　暗褐色土、炭化物混入
第III層　暗黄褐色土、東移層
第1層　黄褐色土、ローム粒子多量・炭化物混入
第2層　暗褐色土、黄色味あり、炭化物・ローム粒子混入
第3層　黒褐色土、炭化物混入
第4層　黒色土、炭化物混入
第5層　黄褐色土、粘質あり、炭化物混入
K
K'
40.90m
L
L'
40.90m
第1層　暗黄褐色土、かなり砂っぽい、ローム粒子・炭化物混入
第2層　黒褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第3層　黒褐色土、粘質あり、炭化物・ローム粒子多量混入
第4層　炭化物、細い炭化物で地土粒子混入
第1層　暗黄褐色土、かなり砂っぽい、炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　黒褐色土、炭化物混入
M
M'
40.90m
第1層　黒色土、やや軟らかい、他よりも炭化物・ローム粒子多量混入
第2層　暗黄褐色土、ローム粒子多量混入
第3層　黒色土、炭化物・ローム粒子少量混入
第4層　暗黄褐色土、ローム粒子多量混入
第5層　黒色土、炭化物・ローム粒子少量混入
第1層　黒色土、やや軟らかい、他よりも炭化物・ローム粒子が多量混入
第2層　黄褐色土
第3層　黒色土、ロームブロック混入
第4層　黒色土、炭化物・ローム粒子混入
第5層　黒色土、黄色味あり、ローム粒子混入
第6層　黒色土、ロームブロック混入
第7層　黒色土、炭化物・ローム粒子混入
0
2m

第72図　方形溝状遺構

方形溝状遺構（第72図）

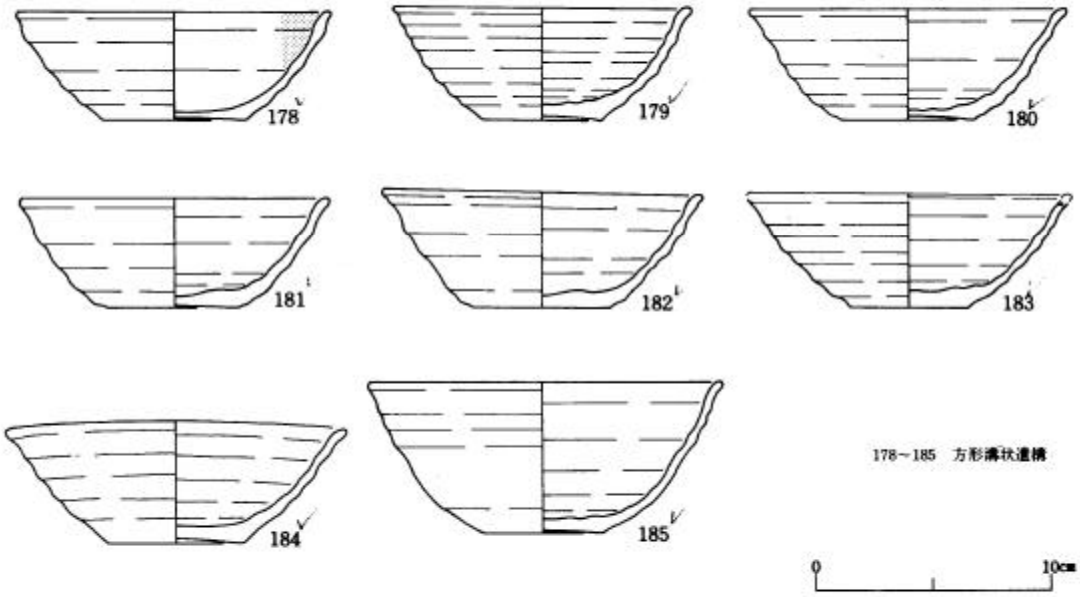
調査区の中央部で検出された。

「コ」の字状をなす溝状の遺構で、内側には２個の柱穴が検出された。溝は東西軸18ｍ、南北軸16ｍ、幅45～200㎝、深さ７～69㎝で、南辺には検出されない。断面形は「Ｕ」字状・鍋底状・平底をなし、底面は凹凸がみられ、特に北辺の溝は深浅が著しい。溝の中には径20～30㎝、深さ９～35㎝のピットが、2.5～３ｍのほぼ等間隔で検出された。西辺の溝は中程が途切れ、この途切れた部分より南側の溝の側面の一部は、両側が火熱を受けて赤変している。この焼けた部分の底面は平坦で、炭化物が１～３㎝堆積していた。「コ」の字状をなす溝状遺構の内側には径75㎝、深さ44～51㎝の掘り方と、径26㎝の柱痕の認められる柱穴が２個検出された。この柱穴は北辺の溝に平行し、東西軸は西側の柱穴が西辺の溝の内側より5.6ｍ、東側の柱穴が東辺の溝の内側より5.4ｍで、柱間は3.8ｍである。

出土遺物

土器（第73図178～185）

178～185は覆土出土である。178は内黒土師器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、内面黒色処理が施される。底部より内湾しながら立ち上がり、内面にミガキが施される。179～185は赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整である。底部より内湾しながら立ち上がり、184はかなりいびつである。

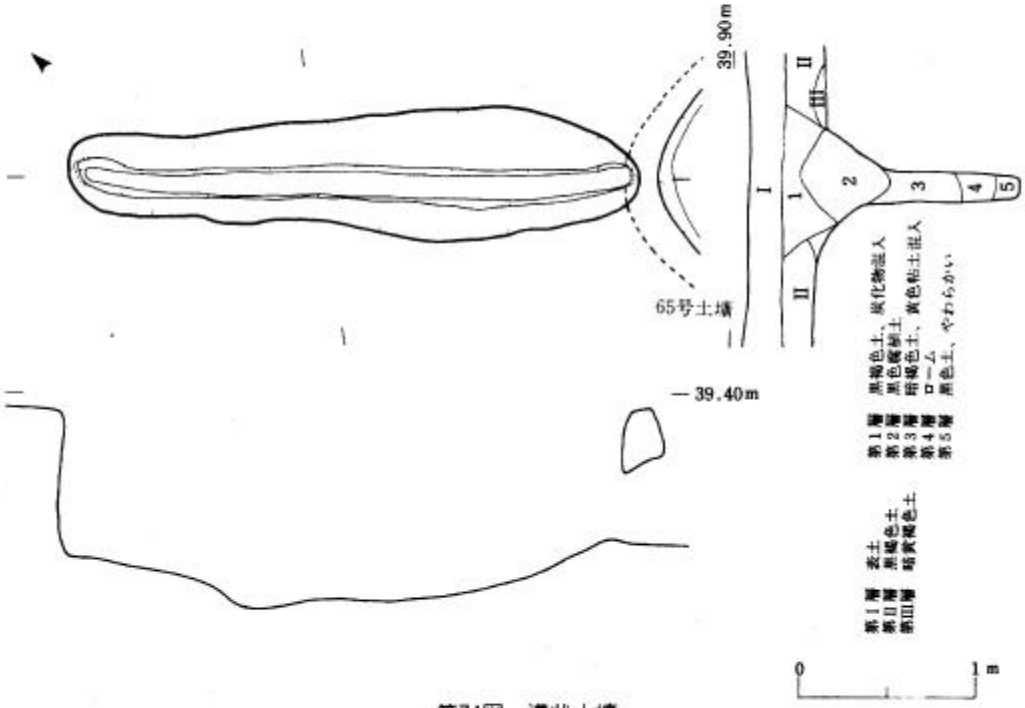


第73図　遺構内出土土器

溝状土壙（第74図）

調査区の北西部、北西方向に突き出した舌状台地のほぼ先端部で検出された。

プランは長軸3.2ｍ、短軸50～75cmの溝状を呈し、65号土壙に切られている。確認面からの深さは1.1ｍで、縦断面は両端が若干壁外へ張り出し、横断面は「Ｙ」字状をなす。出土遺物はない。



第74図　溝状土壙

溝跡（第80図、付図）

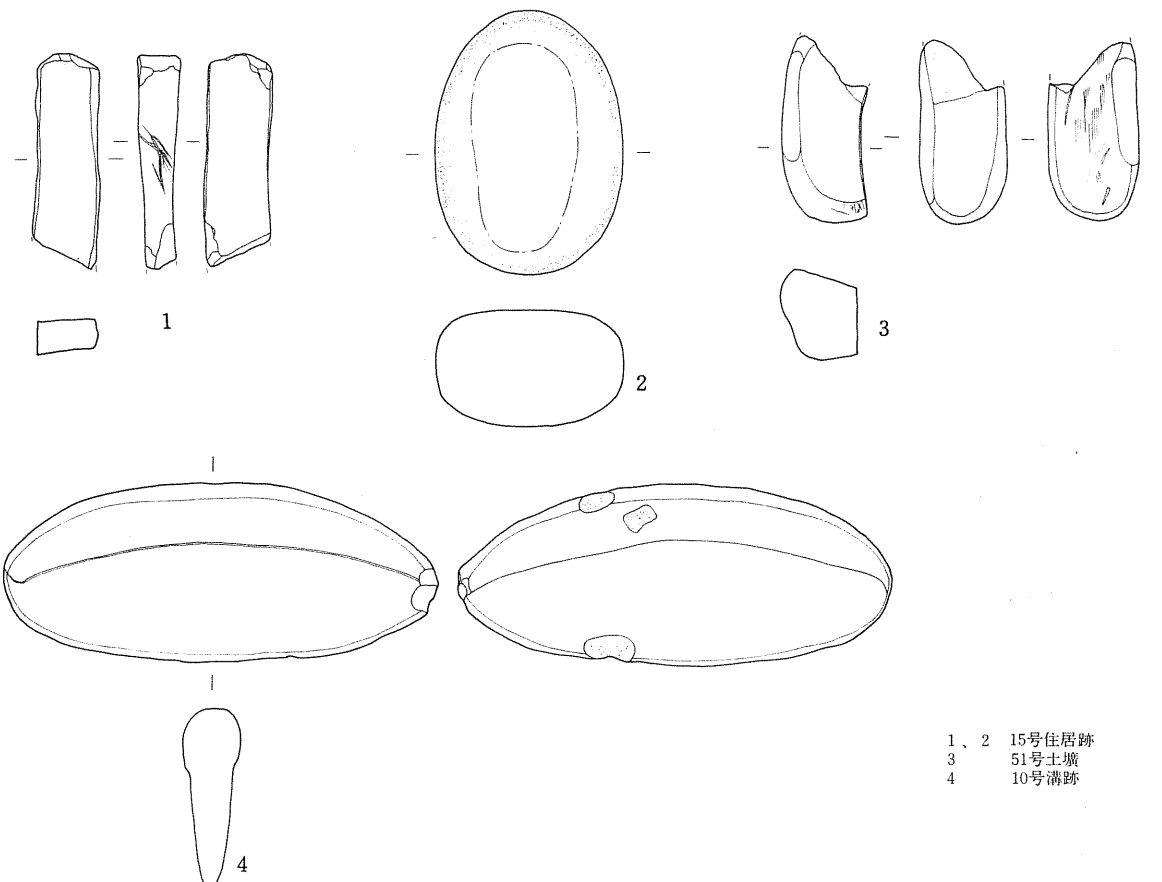
１～15号溝跡は台地を南東、北西方向に走る溝である。１～４号溝跡は平行して検出され、幅40～130cm、確認面からの深さは最深が27cmで、調査区西側は比較的浅く、ローム面で検出されない部分もある。４、７～９号住居跡を切っており、４号住居跡付近は途切れているようである。１、２号溝跡は南東側のトレンチ・調査区及び北西側のトレンチで検出され、北西へ突出する台地の縁辺部まで確認された。３、４号溝跡は南東側のトレンチ・調査区及び北西側のトレンチで検出され北西へ突出する台地の縁辺部まで確認され、現存する長さは456ｍである。２、３号溝跡は直線的で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦で堅いが、１、４号溝跡は比較的曲線的で、壁はゆるく立ち上がり、底面は丸味があり、２、３号溝跡より軟かい。５、６号溝跡は幅50～170cm、確認面からの深さは15～20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦で堅いが、５号溝跡の30号住居跡付近の壁はゆるく立ち上がる。両溝は途中で交差し、６号溝跡が５号溝跡・30号住居跡を切っている。６号溝跡には５号溝跡と交差する付近に径20cm、深さ10cm前後のピットが検出された。７～14号溝跡は調査区の東側で検出され、比較的短い。幅20～70cm、確認面からの深さは５～15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦で堅い。９号溝跡は蛇行し、３、４号溝跡に切られ、15号

溝跡は30号住居跡を切っている。16号溝跡は１、２号溝跡と直交するように検出されたが、切り合いは不明である。幅20～30cm、確認面からの深さは10cmで、断面は「U」字状を呈する。

出土遺物

石器（第75図４）

４は10号溝跡の覆土出土である。半円状をなし、中程から刃部にかけて両面を磨って加工し、自然面との境には段が付く。刃部は丸味があり、鋭くない。側面の一端が欠けており、石質は安山岩である。



第75図　遺構内出土石器

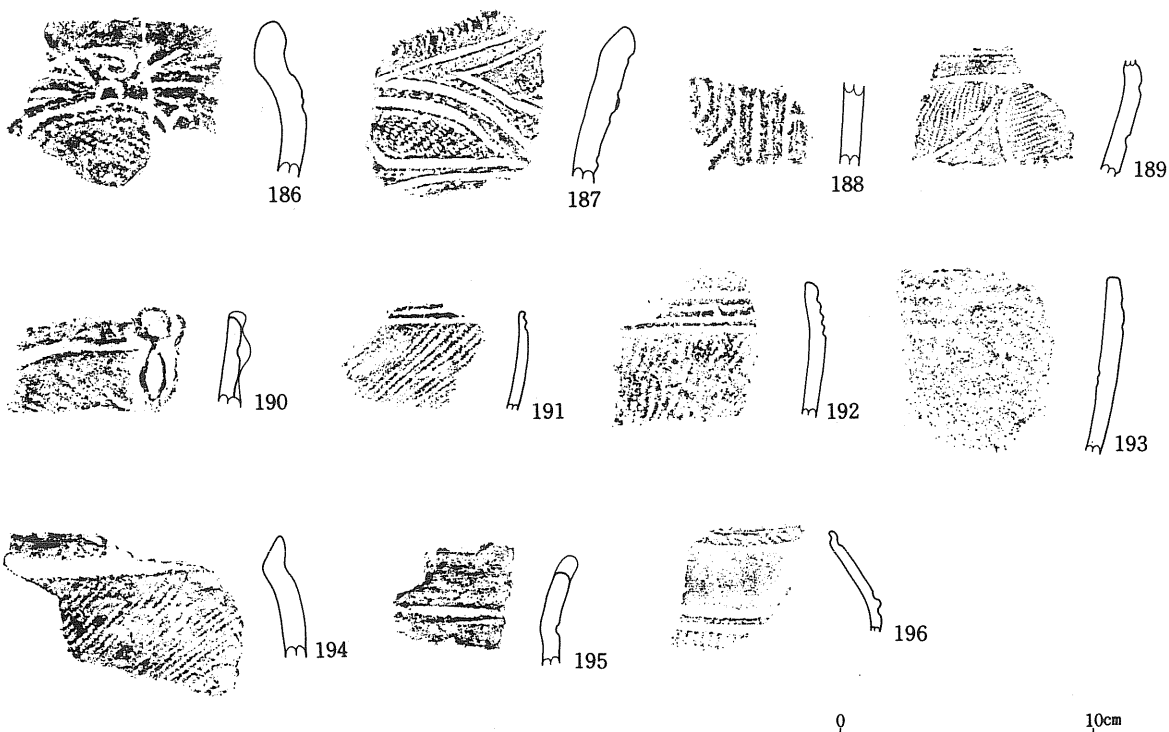
遺構外出土土器

遺構外より出土した土器を縄文・弥生時代、平安時代に大別し、文様と器形について分類した。

縄文・弥生時代（第76図186～196）

186は口縁部に細い粘土紐を貼り付け、その両側に撚糸圧痕文を施すものである。撚糸圧痕による円形文もみられ、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。深鉢形で、口縁部はキャリパー状をなす。187は口縁部に粘土紐を貼り付け、その両側に沈線を施すものである。沈線は頸部・口唇部及び粘土紐に沿うようにも施され、口唇部には撚糸圧痕による刻目文がみられ、地文はＬＲ単節

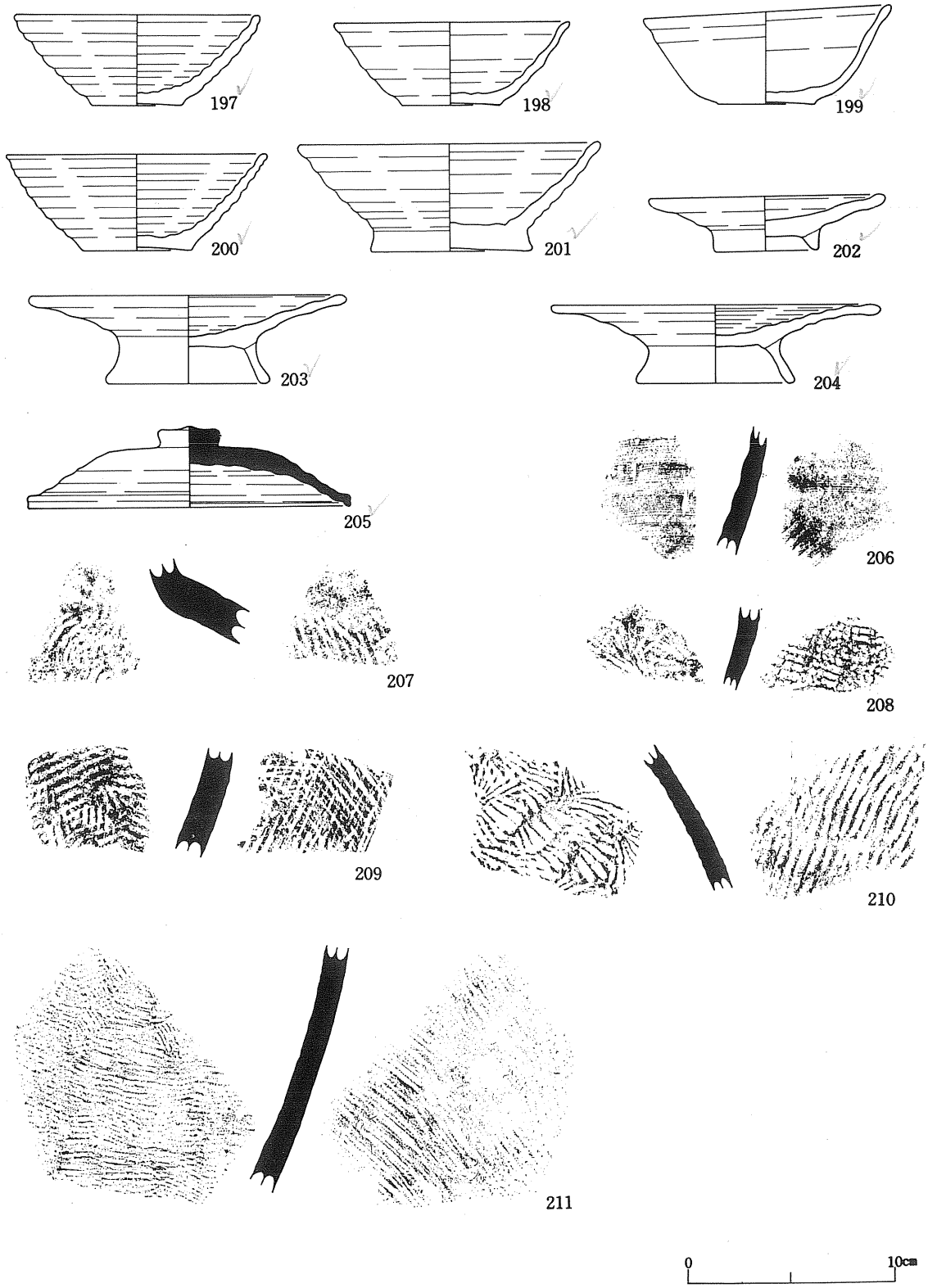
斜縄文（横位回転）である。深鉢形で、口縁部がゆるく外反する。188は撚糸文を施した後に、沈線を直線・曲線的に施すものである。深鉢形をなす。189は沈線区画の磨消帯を有するもので、地文はＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。深鉢形をなす。190は粘土紐を貼り付けて連鎖状文を施すもので、口縁部に沈線が巡り、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。深鉢形をなす。191は口縁部に平行沈線を施すもので、地文はＬＲ単節斜縄文（様位回転）である。192は口縁部に４条の平行沈線を施し、上から２条目の沈線に刻みを入れて工字文風にしてある。口唇部に斜めに刻み目を施し、地文はＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。鉢形をなす。193は刷毛目調整痕の認められるもので、甕形をなす。194は口縁部が無文帯をなすもので、地文はＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。甕形をなし、口縁部が外反する。195は頸部に１条の沈線が巡るもので、波状口縁である。甕形をなし、口縁部がゆるく外反する。196は口縁上部に１条、頸部に２条の沈線が巡り、その中間を磨消しするもので、口縁部内面にも１条の沈線が巡る。地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）で、口縁上部にも残る。



第76図　遺構外出土土器

平安時代（第77図197～211）

197～201は赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り、無調整で、底部より内湾しながら立ち上がる。199はいびつで、摩滅が著しく、201は底部が厚く作られている。202～204は赤褐色土器台付皿である。202は摩滅により底部切り離しが不明で、切り離し後に台を付け、台の内側には刺突が施される。203、204は底部切り離し回転糸切りで、切り離し後に台を付けている。205は須

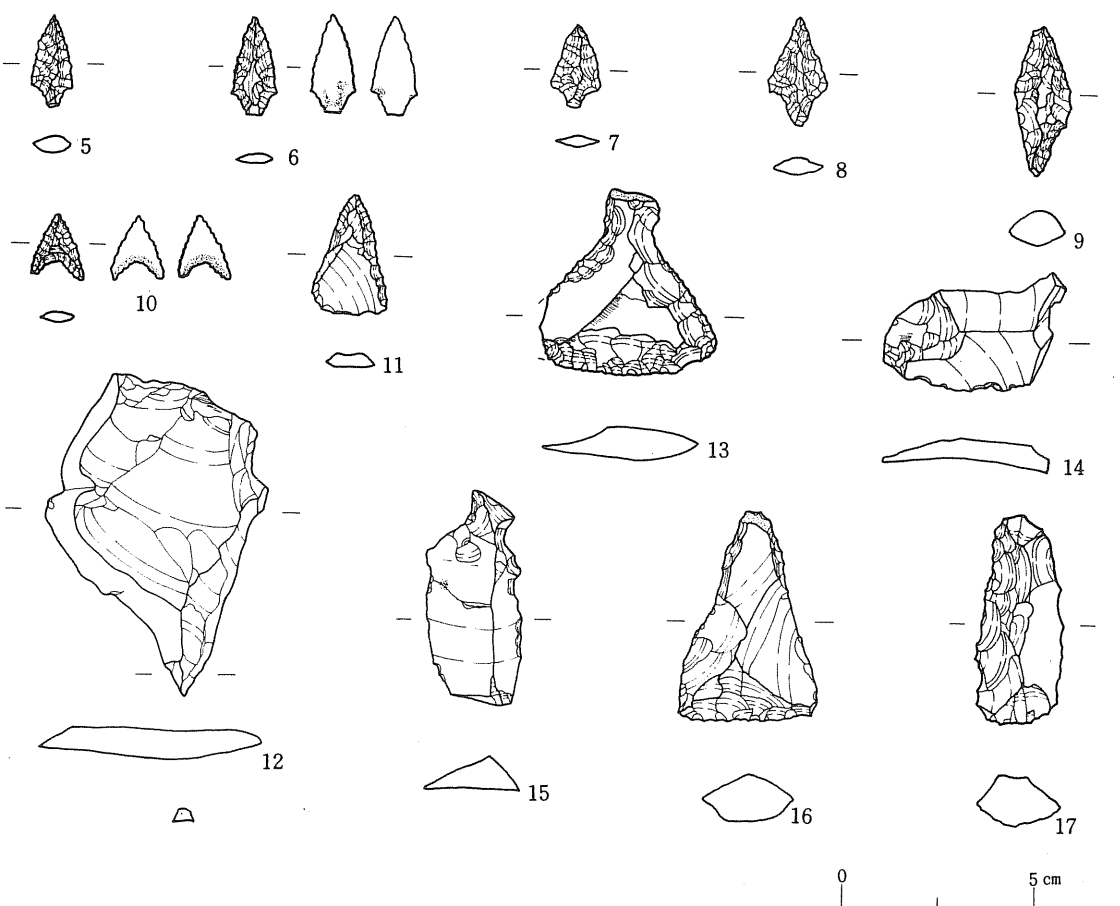


第77図　遺構外出土土器

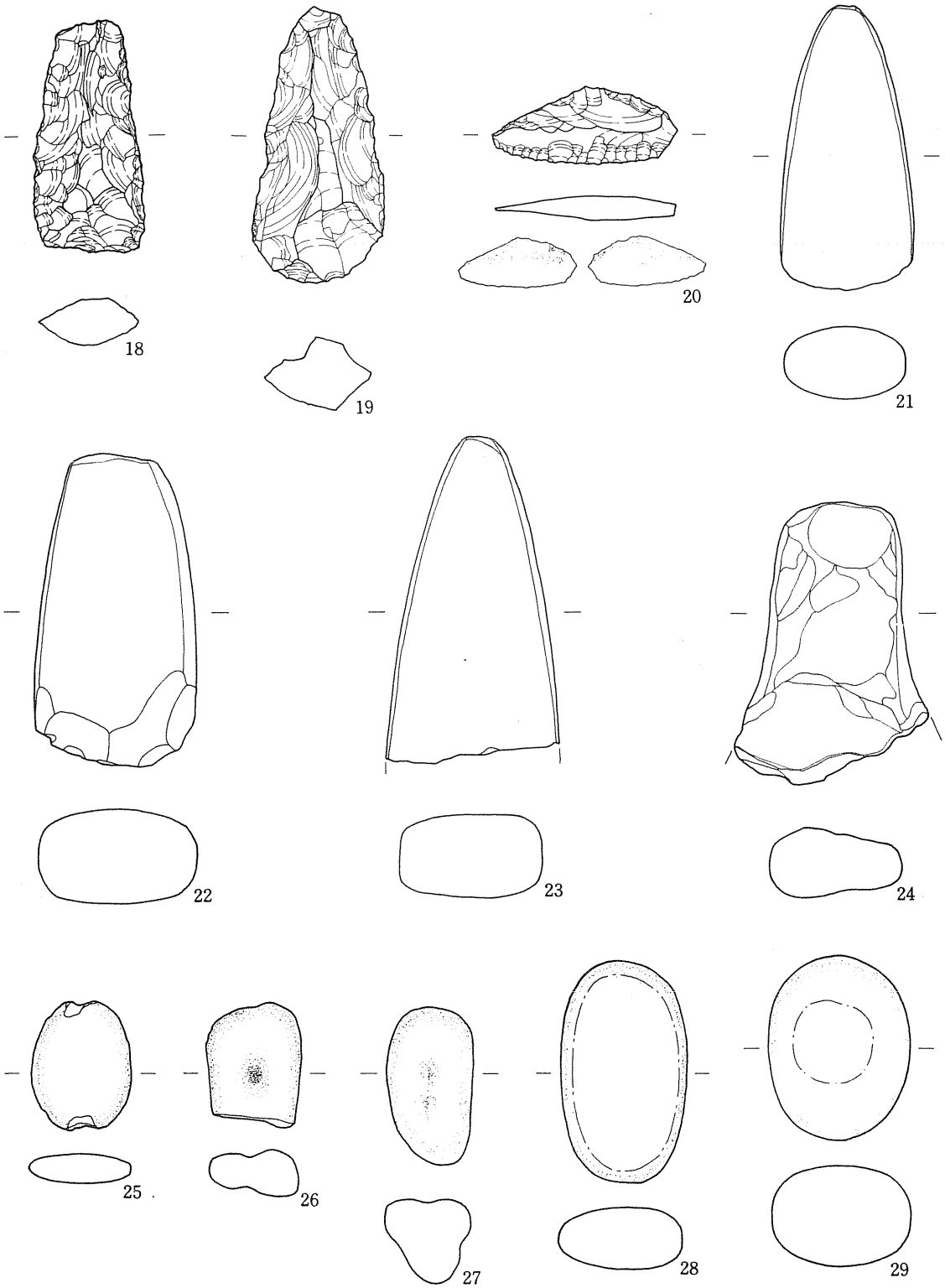
恵器蓋である。切り離しは不明で、天井部から体部にかけて回転ヘラケズリ調整を施し、宝珠状のツマミを有する。内面はすべすべしており硯に転用したと考えられる。206は須恵器壺である。ロクロ整形で、胴部外面下方には平行叩き板痕が認められる。207～211は須恵器甕である。外面は平行・格子状の叩き板痕、内面は平行・同心円状のアテ板痕が認められ、209の外面は平行叩き板痕が格子目状に、210の内面は扇形の放射状アテ板痕が認められ、211の外面には自然釉がみられる。

遺構外出土石器（第78、79図5～29）

5～11は石鏃で、6、10の茎部にはアスファルトが付着する。石質は硬質頁岩である。12は石錐で、石質は硬質頁岩である。13～15は石匙で、横型のものと縦型のものがある。石質は硬質頁岩である。16～19はヘラ状石器である。左右対称で両面加工であるが、16は刃部のみ片面加工で撥形をなす。石質は硬質頁岩である。20は鋸歯縁石器である。半月形をなし、両面加工で、上半にアスファルトが付着する。石質は硬質頁岩である。21～23は磨製石斧である。21は比較的小形で、22、23は破損品である。石質は凝灰岩である。24は打製石斧の破損品と考えられ、石質は粘板岩である。25は石錘で、偏平な自然石の両端を打ち欠いている、26、27はくぼみ石である。くぼみ部が26は両面に、27は3面に認められる。28、29は磨石・敲石で、29の側面に敲打痕が認められる。



第78図　遺構外出土石器



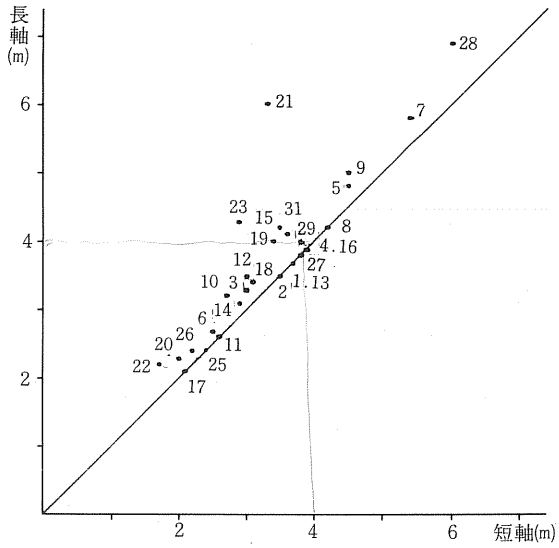
第79図　遺構外出土石器

ま と め

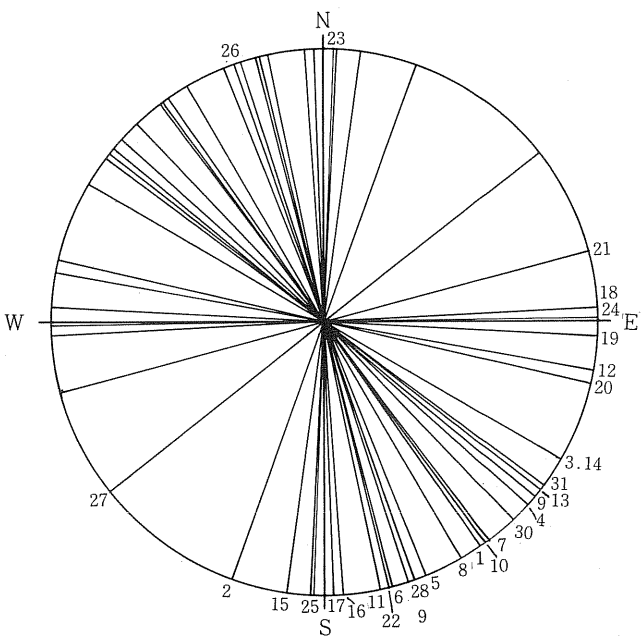
遺構について

前述したように本遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡31軒、竪穴遺構８軒、土壙65基（縄文・弥生時代16基、平安期49基）、方形溝状遺構１基、溝状土壙１基、溝跡16条である。本台地上で平安期の住居跡が集落として確認されたのは初めてである。

竪穴住居跡については第80図に示してあるように、平面形は方形が多く28軒（一部周壁が確認されないが方形を呈すると思われるもの２軒）、長方形３軒であり、大きさは２～４ｍの規模である。住居跡の主軸方向は第81図に示してあるように比較的まばらであるが、南東－北西方向のものが多く、カマドは南東方向のものが多い。住居跡で重複するものはなく、各住居跡間における新旧関係は明確でない。これは遺物からも言えることである。カマドのないものを竪穴遺構として扱ったが、住居跡との関連、配置については不明である。



第80図　住居跡の規模



※番号の付いている位置はカマドの付いている方向を示す。

第81図　住居跡の主軸方向

平安期の土壙（49基）については、壙底、側面が火熱を受けているものが13基確認されている。しかし、その用途、性格については不明である。

調査区中央部で検出された方形溝状遺構については比較検討する資料が見当らない。溝の中のピットは 2.5～３ｍの間隔で位置し、何らかの施設を想定できるが、性格については不明であり、溝との関係についても言及できない。溝からの出土遺物（赤褐色土器坏）は、他の遺構出土遺物と同様のものである。

台地の北東部を北西－南東方向に平行して走る溝については、出土遺物等がなく、時期、性格については不明である。

遺物について

平安期の出土遺物は、土師器、須恵器、赤褐色土器、土製品、石器、鉄製品等である。

土師器の器種は、坏、甕である。坏はロクロ成形と手づくねがあり、ロクロ成形の坏は底部切り離し回転糸切り、無調整のもので、内面黒色処理を施し、雑なミガキのみられるものである。須恵器の器種は、坏、蓋、壺、甕である。坏はロクロ成形で、底部切り離し回転糸切り、無調整であるが、1点のみ回転へら切り、無調整のものがある。赤褐色土器は、坏、皿、台付皿、浅鉢、壺、甕である。坏はロクロ成形で、底部切り離し回転糸切り、無調整である。

以上、遺構と遺物について概略して述べた。本遺跡は、台地上において平安期の住居跡が最も多く検出された。周辺遺跡では、坂ノ上F遺跡(註1)で2軒、湯ノ沢B遺跡(註2)で1軒、野形遺跡(註3)で3軒、深田沢遺跡(註4)で6軒（うちカマドのないものが2軒）、下堤A遺跡(註5)で4軒、下堤B遺跡(註6)で3軒、下堤D遺跡(註7)で3軒の検出であり、本遺跡が中心的な性格にあると推測される。前述の遺跡は遺構、遺物ともに類似するもので、年代的に大差はない。以上のことから周辺遺跡も含めて9～10世紀頃の年代が考えられる。

註1．「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書　坂ノ上F遺跡」
秋田市教育委員会　1985

註2．「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書　湯ノ沢B遺跡」
秋田市教育委員会　1983

註3．「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書　野形遺跡」
秋田市教育委員会　1984

註4．「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書　深田沢遺跡」
秋田市教育委員会　1985

註5．現在発掘調査中である。

註6．現在発掘調査中である。

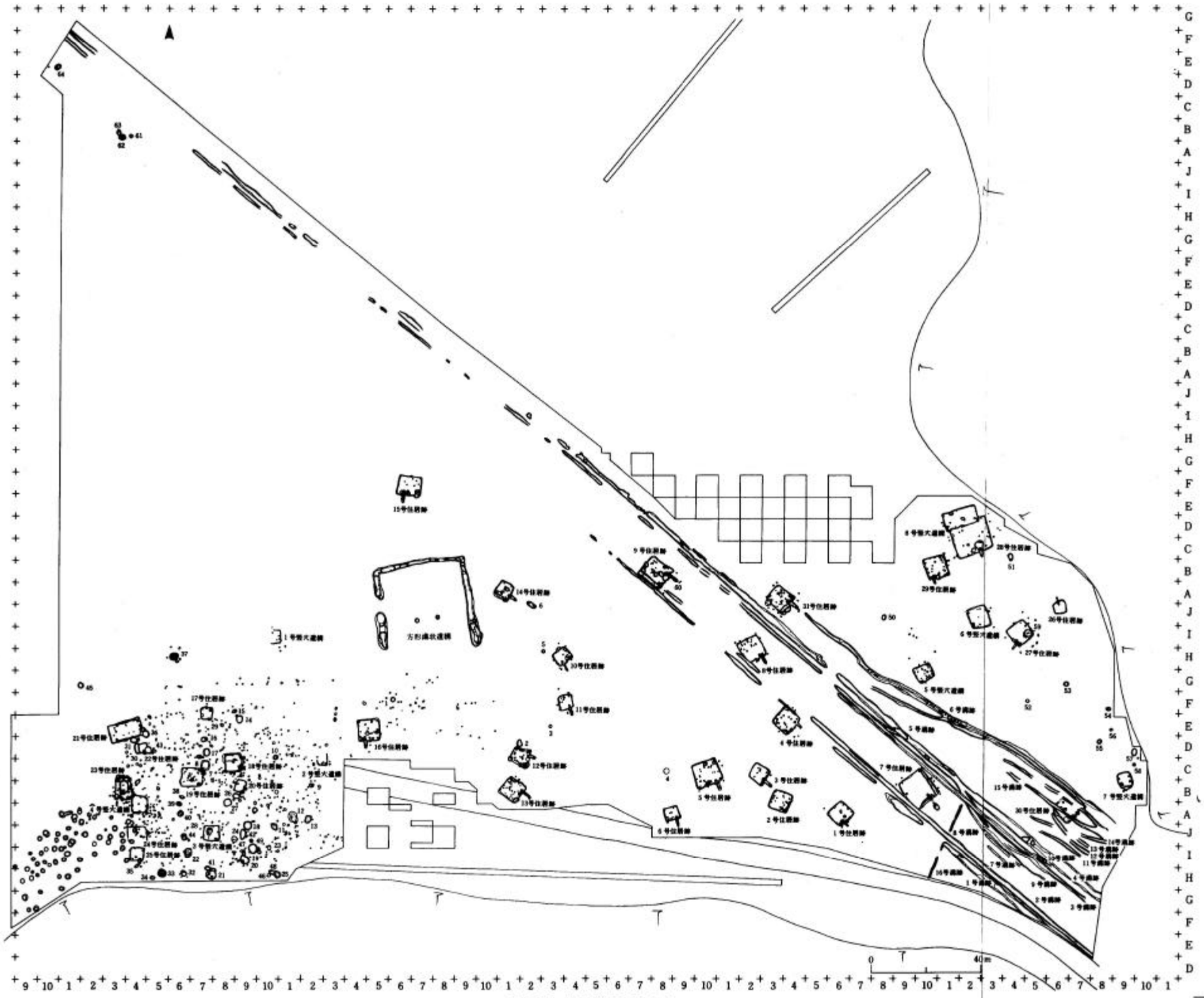
註7．「下堤D遺跡発掘調査報告書」　秋田市教育委員会　1982

参考文献

秋田県教育委員会、払田柵跡調査事務所：「払田柵跡　昭和50年度発掘調査概要」　1976

鹿角市教育委員会：「高市向館跡発掘調査報告書」　鹿角市文化財調査資料22　1982

高橋　学　　：「奈良、平安時代の竪穴住居跡復元－カマドの類型化作業を通じて－」
秋田考古学　第38号　　秋田考古学協会　1984



第82図　遺構配置図

1 号住居跡（北西→）

2 号住居跡（北→）

図版 1

3 号住居跡（北西→）

4 号住居跡（北西→）

5 号住居跡（北→）

6 号住居跡（北→）

図版 3

7 号住居跡（北西→）

8 号住居跡（北→）

9 号住居跡（北西→）

10号住居跡（北→）

図版 5

11号住居跡（北→）

12号住居跡（西→）

13号住居跡（北西→）

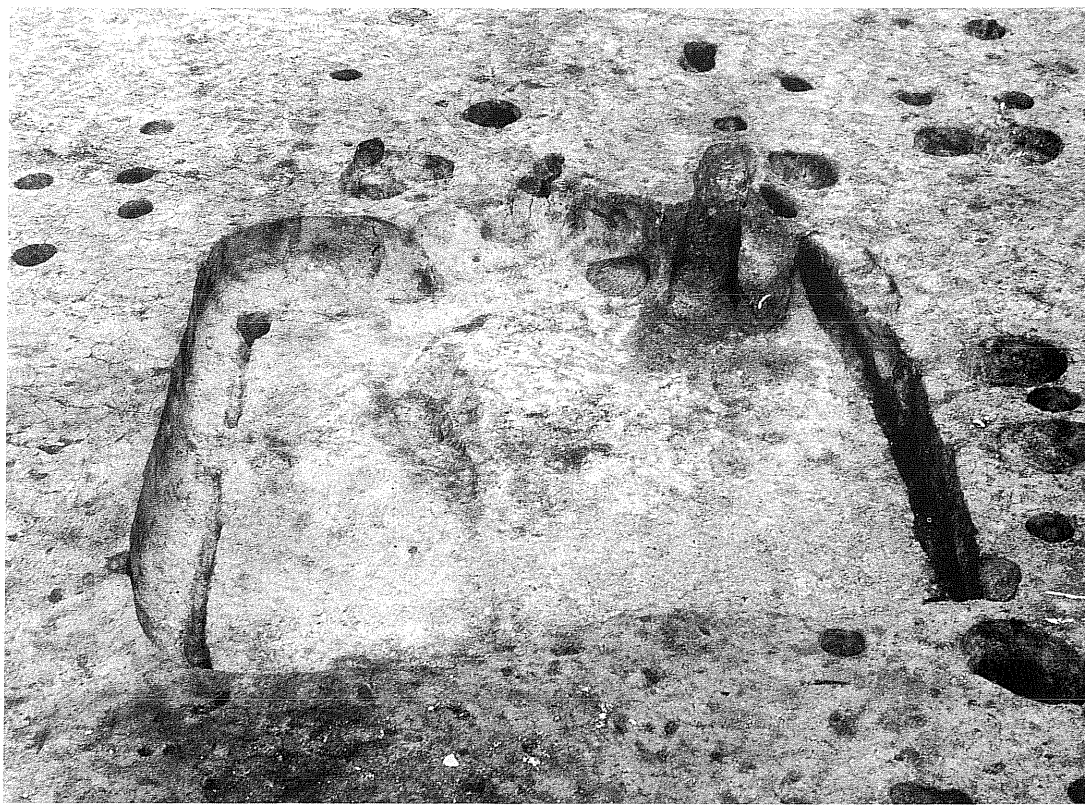
14号住居跡（北西→）

図版 7

15号住居跡（北→）

16号住居跡（北→）

17号住居跡（北→）



18号住居跡（西→）

19号住居跡（西→）

20号住居跡（西→）

21号住居跡（西→）

22号住居跡（北→）

図版11